

道草

夏目漱石

青空文庫

一

健三けんぞうが遠い所から歸つて来て駒込こまごめの奥に世帯しやたいを持ったのは東京を出てから何年目になるだろう。彼は故郷の土を踏む珍らしさのうちに一種の淋さびしみさを感じた。

彼の身体からだには新らしく後あとに見捨てた遠い国の臭においがまだ付着していた。彼はそれを忌いんだ。一日も早くその臭を振り落ふるさなければならぬと思つた。そうしてその臭のうちに潜ひそんでいる彼の誇りと満足にはかえつて気が付かなかつた。

彼はこうした気分を有もつた人になつて落付おちつきのない態度で、

千駄木せんだぎから追分おいわけへ出る通りを日に二返ずつ規則のように往来した。

ある日小雨こさめが降った。その時彼は外がい套とうも雨具も着けずに、ただ傘を差しただけで、何時もの通りを本郷ほんごうの方へ例刻に歩いて行つた。すると車屋の少しさきで思い懸けない人にはたりと出会つた。その人は根津権現ねづこんげんの裏門の坂を上あがつて、彼と反対に北へ向いて歩いて来たものと見えて、健三が行手を何気なく眺めた時、十間位先から既に彼の視線に入つたのである。そうして思わず彼の眼めをわき外そらさせたのである。

彼は知らん顔をしてその人の傍そばを通り抜けようとした。けれども彼にはもう一遍この男の眼鼻立を確かめる必要があつた。それ

で御互が二、三間の距離に近づいた頃また眸ひとみをその人の方角に向けた。すると先方ではもう疾とくに彼の姿を凝じつと見詰めていた。

往来は静しずかであつた。二人の間にはただ細い雨の糸が絶間なく落ちていだけなので、御互が御互の顔を認めるには何の困難もなかった。健三はすぐ眼をそらしてまた真正面を向いたまま歩き出した。けれども相手は道端に立ち留まつたなり、少しも足を運ぶ気色けしきなく、じつと彼の通り過ぎるのを見送っていた。健三はその男の顔が彼の歩調につれて、少しずつ動いて回るのに気が着いた位であつた。

彼はこの男に何年会わなかつたろう。彼がこの男と縁を切つたのは、彼がまだ廿歳はたちになるかならない昔の事であつた。それから

今日^{こんにち}までに十五、六年の月日が経っているが、その間彼らはついで一度も顔を合せた事がなかったのである。

彼の位地も境遇もその時分から見るとまるで変つていた。黒い髭^{ひげ}を生して山高帽^{はや}を被^{かぶ}った今の姿と坊主頭の昔の面影^{おもかげ}とを比べて見ると、自分でさえ隔世の感が起らないとも限らなかった。しかしそれにしては相手の方があまりに変らな過ぎた。彼はどう勘定しても六十五、六であるべきはずのその人の髪^{なげ}の毛が、何故今でも元の通り黒いのだろうと思つて、心のうちで怪しんだ。帽子なしで外出する昔ながらの癖を今でも押通しているその人の特色も、彼には異な気分を与える媒^な介^{かだち}となつた。

彼は固^{もと}よりその人に出会う事を好まなかつた。万一出会つても

その人が自分より立派な服装なりでもしていてくれれば好いと思つていた。しかし今目まのあたり前見たその人は、あまり裕福な境遇にいるとは誰が見ても決して思えなかつた。帽子を被らないのは当人の自由としても、羽織はおりなり着物なりについて判断したところ、どうしても中流以下の活計を営んでいる町家ちようかの年寄としか受取れなかつた。彼はその人の差していた洋傘こうもりが、重そうな毛繻子けじゆすであつた事にまで気が付いていた。

その日彼は家へ歸つても途中で会つた男の事を忘れ得なかつた。折々は道端へ立ち止まつて凝と彼を見送つていたその人の眼付に悩まされた。しかし細君には何にも打ち明けなかつた。機嫌のよくない時は、いくら話したい事があつても、細君に話さないのが

彼の癖であつた。細君も黙っている夫に對しては、用事の外決して口を利かない女であつた。

二

次の日健三はまた同じ時刻に同じ所を通つた。その次の日も通つた。けれども帽子を被らない男はもうどこからも出て来なかつた。彼は器械のようにまた義務のように何時もの道を往たり来たりした。

こうした無事の日が五日続いた後、^{あと}六日目の朝になつて帽子を被らない男は突然また根津権現の坂の蔭から現われて健三を脅や

かした。それがこの前とほぼ同じ場所で、時間も殆どこの前と違わなかった。

その時健三は相手の自分に近付くのを意識しつつ、何時もの通り器械のようにまた義務のように歩こうとした。けれども先方の態度は正反対であつた。何人をも不安にしなければやまないほどの注意を双^{そうが}眼に集めて彼を凝視した。隙^{すき}さえあれば彼に近付こうとするその人の心が曇^{どん}よりした眸^{ひとみ}のうちにありありと読まれた。出来るだけ容赦なくその傍^{そば}を通り抜けた健三の胸には変な予覚が起つた。

「とてもこれだけでは済むまい」

しかしその日家^{うち}へ帰つた時も、彼はついに帽子を被らない男の

事を細君に話さずにしまった。

彼と細君と結婚したのは今から七、八年前で、もうその時分にはこの男との関係がとくの昔に切れていたし、その上結婚地が故郷の東京でなかったの、細君の方ではじかにその人を知るはずがなかった。しかし噂^{うわさ}としてだけならあるいは健三自身の口から既に話していたかも知れず、また彼の親類のものから聞いて知つていないとも限らなかった。それはいずれにしても健三にとって問題にはならなかった。

ただこの事件に関して今でも時々彼の胸に浮んでくる結婚後の事実が一つあった。五、六年前彼がまだ地方にいる頃、ある日女文字で書いた厚い封書が突然彼の勤め先の机の上へ置かれた。そ

の時彼は変な顔をしてその手紙を読んだ。しかしいくら読んでも読んでも読み切れなかった。半紙廿枚ばかりへ隙間なく細字さいじで書いたものの、五分の一ほど眼を通した後、彼はついにそれを細君の手に渡してしまった。

その時の彼には自分宛あてでこんな長い手紙をかけた女の素性を細君に説明する必要があつた。それからその女に関聯かんれんして、是非ともこの帽子を被らない男を引合に出す必要もあつた。健三はそうした必要にせまられた過去の自分を記憶している。しかし機嫌きげん買かいな彼がどの位綿密な程度で細君に説明してやったか、その点になると彼はもう忘れていた。細君は女の事だからまだ判然はつきり然ぜん覚だえているだろうが、今の彼にはそんな事を改めて彼女に問い訊

して見る気も起らなかった。彼はこの長い手紙を書いた女と、この帽子を被らない男とを一所に並べて考えるのが大嫌だいきらひだった。それは彼の不幸な過去を遠くから呼び起す媒な介かとなるからであつた。

幸い彼の目下の状態はそんな事に屈くつ托たくしている余裕を彼に与えなかつた。彼は家うちへ歸つて衣服を着換えると、すぐ自分の書齋へ這入はいつた。彼は始終その六畳敷の狭い畳の上に自分のする事が山のように積んであるような氣持でいるのである。けれども實際からいうと、仕事をするよりも、しなければならぬという刺戟しげきの方が、遥かに強く彼を支配していた。自然彼はいらいらしなければならなかつた。

彼が遠い所から持つて来た書物の箱をこの六畳の中で開けた時、彼は山のような洋書の裡うちに胡坐あぐらをかいて、一週間も二週間も暮らしていた。そうして何でも手に触れるものを片端かたはしから取り上げでは二、三頁ページずつ読んだ。それがため肝心の書齋の整理は何時まで経つても片付かなかつた。しまいていにこの体ていたらくを見るに見かねた或友人あるが来て、順序にも冊数にも頓とんじやく着なく、あるだけの書物をさっさと書棚の上に並べてしまった。彼を知っている多数の人は彼を神経衰弱だと評した。彼自身はそれを自分の性質だと信じていた。

健三は實際その日その日の仕事に追われていた。家へ帰つてからも氣樂に使える時間は少しもなかった。その上彼は自分の読みたいものを読んだり、書きたい事を書いたり、考えたい問題を考へたりしたかった。それで彼の心は殆んど余裕というものを知らなかった。彼は始終机の前にこびり着いていた。

娯樂の場所へも滅多に足を踏み込めない位忙がしがつている彼が、ある時友達から謡の稽古を勧められて、体よくそれを断わつたが、彼は心のうちで、他人にはどうしてそんな暇があるのだらうと驚ろいた。そうして自分の時間に対する態度が、あたかも守銭奴のそれに似通っている事には、まるで氣がつかなかった。

自然の勢い彼は社交を避けなければならなかった。人間をも避けなければならなかった。彼の頭と活字との交渉が複雑になればなるほど、人としての彼は孤独に陥らなければならなかった。彼は臃^{おぼろげ}氣にその淋^{さび}しさを感じる場合さえあった。けれども一方ではまた心の底に異様の熱塊があるという自信を持っていた。だから索^{さく}寞^{ぼく}たる曠^{あらの}野の方角へ向けて生活の路^{みち}を歩いて行きながら、それがかえって本来だとばかり心得ていた。温かい人間の血を枯らしに行くのだとは決して思わなかった。

彼は親類から変人扱いにされていた。しかしそれは彼に取って大した苦痛にもならなかった。

「教育が違うんだから仕方がない」

彼の腹の中には常にこういう答弁があつた。

「やつぱり手前味噌よ」
てまえみそ

これは何時でも細君の解釈であつた。

気の毒な事に健三はこうした細君の批評を超越する事が出来なかつた。そういわれる度たびに氣不味きまずい顔をした。ある時は自分を理解しない細君を心しんから忌々いまいましく思つた。ある時は叱しかり付けた。またある時は頭かごなしに遣やり込めた。すると彼の癩かん癩しやくが細君の耳に空威張からいばりをする人の言葉のように響いた。細君は「手前味噌」の四字を「大風呂敷おおぶろしき」の四字に訂正するに過ぎなかつた。

彼には一人の腹違はらちがいの姉と一人の兄があるぎりであつた。親類といつたところでこの二軒より外に持たない彼は、不幸にして

その二軒ともあまり親しく往來ゆききをしていなかった。自分の姉や兄と疎遠になるという変な事實は、彼に取つても余り氣持の好いものではなかった。しかし親類づきあいよりも自分の仕事の方が彼には大事に見えた。それから東京へ歸つて以後既に三、四回彼らと顔を合せたという記憶も、彼には多少の言訳になつた。もし帽子を被かぶらない男が突然彼の行手を遮らなかつたなら、彼は何時もの通り千駄木せんだぎの町を毎日二返規則正しく往來するだけで、当分外の方角へは足を向けずにしまつたろう。もしその間あいだに身体からだの樂に出来る日曜が来たなら、ぐたりと疲れ切つた四肢ししを畳の上に横たえて半日の安息を貪むさぼるに過ぎなかつたろう。

しかし次の日曜が来たとき、彼はふと途中で二度会つた男の事

を思い出した。そうして急に思い立ったように姉の宅へ出掛けた。
姉の宅は四ツ谷よやの津つの守坂かみざかの横で、大通りから一町ばかり奥へ
引込んだ所にあつた。彼女の夫というのは健三の従兄いとこにあたる男
だから、つまり姉にも従兄であつた。しかし年齢としは同おなじ年どしか一
つ違で、健三から見ると双方とも、一廻りも上であつた。この夫
がもと四ツ谷の区役所へ勤めた縁故で、彼が其所そこをやめた今日こんにち
でも、まだ馴染なじみの多い土地を離れるのが厭いやだといつて、姉は今の
勤先に不便なものも構わず、やっぱり元の古ぼけた家に住んでいる
のである。

四

この姉は喘息持ぜんそくもちであつた。年が年中ぜえぜえいつていた。それでも生れ付が非常な癩かんしょう性しょうなので、よほど苦しくないと決して凝じつとしていなかった。何か用を拵こしらえて狭い家うちの中を始終ぐるぐる廻つて歩かないと承知しなかつた。その落付おちつきのないがさつな態度が健三の眼には如何いかにも氣の毒に見えた。

姉はまた非常に饒舌しゃべる事の好きな女であつた。そうしてその喋舌すきり方に少しも品位というものがなかつた。彼女と対坐たいざする健三はきつと苦い顔をして黙らなければならなかつた。

「これが己おれの姉なんだからなあ」

彼女と話をした後の健三の胸には何時あとでもこういう述懐が起つ

た。

その日健三は例の如くたすき襷を掛けて戸棚の中を掻きまわしているこの姉を見出した。

「まあ珍らしくよ能く来てくれたこと。さあ御敷きなさい」

姉は健三に座蒲団ざぶとんを勧めて縁側へ手を洗いに行つた。

健三はその留守に座敷のなかを見廻わした。欄間らんまには彼が子供

の時から見覚えのある古ぼけた額が懸つていた。その落款らっかんに書

いてある筒井憲つついけんという名は、たしか旗本はたもとの書家か何かで、大

変字が上手なんだと、十五、六の昔ここ此所の主人から教えられた事

を思い出した。彼はその主人をその頃は兄さん兄さんと呼んで始

終遊びに行つたものである。そうして年からいえば叔父甥おじおいほどの

相違があるのに、二人して能く座敷の中で相撲をとっては姉から怒おこられたり、屋根へ登って無花果いちじくを撈もいで食って、その皮を隣の庭へ投げたため、尻しりを持ち込まれたりした。主人が箱入りのコンパスを買って遣やるといつて彼を騙だましたなり何時まで経っても買ってくれなかったのを非常に恨めしく思つた事もあつた。姉と喧嘩けんかをして、もう向うから謝罪あやまつて来ても勘忍してやらないと覺悟を極きめたが、いくら待つていても、姉が詫あやまらないので、仕方なしにこちらからのこのこ出掛けて行つたくせに、手持無沙汰てもちぶさたなので、向うで御這入おはいりというまで、黙つて門かどぐち口に立つていた滑稽こっけいもあつた。……

古い額を眺めた健三は、子供の時の自分に明らかな記憶の探照

燈を向けた。そうしてそれほど世話になった姉夫婦に、今は大した好意を有つ事が出来にくくなつた自分を不快に感じた。

「近頃は身体からだの具合はどうです。あんまり非道ひどく起る事もありませんか」

彼は自分の前に坐すわつた姉の顔を見ながらこう訊たずねた。

「ええ有難う。御蔭さまで陽氣が好いもんだから、まあどうかこうか家の事だけは遣つてゐるんだけど、——でもやつぱり年が年だからね。とても昔しのようにがせいに働く事は出来ないのさ。昔健ちゃんあすの遊びに来てくれた時分にや、随分尻しりツ端折ぱしよりで、それこそ御釜おかまの御尻まで洗つたもんだが、今じやとてもそんな元氣はありやしない。だけど御蔭様でこう遣つて毎日牛乳も飲んでる

し……」

健三は些^さ少^{しょう}ながら月々いくらかの小遣を姉に遣^やる事を忘れなかつたのである。

「少し瘦^やせたようですね」

「なにこりや私^{あたし}の持^{もち}前^{まえ}だから仕方がない。昔から肥^{ふと}った事のない女なんだから。ヤツぱり癩^{かん}が強いもんだからね。癩で肥る事が出来ないんだよ」

姉は肉のない細い腕を捲^{まく}つて健三の前に出して見せた。大きな落ち込んだ彼女の眼の下を薄黒い半円形の暈^{かさ}が、怠^{だる}そうな皮で物^{もの}憂^{のう}げに染めていた。健三は黙つてそのぱさぱさした手の平を見詰めた。

「でも健ちゃんは立派になつて本当に結構だ。御前さんが外国へ行く時なんか、もう二度と生きて会う事は六^むずかしかうと思つてたのに、それでもよくまあ達者で歸つて来られたのね。御父^{おとつ}さんや御母^{おつか}さんが生きて御出^{たま}だつたらさぞ御喜びだろう」

姉の眼にはいつか涙が溜^{たま}つていた。姉は健三の子供の時分、

「今に姉さんに御金が出来たら、健ちゃんに何でも好きなものを買つて上げるよ」と口^{くちくせ}癖^{くせ}のようにいつていた。そうかと思うと、

「こんな偏^{へんくつ}窟^{くつ}じゃこの子はとても物にやならない」ともいった。

健三は姉の昔の言葉やら語気やらを思い浮べて、心の中で苦笑した。

五

そんな古い記憶を喚び起こすにつけても、久しく会わなかった姉の老けた様子が一層健三の眼についた。

「時に姉さんはいくつでしたかね」

「もう御婆さんさ。^{おばあ}取って一だもの御前さん^{いち}」

姉は黄色い疎^{まば}らな歯を出して笑って見せた。実際五十一とは健三にも意外であつた。

「すると私とは一廻^{わたしひとまわり}以上違うんだね。私やまた精々違つて十^{とお}か十一だと思つていた」

「どうして一廻どころか。健ちゃんとは十六違うんだよ、姉さん

は。良人^{うぢ}が羊^{さん}の三碧^{さんぺき}で姉^{あね}さんが四緑^{しろく}なんだから。健ちゃん^{けんちゃん}は慥^{たし}か七赤^{しちせき}だったね」

「何だか知らないが、とにかく三十六ですよ」

「繰って見て御覧、きつと七赤だから」

健三はどうして自分の星を繰るのか、それさえ知らなかった。
年齢^{とし}の話はそれぎりやめてしまった。

「今日は御留守^{ごうそ}なんですか」と比田^{ひだ}の事を訊^きいて見た。

「昨夕^{ゆうべ}も宿直^{とまり}だね。なに自分の分^{ぶん}だけなら月に三度か四度^{よど}で済むんだけれども、他に頼^{たの}まれるもんだからね。それに一晩でも余計^{ひと}泊りさえすればやつぱりいくらかになるだろう、それでつい他の分^{ぶん}まで引受ける気にもなるのさ。この頃じゃあつちへ寐^ねるのここ

つちへ帰るのと、まあ半々位なものだろう。ことによると、向へむこう泊る方がかえつて多いかも知れないよ」

健三は黙つて障子の傍そばに据えてある比田の机を眺めた。硯すずりば

箱こや状じょうぶくろ袋や巻紙がきちりと行儀よく並んでいる傍に、簿記

用の帳面が赤い脊皮せがわをこちらへ向けて、二、三冊立て懸けてあつ

た。それから綺麗きれいに光った小さい算盤そろばんもその下に置いてあつた。

噂うわさによると比田はこの頃変な女に關係をつけて、それを自分の

勤め先のつい近くに囲こもっているという評ひょう番ばんであつた。宿直とまりだ

宿直だといつて宅うちへ帰らないのは、あるいはそのせいじやなかる

うかと健三には思えた。

「比田さんは近頃どうです。大分年だいぶんを取ったから元とは違つて真ま

じめ
面目になつたでしよう」

「なにやツぱり相変らずさ。ありや一人で遊ぶために生れて来た男なんだから仕方がないよ。やれ寄席だ、やれ芝居だ、やれ相撲だつて、御金さえありや年が年中飛んで歩いてるんだからね。でも奇体なもんで、年のせいだか何だか知らないが、昔に比べると少しは優やさしくなつたようだよ。もとは健ちゃんも知つてる通りの始末で、随分烈はげしかつたもんだがね。蹴けつたり、敲たたいたり、髪の毛を持つて座敷中引摺廻ひっずりしたり……」

「その代り姉さんも負けてる方じゃなかったんだからな」

「なに妾あかしや手出しなんかした事あ、ついの一い度だつてありやしな
い」

健三は勝気な姉の昔を考え出してつい可笑しくなった。二人の立ち廻りは今姉の自白するように受身のものばかりでは決してなかった。ことに口は姉の方が比田に比べると十倍も達者だった。それにしてもこの利かぬ気の姉が、夫に騙だまされて、彼が宅へ帰らない以上、きつと会社へ泊っているに違いないと信じ切っているのが妙に不憫ふびんに思われて来た。

「久しぶりに何か奢おごりましょうか」と姉の顔を眺めながらいった。「ありがと、今御鮓おすしをそういつたから、珍らしくもあるまいけれども、食べてつて御くれ」

姉は客の顔さえ見れば、時間に関係なく、何か食わせなければ承知しない女であつた。健三は仕方がないから尻しりを落おち付けてゆつ

くり腹の中に持つて来た話を姉に切り出す氣になつた。

六

近頃の健三は頭を余計遣い過ぎるせいか、どうも胃の具合が好
くなかつた。時々思い出したように運動して見ると、胸も腹もか
えつて重くなるだけであつた。彼は要心して三度の食事以外には
なるべく物を口へ入れないように心掛けていた。それでも姉の悪
強強いには敵かなわなかつた。

「海苔卷のりまきなら身体からだに障さわりやしないよ。折角姉さんが健ちゃんに御
馳走ちそうしようと思つて取つたんだから、是非食べて御いくれな。厭いやか

い」

健三は仕方なしに旨くもない海苔巻を頬張つて、好い加減烟草で荒らされた口のうちをもぐもぐさせた。

姉が余り饒舌るので、彼は何時までも自分のいいたい事がいえなかった。訊きたい問題を持つていながら、こう受身な会話ばかりしているのが、彼には段々むず痒くなつて来た。しかし姉にはそれが一向通じないらしかつた。

他に物を食わせる事の好きなのと同時に、物を遣る事の好きな彼女は、健三がこの前賞めた古ぼけた達磨の掛物を彼に遣ろうかといひ出した。

「あんなものあ、宅にあつたつて仕方がないんだから、持つて御

出でよ。なに比田ひだだつて要りやしないやね、汚ない達磨なんか」

健三は貰うとも貰わないともいわずにただ苦笑していた。する

と姉は何か秘密話でもするように急に調子を低くした。

「実は健ちゃん、御前さんが帰つて来たら、話そう話そうと思つて、つい今日まで黙つてたんだがね。健ちゃんも帰りたてでさぞ

忙がしかろうし、それに姉さんが出掛けて行くにしたところで、

御住おすみさんがいちや、少し話し悪い事にくだしね。そうかつて、手紙を

書こうにも御存じの無筆だろう……」

姉の前まえ置は長たらしくもあり、また滑稽こっけいでもあつた。小さ

い時分いくら手習をさせても記憶おぼえが悪くつて、どんなに平易やさしい

字も、とうとう頭へ這入はいらずじまいに、五十の今日こんにちまで生きて

来た女だと思つと、健三にはわが姉ながら気の毒でもありませんから恥ずかしくもあつた。

「それで姉さんの話つてえな、一体どんな話なんです。実は私も今日は少し姉さんに話があつて来たんだが」

「そうかいそれじゃ御前さんの方から先へ聴くのが順だったね。何故早く話さなかつたの」

「だつて話せないんだもの」

「そんなに遠慮しないでもいいやね。姉弟の間じゃないか、

御前さん」

姉は自分の多弁が相手の口を塞いでいるのだという明白な事実には毫も気が付いていなかった。

「まあ姉さんの方から先へ片付けましょう。何ですか、あなたの話ってというのは」

「実は健ちゃんにはまことに気の毒で、いい悪いいんだけど、あたしも段々年を取って身体は弱くなるし、それに良人うちがあの通りの男で、自分一人さえ好けりや女房なんかどうなつたつて、己おれの知った事じゃないつて顔をしているんだから。——尤もも月々の取とり高だかが少ない上に、交つき際あいもあるんだから、仕方がないといえ
ばそれまでだけれどもね……」

姉のいう事は女だけに随分曲りくねっていた。なかなか容易な事で目的地へ達しそうになかったけれども、その主意は健三によく解った。つまり月々遣る小遣こづかいをもう少し増ましてくれというの

だろうと思った。今でさえそれをよく夫から借りられてしまうという話を耳にしている彼には、この請求が憐れあわでもあり、また腹立たしくもあつた。

「どうか姉さんを助けると思つてね。姉さんだつてこの身体じやどうせ長い事もあるまいから」

これが姉の口から出た最後の言葉であつた。健三はそれでも厭いやだとはいいいかねた。

七

彼はこれから宅うちへ歸つて今夜中に片付けなければならぬ明日あした

の仕事をも有っていた。時間の価値というものを少しも認めないこの姉と対^{たい}坐^ざして、何時^{いつ}までも、べんべんと喋^{しゃ}舌^べっているのは、彼にとって多少の苦痛に違なかつた。彼は好^い加^い減^かに帰ろうとした。そうして帰る間際になつてやつと帽子を被^から^ぶない男の事をいい出した。

「実はこの間島田に会つたんですがね」

「へえどこで」

姉は吃^び驚^っしたような声を出した。姉は無教育な東京ものによく見るわざとらしい仰山な表情をしたがる女であつた。

「太^{おお}田^たの原^{はら}の傍^{そば}です」

「じゃ御前さんのじき近所じゃないか。どうしたい、何か言葉で

も掛けたかい」

「掛けるって、別に言葉の掛けようもないんだから」

「そうさね。健ちゃんの方から何とかいわなきや、向で口なんぞ利^きけた義理でもないんだから」

姉の言葉は出来るだけ健三の意を迎えるような調子であつた。

彼女は健三に「どんな服^{なり}装をしていたい」と訊^きき足した後で、

「じややツぱり楽でもないんだね」といった。其所^{そこ}には多少の同情も籠^{こも}っているように見えた。しかし男の昔を話し出した時にはさもさも悪^{にく}らしそうな語氣を用い始めた。

「なんぼ因^{いんごう}業だつて、あんな因業な人つたらありやしないよ。

今日が期限だから、是が非でも取つて行くつて、いくら言訳をい

つても、坐り込んで動かないんだもの。しまいにこつちも腹が立つたから、御氣の毒さま、御金はありませんが、品物で好ければ、御鍋おなべでも御釜おかまでも持つてつて下さいっていったらね、じゃ釜を持つてくつていうんだよ。あきれるじゃないか」

「釜を持つて行くつたつて、重くつてとても持てやしないでしょう」

「ところがあの業突張ごうつくばりの事だから、どんな事をして持つてかないとも限らないのさ。そらその日の御飯をあたしに炊たかせまいと思つて、そういう意地の悪い事をする人なんだからね。どうせ先へ寄つて好い事いいあないはずだあね」

健三の耳にはこの話がただの滑稽こっけいとしては聞こえなかった。

その人と姉との間に起ったこんな交渉のなかに引絡ひつからまっている古い自分の影法師は、彼に取って可笑おかしいというよりもむしろ悲しいものであつた。

「私わたしや島田に二度会つたんですよ、姉さん。これから先また何時会うか分らないんだ」

「いいから知らん顔をして御出でよ。何度会つたつて構わないじゃないか」

「しかしわざわざ彼所あそこいらを通つて、私の宅うちでも探しているんだか、また用があつて通りがかりに偶然出ツくわしたんだか、それが分らないんでね」

この疑問は姉にも解けなかった。彼女はただ健三に都合の好き

そんな言葉が無意味に使った。それが健三には空御世辞からおせじのごとく響いた。

「こちらへはその後まるで来ないんですか」

「ああこの二、三年はまるつきり来ないよ」

「その前は？」

「その前はね、ちよくちよくつてほどでもないが、それでも時々は来たのさ。それがまた可笑しいんだよ。来ると何時でも十一時頃うなぎめしでね。鰻飯うなぎめしかなにか食べさせないと決して帰らないんだからね。三度の御まんまをひと一かたけでも好いいから他ひとの家で食うちべようつていうのがつまりあの人の腹なんだよ。そのくせ服なり装なんかかなりなものを着ているんだがね。……」

姉のいう事は脱線しがちであつたけれども、それを聴いている健三には、やはり金銭上の問題で、自分が東京を去つたあとも、なお多少の交際が二人の間に持続されていたのだという見当はついた。しかしそれ以上何も知る事は出来なかつた。目下の島田については全く分らなかつた。

八

「島田は今でも元の所に住んでいるんだろうか」

こんな簡単な質問さえ姉には判^{はつきり}然答えられなかつた。健三は少し的^{あて}が外れた。けれども自分の方から進んで島田の現在の居^{いどころ}

所^ろを突き留めようとまでは思っていなかったので、大した失望も感じなかった。彼はこの場合まだそれほど^{てかず}の手数を尽す必要がないと信じていた。たとい尽すにしたところで、一種の好奇心を満足するに過ぎないとも考えていた。その上今の彼はこういう好奇心を^{けいべつ}軽蔑しなければならなかった。彼の時間はそんな事に使用するには余りに高価すぎた。

彼はただ想像の眼で、子供の時分見たその人の家と、その家の周囲とを、心のうちに思い浮べた。

其^{そこ}所には往来の片側に幅の広い大きな堀が一丁も続いていた。水の変らないその堀の中は腐った泥で不快に濁っていた。所々に蒼^{あお}い色が湧^わいて厭^{いや}な臭^{におい}さえ彼の鼻を襲った。彼はその汚^{きた}ならしい

一廓^{いっかく}を——様^{さま}の御屋敷という名で覚えていた。

堀の向う側には長屋がずっと並んでいた。その長屋には一軒に一つ位の割で四角な暗い窓が開けてあつた。石垣とすれすれに建てられたこの長屋がどこまでも続いているので、御屋敷のなかはまるで見えなかった。

この御屋敷と反対の側には小さな平家^{ひらや}が疎^{まば}らに並んでいた。古いのも新らしいのもごちやごちやに交^{まじ}つていたその町並は無論不揃^{そろ}であつた。老人の齒のように所々が空いていた。その空いている所を少しばかり買つて島田は彼の住居^{すまい}を拵^{こしら}えたのである。

健三はそれが何時出来上つたか知らなかつた。しかし彼が始めてそこへ行つたのは新築後まだ間もないうちであつた。四間^{よま}しか

ない狭い家だったけれども、木口などはかなり吟味してあるらしく子供の眼にも見えた。間取にも工夫があつた。六畳の座敷は東向で、松葉を敷き詰めた狭い庭に、大き過ぎるほど立派な御影の石燈籠が据えてあつた。

綺麗好きな島田は、自分で尻端折りをして、絶えず濡雑巾を縁側や柱へ掛けた。それから跣足になつて、南向の居間の前栽へ出て、草筆りをした。あるときは鋤を使つて、門口の泥溝も浚つた。その泥溝には長さ四尺ばかりの木の橋が懸つていた。

島田はまたこの住居以外に粗末な貸家を一軒建てた。そうして双方の家の間を通り抜けて裏へ出られるように三尺ほどの路を付

けた。裏は野とも畠とも片のつかない湿地であつた。草を踏むとじくじく水が出た。一番凹んだ所などはしよつちゆう浅い池のようになつていた。島田は追々其所へも小さな貸家を建てるつもりでいるらしかった。しかしその企ては何時までも実現されなかつた。冬になると鴨が下りるから、今度は一つ捕つてやろうなどといつていた。……

健三はこういう昔の記憶をそれからそれへと繰り返した。今其所へ行つて見たら定めし驚ろくほど變つてゐるだろうと思ひながら、彼はなお二十年前の光景を今日こんにちの事のように考えた。

「ことによると、良人では年始状位まだ出してるかも知れないよ」
健三の帰る時、姉はこんな事をいって、暗あんに比田ひだの戻るまで話

して行けと勧めたが、彼にはそれほどの必要もなかった。

彼はその日無沙汰見舞かたがた市ヶ谷の薬王寺前にいる兄の宅へも寄つて、島田の事を訊いて見ようかと考えていたが、時間の遅くなつたのと、どうせ訊いたつて仕方がないという気が次第に強くなつたのとで、それなり駒込へ歸つた。その晩はまた翌日の仕事に忙殺されなければならなかった。そうして島田の事はまるで忘れてしまった。

九

彼はまた平生の我に歸つた。活力の大部分を挙げて自分の職

業に使う事が出来た。彼の時間は静かに流れた。しかしその静かなうちには始終いらいらするものがあつて、絶えず彼を苦しめた。遠くから彼を眺めていなければならなかつた細君は、別に手の出しようもないので、澄ましていた。それが健三には妻にあるまじき冷淡としか思えなかつた。細君はまた心の中で彼とうち同じ非難を夫の上に投げ掛けた。夫の書齋で暮らす時間が多くなればなるほど、夫婦間の交渉は、用事以外に少なくなければならないはずだというのが細君の方の理窟であつた。

彼女は自然の勢い健三を一人書齋に遺して置いて、子供だけを相手にした。その子供たちはまた滅多に書齋へ這入らなかつた。たまに這入ると、きつと何か悪戯いたずらをして健三に叱しかられた。彼は

子供を叱るくせに、自分の傍^{そば}へ寄り付かない彼らに対して、やはり一種の物足りない心持を抱^{いだ}いていた。

一週間後の日曜が来た時、彼はまるで外出しなかった。気分を変えるため四時頃風呂^{ふろ}へ行つて帰ったら、急にうつとりした好^いい気持に襲われたので、彼は手足を畳の上へ伸ばしたまま、つい仮^う寐^{たね}をした。そうして晩食^{ばんめし}の時刻になつて、細君から起されるまでは、首を切られた人のように何事も知らなかった。しかし起きて膳^{ぜん}に向つた時、彼には微^{かす}かな寒気が脊筋^{せすじ}を上から下へ伝わつて行くような感じがあつた。その後で烈^{はげ}しい嚏^{くさみ}が二つほど出た。傍にいる細君は黙っていた。健三も何もいわなかつたが、腹の中ではこうした同情に乏しい細君に対する厭^{いや}な心持を意識しつつ箸^{はし}

を取った。細君の方ではまた夫が何故^{なぜ}自分に何もかも隔意なく話して、能^{のうど}働^{どう}的に細君らしく振舞わせないのかと、その方をかえつて不愉快に思つた。

その晩彼は明らかに多少風邪^{かぜ}気味であるという事に気が付いた。用心して早く寐^ねようと思つたが、ついしかけた仕事に妨げられて、十二時過まで起きていた。彼の床に入る時には家内のものはもう皆な寐^くていた。熱い葛湯^{くずゆ}でも飲んで、発汗したい希望をもつていた健三は、やむをえずそのまま冷たい夜具^{うち}の裏^{もく}に潜り込んだ。彼は例にない寒さを感じて、寐付が大変悪かった。しかし頭腦の疲労はほどなく彼を深い眠の境に誘つた。

翌^{あくるひ}日眼を覺した時は存外安静であつた。彼は床の中で、風邪

はもう癒なほつたものと考えた。しかしいよいよ起きて顔を洗う段になると、何時もの冷水摩擦が退儀な位からだ身体が倦だる怠くなつてきた。勇気を鼓こして食卓に着いて見たが、朝食あさめしは少しも旨うまくなかつた。いつもは規定として三膳食べるところを、その日は一膳で済ました後あと、梅干を熱い茶の中に入れてふうふう吹いて呑のんだ。しかしその意味は彼自身にも解らなかつた。この時も細君は健三の傍に坐つて給仕をしていたが、別に何にもいわなかつた。彼にはその態度がわざと冷淡に構えている技巧の如く見えて多少腹が立つた。彼はことさらな咳せきを二度も三度もして見せた。それでも細君は依然として取り合わなかつた。

健三はさつさと頭から白襯衣ワイシャツを被かぶつて洋服に着換えたなり例

刻に宅うちを出た。細君は何時もの通り帽子を持って夫を玄関まで送って来たが、この時の彼には、それがただ形式だけを重んずる女としか受取れなかつたので、彼はなお厭な心持がした。

外ではしきりに悪感おかんがした。舌が重々しくばさついて、熱のある人のように身体全体が倦怠けたるかつた。彼は自分の脈を取って見て、その早いのに驚ろいた。指頭しとうに触れるピンピンいう音が、秒を刻むたもとどけい時計の音と錯綜さくそうして、彼の耳に異様な節奏を伝えた。それでも彼は我慢して、するだけの仕事を外でした。

十

彼は例刻に宅へ歸つた。洋服を着換える時、細君は何時もの通り、彼の不斷着ふだんぎを持ったまま、彼の傍そばに立っていた。彼は不快な顔をしてそちらを向いた。

「床を取ってくれ。寐ねるんだ」

「はい」

細君は彼のいうがままに床を延べた。彼はすぐその中に入つて寐た。彼は自分の風邪氣かぜけの事を一口も細君にいわなかった。細君の方でも一向其所そこに注意していない様子を見せた。それで双方とも腹の中には不平があつた。

健三が眼を塞ふさいでうつらうつらしていると、細君が枕元へ来て彼の名を呼んだ。

「あなた御飯を召上めしやがりますか」

「飯めしなんか食いたくない」

細君はしばらく黙っていた。けれどもすぐ立つて部屋の外へ出て行こうとはしなかった。

「あなた、どうかなすつたんですか」

健三は何にも答えずに、顔を半分ほど夜具の襟えりに埋うずめていた。

細君は無言のまま、そつとその手を彼の額の上に加えた。

晩になつて医者が来た。ただの風邪だろうという診察くだを下して、水薬すいやくと頓服とんぷくを呉れた。彼はそれを細君の手から飲ましてもらつた。

翌日あくるひは熱がなお高くなつた。医者ゴムの注意によつて護謄ひようの氷

囊^{のう}を彼の頭の上に載せた細君は、蒲団^{ふとん}の下に差し込むニツケル製の器械を下女^{げじょ}が買ってくるまで、自分の手で落ちないようにそれを抑えていた。

魔に襲われたような気分が二、三日つづいた。健三の頭にはその間の記憶というものが殆^{ほと}んどない位であつた。正氣に歸つた時、彼は平氣な顔をして天井を見た。それから枕元に坐っている細君を見た。そうして急にその細君の世話になつたのだという事を思い出した。しかし彼は何にもいわずにまた顔を背けてしまった。それで細君の胸には夫の心持が少しも映らなかつた。

「あなたどうなすつたんです」

「風邪を引いたんだって、医者がいうじゃないか」

「そりや解つてます」

会話はそれで途切れてしまった。細君は厭いやな顔をしてそれぎり部屋を出て行つた。健三は手を鳴らしてまた細君を呼び戻した。

「己おれがどうしたというんだい」

「どうしたつて、——あなたが御病氣だから、私わたくしだつてこうして氷嚢を更かえたり、薬を注ついだりして上げるんじやありませんか。それをあつちへ行けの、邪魔だのつて、あんまり……」

細君は後をいわずに下を向いた。

「そんな事をいった覚おぼはない」

「そりや熱の高い時仰おつしやつた事ですから、多分覚えちやいらつしやらないでしょう。けれども平へいぜい生からそう考えてさえいらつ

しやらなければ、いくら病氣だつて、そんな事を仰しやる訳がないと思いますわ」

こんな場合に健三は細君の言葉の奥に果してどの位な真実が潜んでいるだろうかと反省して見るよりも、すぐ頭の力で彼女を抑えつけたがる男であつた。事実の問題を離れて、単に論理の上から行くと、細君の方がこの場合も負けであつた。熱に浮かされた時、魔睡薬に酔つた時、もしくは夢を見る時、人間は必ずしも自分の思っている事ばかり物語るとは限らないのだから。しかしそうした論理は決して細君の心を服するに足りなかつた。

「よござんす。どうせあなたは私を下女同様に取り扱うつもりでいらつしやるんだから。自分一人さえ好ければ構わないと思つて、

……」

健三は座を立つた細君の後姿を腹立たしそうに見送った。彼は論理の權威で自己をいつわ伴っている事にはまるで気が付かなかった。学問の力で鍛え上げた彼の頭から見ると、この明白な論理に心しんそ底こから大人しく従い得ない細君は、全くの解らずやに違なかつた。

十一

その晩細君は土鍋どなべへ入れた粥かゆをもつて、また健三の枕元すわに坐つた。それを茶碗ちやわんに盛りながら、「御起おおきになりませんか」と訊きいた。

た。

彼の舌にはまだ苔こけが一杯生えていた。重苦しいような厚ぼったいような口の中へ物を入れる気には殆ほとんどなれなかった。それでも彼はなげ何故だか床の上に起き返って、細君の手から茶碗を受取るうとした。しかし舌障したざわりの悪い飯粒が、ざらざらと咽喉のどの方へ滑り込んで行くだけなので、彼はたった一膳ぜんで口を拭ぬぐったなり、すぐ故もとの通り横になった。

「まだ食しよつき気が出ませんね」

「少しも旨うまくない」

細君は帯の間から一枚の名刺を出した。

「こういう人が貴方あなたの寐ねていらしやるうちに来たんですが、御病

気だから断つて帰しました」

健三は寐ながら手を出して、鳥の子紙に刷つたその名刺を受取つて、姓名を読んで見たが、まだ会つた事も聞いた事もない人であつた。

「何時^{いつ}来たのかい」

「たしか一昨日^{おととい}でしたろう。ちよつと御話ししようと思つたんですが、まだ熱^{さか}が下らないから、わざと黙っていました」

「まるで知らない人だな」

「でも島田の事でちよつと御主人に御目にかかりたいつて来たんだそうですよ」

細君はとくに島田という二字に力を入れてこういいながら健三

の顔を見た。すると彼の頭にこの間途中で会った帽子を被^{かぶ}らない男の影がすぐひらめいた。熱から覚めた彼には、それまでこの男の事を思い出す機会がまるでなかったのである。

「御前島田の事を知ってるのかい」

「あの長い手紙が御常^{おつね}さんって女から届いた時、貴方が御話しなすつたじゃありませんか」

健三は何とも答えずに一旦下へ置いた名刺をまた取り上げて眺めた。島田の事をその時どれほど詳しく彼女に話したか、それが彼には不^{ふたし}確であつた。

「ありや何時だつたかね。よッぽど古い事だろう」

健三はその長々しい手紙を細君に見せた時の心持を思い出して

苦笑した。

「そうね。もう七年位になるでしょう。あたし 私たちがまだ千本通せんぼんどおりにいた時分ですから」

千本通りというのは、彼らがその頃住んでいた或都ある会の外れにある町の名であつた。

細君はしばらくして、「島田の事なら、あなたに伺わないでも、御兄おあにいさんからも聞いて知つてますわ」といった。

「兄がどんな事をいつたかい」

「どんな事つて、——なんでも余あんまり善くない人だつていう話じゃありませんか」

細君はまだその男の事について、健三の心を知りたい様子であ

った。しかし彼にはまた反対にそれを避けたい意向があつた。彼は黙つて眼を閉じた。盆に載せた土鍋と茶碗を持つて席を立つ前、細君はもう一度こういつた。

「その名刺の名前の人はまた来るそうですよ。いずれ御病氣が御^お癒^なりになったらまた伺いますからつて、歸つて行つたそうですから」

健三は仕方なしにまた眼を開^あいた。

「来るだろう。どうせ島田の代理だと名乗る以上はまた来るに極^{きま}つてゐるさ」

「しかしあなた御会いになつて？　もし来たら」
実をいうと彼は会いたくなかつた。細君はなおの事夫をこの変

な男に会わせたくなかった。

「御会いにならない方が好いでしよう」

「会つても好い。何も怖い事はないんだから」

細君には夫の言葉が、また例の我だと取れた。健三はそれを厭^{いや}だけでも正しい方法だから仕方がないのだと考えた。

十二

健三の病氣は日ならず全快した。活字に眼を曝^{さら}したり、万年筆を走らせたり、または腕組をしてただ考えたりする時が再び続くようになった頃、一度無駄足を踏ませられた男が突然また彼の玄

関先に現われた。

健三は鳥の子紙に刷った吉田虎吉という見覚みおぼえのある名刺を受取って、しばらくそれを眺めていた。細君は小さな声で「御会いになりますか」と訊たずねた。

「会うから座敷へ通してくれ」

細君は断りたさそうな顔をして少し躊躇ちゅうちよしていた。しかし夫の様子を見てとった彼女は、何もいわずにまた書斎を出て行った。

吉田というのは、でつぷり肥ふとった、かつぶくの好よい、四十恰がっこ好うの男であつた。縞しまの羽織はおりを着て、その頃まで流行はやった白縮緬しろちりめの兵児帯へこおびにぴかぴかする時計の鎖を巻き付けていた。言葉使い

から見ても、彼は全くの町人であつた。そうかといつて、決して堅氣かたぎの商人あきんどとは受取れなかつた。「なるほど」といふべきところを、わざと「なある」と引張つたり、「御ご尤もつとも」の代りに、さも感服したらしい調子で、「いかさま」と答えたりした。

健三には会見の順序として、まず吉田の身元きから訊いてかかる必要があつた。しかし彼よりは能弁な吉田は、自分の方で聞かれない先に、素性の概略を説明した。

彼はもと高崎たかさきにいた。そうして其所そこにある兵營しゅつにゆうに出入して、糧秣かいばを納めるのが彼の商買しょうばいであつた。

「そんな関係から、段々将校方の御世話ごひいきになるようになりまして。その内でも柴野しばのの旦那には特別御贖負ごひいきになつたものですから」

健三は柴野という名を聞いて急に思い出した。それは島田の後妻の娘が嫁に行つた先の軍人の姓であつた。

「その縁故で島田を御承知なんですね」

二人はしばらくその柴野という士官について話し合つた。彼が今高崎にいない事や、もっと遠くの西の方へ転任してから幾年目になるといふ事や、相変らずの大^{たいしゆ}酒で家計があまり裕^{ゆたか}でないといふ事や、すべてこれらは、健三に取つて耳新らしい報^{たより}知に違なかつたが、同時に大した興味を惹^ひく話題にもならなかつた。この夫婦に対して何らの悪感も抱^{あつかん}いていない健三は、ただそうかと思つて平氣に聞いているだけであつた。しかし話が本筋に入つて、いよいよ島田の事を持ち出された時彼は、自然厭^{いや}な心持がした。

吉田はしきりにこの老人の窮迫の状を訴え始めた。

「人間があまり好過ぎるもんですから、つい人に騙だまされてみんな損すつちまうんです。とても取れる見込のないのにむやみに金を出してやったり何なんかするもんですからな」

「人間が好過ぎるんでしょうか。あんまり慾張よくばるからじゃありませんか」

たとい吉田のいう通り老人が困窮しているとしたところで、健三にはこうより外に解釈の道はなかった。しかも困窮というからしてが既に怪しかった。肝心の代表者たる吉田も強いてその点は弁護しなかった。「あるいはそうかも知れませんが」といったなり、後は笑に紛らしてしまった。そのくせ月々若なにがし干みづか貢やいで遣やつて

くれる訳には行くまいかという相談をすぐその後から持ち出した。

正直な健三はつい自分の経済事状を打ち明けて、この一面識しかない男に話さなければならなくなった。彼は自己の手に入る百二、三十円の月収が、どう消費されつつあるかを詳しく説明して、月々あとに残るものは零^{ゼロ}だという事を相手に納得させようとした。吉田は例の「なある」と「いかさま」を時々使つて、神妙に健三の弁解を聴いた。しかし彼がどこまで彼を信用して、どこから彼を疑い始めているか、その点は健三にも分らなかつた。ただ先方はどこまでも下手^{したで}に出る手段を主眼としてゐるらしく見えた。不穩の言葉は無論、強請^{ゆすり}がましい様子は噫^{おくび}にも出さなかつた。

これで吉田の持つて来た用件の片が付いたものと解釈した健三は、心のうちで暗^{あん}に彼の帰るのを予期した。しかし彼の態度は明らかにこの予期の裏を行つた。金の問題にはそれぎり触れなかつたが、毒にも薬にもならない世間話を何時までも続けて動かなかつた。そうして自然天然話頭^{わとう}をまた島田の身の上に戻して来た。「どんなものでしょう。老人も取る年で近頃は大変心細^{おつきあい}そうな事ばかりいつていますが、——どうかして元通りの御交際は願えないものでしょうか」

健三はちよつと返答に窮した。仕方なしに黙つて二人の間に置

かれた烟草盆タバコぼんを眺めていた。彼の頭のなかには、重たそうに毛け繻子じゆすの洋傘こうもりをさして、異様の瞳を彼の上に据えたその老人の面影がありありと浮かんた。彼はその人の世話になった昔を忘れる訳に行かなかつた。同時に人格の反射から来るその人に対しての嫌悪けんおの情も禁ずる事が出来なかつた。両方の間に板挟みとなつた彼は、しばらく口を開き得なかつた。

「手前も折角こうして上がったものですから、これだけはどうぞ曲げて御承知を願いたいもので」

吉田の様子はいいよ丁寧になつた。どう考えても交際つきあうのは厭いやでならなかつた健三は、またどうしてもそれを断わるのを不義理と認めなければ済まなかつた。彼は厭でも正しい方に従おうと思

い極^{きわ}めた。

「そういう訳なら宜^{よろ}しゅう御座います。承知^{むねむこう}の旨^{むね}を向^{むか}へ伝えて下さい。しかし交際は致しても、昔のような関係ではとても出来ませんから、それも誤解のないように申し伝えて下さい。それから私^{わたし}の今の状況では、私の方から時々出掛けて行つて老人に慰藉^{いしや}を与えるなんて事は六^むずかしいのですが……」

「するとまあただ御出入^{おでいり}をさせて頂くという訳になりますな」
健三には御出入という言葉を聞くのが辛^{つら}かった。そうだともそうでないともいいかねて、また口を閉じた。

「いえなにそれで結構で、——昔と今とは事情もまるで違ますから」

吉田は自分の役目が漸く済んだという顔付をしてこういった後、
今まで持ち扱っていた烟草入を腰へさしたなり、さっさと帰つて
行つた。

健三は彼を玄関まで送り出すと、すぐ書斎へ入つた。その日の
仕事を早く片付けようという気があるので、いきなり机へ向つた
が、心のどこかに引懸りが出来て、なかなか思う通りに撈取らな
かつた。

其所へ細君がちよつと顔を出した。「あなた」と二返ばかり声
を掛けたが、健三は机の前に坐つたなり振り向かなかつた。細君
がそのまま黙つて引込んだ後、
健三は進まぬながら仕事を夕方ま
で続けた。

へいぜい 平生よりは遅くなって漸く夕食ゆうめしの食卓に着いた時、彼は始

めて細君と言葉を換わした。

「先刻さつき来た吉田って男は一体何なんですか」と細君が訊きいた。

「元高崎で陸軍の用達ようたしか何かしていたんだそうだ」と健三が答えた。

問答は固もとよりそれだけで尽きるはずがなかった。彼女は吉田と柴野との関係やら、彼と島田との間柄まがらやらについて、自分に納得の行くまで夫から説明を求めようとした。

「どうせ御金か何か呉れっていうんでしょう」

「まあそうだ」

「それで貴方あなたどうなすって、——どうせ御断りになったでしょう

ね」

「うん、断った。断るより外に仕方がないからな」

二人は腹の中で、自分らの家の^{うち}経済状態を別々に考えた。月々支出している、また支出しなければならぬ金額は、彼に取つて随分苦しい労力の報酬であると同時に、それで凡てを^{すべ}賄^{まかな}つて行く細君に取つても、少しも裕^{ゆたか}なものとはいわれなかつた。

十四

健三はそれぎり座を立とうとした。しかし細君にはまだ訊^ききたい事が残つていた。

「それで素直に帰って行っただけですか、あの男は。少し変ね」

「だって断られれば仕方がないじゃないか。喧嘩けんかをする訳にも行かないんだから」

「だけど、また来るんでしょう。ああして大人しく帰って置いて」

「来ても構わないさ」

「でも厭いやですわ、蒼蠅うるさくって」

健三は細君が次の間で先刻さつきの会話を残らず聴いていたものと察した。

「御前聴いてたんだろう、悉皆すっかり」

細君は夫の言葉を肯定しない代りに否定もしなかった。

「じゃそれで好いいいじゃないか」

健三はこういったなりました立つて書齋へ行こうとした。彼は独断家であつた。これ以上細君に説明する必要は始めからないものと信じていた。細君もそうした点において夫の権利を認める女であつた。けれども表^{おもてむき}向^{ことごと}夫の権利を認めるだけに、腹の中には何時も不平があつた。事々^{ことごと}について出て来る権柄^{けんぺい}ずくな夫の態度は、彼女に取つて決して心持の好いものではなかつた。何故^{なぜ}もう少し打ち解けてくれないのかという気が、絶えず彼女の胸の奥に働らいた。そのくせ夫を打ち解けさせる天分も技倆^{ぎりょう}も自分に充分具えていないという事実には全く無頓着^{むとんじゃく}であつた。

「あなた島田と交際^{つきあ}つても好いと受合つていらしたようですね」
「ああ」

健三はそれがどうしたといった風の顔付をした。細君は何時でも此所^{ここ}まで来て黙つてしまふのを例にしていた。彼女の性質として、夫がこういう態度に出ると、急に厭^{いや}氣がさして、それから先一步も前へ出る氣になれないのである。その不愛想な様子がまた夫の氣質に反射して、益^{ますます}彼を権柄^{まがね}づくにしがちであつた。

「御前や御前の家族に關係した事でないんだから、構わないじゃないか、己^{おれ}一人で極^きめたつて」

「そりや私^{わたくし}に對して何も構つて頂かなくつても宜^よござんす。構つてくれつたつて、どうせ構つて下さる方じゃないんだから、……」

學問をした健三の耳には、細君のいう事がまるで脱線であつた。そうしてその脱線はどうしても頭の悪い証拠としか思われなかつ

た。「また始まった」という気が腹の中でした。しかし細君はすぐ当の問題に立ち戻って、彼の注意を惹ひかなければならないような事をいい出した。

「しかし御父さまに悪いでしょう。今になってあの人と御交際おつきあいいになっちゃあ」

「御父さまって己おれのおやじかい」

「無論貴方あなたの御父さまですわ」

「己のおやじはどうに死んだじやないか」

「しかし御亡くなりになる前、島田とは絶交だから、向後こうご一切付つ合きあいをしちやならないって仰おつしやったそうじやありませんか」

健三は自分の父と島田とが喧嘩をして義絶した当時の光景をよ

く覚えていた。しかし彼は自分の父に対してさほど情愛の籠こもった優しい記憶を有もつていなかった。その上絶交云々うんぬんについても、そう嚴重にいい渡された覚おぼえはなかった。

「御前誰からそんな事を聞いたのかい。己は話したつもりはないがな」

「貴方じやありません。御兄おあにいさんに伺ったんです」

細君の返事は健三に取つて不思議でも何でもなかった。同時に父の意志も兄の言葉も、彼には大した影響を与えなかった。

「おやじは阿爺おやじ、兄は兄、己は己なんだから仕方がない。己から見ると、交際を拒絶するだけの根拠がないんだから」

こういう切った健三は、腹の中でその交際つきあいが厭で厭で堪らな

いのだという事実を意識した。けれどもその腹の中はまるで細君の胸に映らなかつた。彼女はただ自分の夫がまた例の頑固を張り通して、徒らに皆なの意見に反対するのだとばかり考えた。

十五

健三は昔その人に手を引かれて歩いた。その人は健三のために小さい洋服を拵らえてくれた。大人さえあまり外国の服装に親しみのない古い時分の事なので、裁縫師は子供の着るスタイルなどにはまるで頓着しなかつた。彼の上着には腰のあたりに釦が二つ並んでいて、胸は開いたままであつた。霜降の羅紗も硬くご

わごわして、極めて手^{てざわり}触^{あら}が粗^{あら}かった。ことに洋袴^{ズボン}は薄茶色に豎^た溝^{てみぞ}の通った調馬師でなければ穿^はかないものであつた。しかし当

時の彼はそれを着て得意に手を引かれて歩いた。

彼の帽子もその頃の彼には珍^{めづ}らしかつた。浅い鍋^{なべ}底^{ぞこ}のような形をしたフェルトをすぽりと坊主頭^{ずきん}へ頭巾^{かぶ}のように被^かぶるのが、彼に大した満足を与えた。例の如くその人に手を引かれて、寄^よ席^せへ手品を見に行つた時、手品師が彼の帽子を借りて、大事な黒羅紗の山の裏から表へ指を突き通して見せたので、彼は驚ろきながら心配そうに、再びわが手に歸つた帽子を、何遍か撫^なでまわして見た事もあつた。

その人はまた彼のために尾の長い金魚をいくつも買つてくれた。

武者絵、錦絵、二枚つづき三枚つづきの絵も彼のいうがままに
買ってくれた。彼は自分の身体にあう緋緘しの鎧と竜頭の兜
さえ持っていた。彼は日に一度位ずつその具足を身に着けて、金
紙で拵えた采配を振り舞わした。

彼はまた子供の差す位な短かい脇差の所有者であつた。その
脇差の目貫は、鼠が赤い唐辛子を引いて行く彫刻で出来上つて
いた。彼は銀で作つたこの鼠と珊瑚で拵えたこの唐辛子とを、自
分の宝物のように大事がつた。彼は時々この脇差が抜いて見たく
なつた。また何度も抜こうとした。けれども脇差は何時も抜けな
かつた。——この封建時代の装飾品もやはりその人の好意で小さ
な健三の手に渡されたのである。

彼はまたその人に連れられて、よく船に乗った。船にはきつと腰こしみの蓑を着けた船頭がいて網を打った。いなだの鰯ぼらだのが水際まで来て跳ね躍おどる様が小さな彼の眼に白しろがね金のような光を与えた。船頭は時々一里も二里も沖へ漕こいで行つて、海鰐かいすというものまで捕つた。そういう場合には高い波が来て舟を揺り動かすので、彼の頭はすぐ重くなつた。そうして舟の中へ寐ねてしまふ事が多かつた。彼の最も面白がつたのは河豚ふぐの網にかかつた時であつた。彼は杉箸すぎばしで河豚の腹をかんから太鼓だいこのように叩たたいて、その膨ふくれたり怒つたりする様子を見て楽しんだ。……

吉田と会見した後の健三あとの胸には、ふとこうした幼時の記憶が続々湧わいて来る事があつた。凡すべてそれらの記憶は、断片的な割に

鮮明^{あざやか}に彼の心に映るものばかりであつた。そうして断片的ではあるが、どれもこれも決してその人と引き離す事は出来なかつた。零碎^{れいさい}の事実を手繰^{たぐ}り寄せれば寄せるほど、種が無尽蔵にあるように見えた時、またその無尽蔵にある種の各自^{おののおの}のうちには必ず帽子を被^{かぶ}らない男の姿が織り込まれているという事を発見した時、彼は苦しんだ。

「こんな光景をよく覚えていくせに、何故^{なぜ}自分の有^もつていたその頃の心が思い出せないのだろう」

これが健三にとって大きな疑問になつた。實際彼は幼少の時分これほど世話になつた人に対する当時のわが心持というものをまるで忘れてしまつた。

「しかしそんな事を忘れるはずがないんだから、ことによると始めからその人に対してだけは、恩義相応の情じょうあい合が欠けていたのかも知れない」

健三はこうも考えた。のみならず多分この方だろうと自分を解釈した。

彼はこの事件について思い出した幼少の時の記憶を細君に話さなかった。感情に脆もろい女の事だから、もしそうでもしたら、あるいは彼女の反感を和らげるに都合が好かろうとさえ思わなかった。

十六

待ち設けた日がやがて来た。吉田と島田とはある日の午後連れ立って健三の玄関に現れた。

健三はこの昔の人に対してどんな言葉を使つて、どんな応対をして好いか解らなかつた。思慮なしにそれらを極めてくれる自然の衝動が今の彼にはまるで欠けていた。彼は二十年余も会わない人と膝ひざを突き合せながら、大した懐かしみも感じ得ずに、むしろ冷淡に近い受答えばかりしていた。

島田はかねて横風おうふうだという評判のある男であつた。健三の兄や姉は単にそれだけでも彼を忌み嫌っている位であつた。実は健三自身も心のうちでそれを恐れていた。今の健三は、単に言葉遣いの末でさえ、こんな男から自尊心きずつを傷けられるには、あまりに

高過ぎると、自分を評価していた。

しかし島田は思つたよりも鄭寧^{ていねい}であつた。普通^{しよけん}初見^{しよけん}の人が挨拶^{あいさつ}に用いる「ですか」とか、「ません」とかいうてにはで、

言葉の語尾を切る注意をわざと怠らないように見えた。健三はむかしその人から健坊^{けんぼう}々々と呼ばれた幼い時分を思い出した。関係が絶えてからも、会いさえすれば、やはり同じ健坊々々で通すので、彼はそれを厭^{いや}に感じた過去も、自然胸のうちに浮かんだ。

「しかしこの調子なら好^いいだろう」

健三はそれで、出来るだけ不快の顔を二人に見せまいと力^{つと}めた。向うもなるべく穏かに帰るつもりと見えて、少しも健三の気を悪くするような事はいわなかった。それがために、当然双方の間に

話題となるべき懷旧談なども殆ど出なかつた。従つて談話はややともすると途切れがちになつた。

健三はふと雨の降つた朝の出来事を考えた。

「この間二度ほど途中で御目にかかりましたが、時々あの辺を御通りになるんですか」

「実はあの高橋の総領の娘が片付いている所がついこの先にあるもんですから」

高橋というのは誰の事だか健三には一向解らなかつた。

「はあ」

「そら知つてるでしょう。あの芝しばの」

島田の後妻の親類が芝にあつて、其所そこの家は何でも神主かんぬしか坊

主だという事を健三は子供心に聞いて覚えていたような氣もした。しかしその親類の人には、要^{よう}さんという彼とおない年位な男に二、三遍会ったぎりで、他^{ほか}のものに顔を合せた記憶はまるでなかった。「芝というと、たしか御藤^{おふじ}さんの妹さんに当^{あた}る方の御嫁にいらした所でしたね」

「いえ姉ですよ。妹ではないんです」

「はあ」

「要^{ようぞう}三だけは死にましたが、あとの姉^{きょうだい}妹はみんな好い所へ片付いてね、仕合せですよ。そら総領のは、多分知っておいでだろう、——へ行つたんです」

——という名前はなるほど健三に耳新しいものではなかった。

しかしそれはもうよほど前に死んだ人であつた。

「あとが女と子供ばかりで困るもんだから、何かにつけて、叔父さん叔父さんて重宝がられましてね。それに近頃は宅に手入をするんで監督の必要が出来たものだから、殆ど毎日のように此所の前を通ります」

健三は昔この男につれられて、池の端の本屋で法帖を買つてもらつた事をわれ知らず思い出した。たとい一銭でも二銭でも負けさせなければ物を買つた例のないこの人は、その時も僅か五厘の釣銭を取るべく店先へ腰を卸して頑として動かなかつた。董其昌の折手本を抱えて傍に佇立んでいる彼に取つてはその態度が如何にも見苦しくまた不愉快であつた。

「こんな人に監督される大工や左官はさぞ腹の立つ事だろう」
健三はこう考えながら、島田の顔を見て苦笑を洩らした。しかし島田は一向それに気が付かないらしかった。

十七

「でも御蔭さまで、本を遺^{のこ}して行ってくれたもんですから、あの男が亡くなっても、あとはまあ困らないで、どうにかこうにか遣^やって行けるんです」

島田は——の作^{した}った書物を世の中の誰でもが知っていなければならぬはずだといった風の口調でこういった。しかし健三は不

幸にしてその著書の名前を知らなかった。字引じびきか教科書だろうとは推察したが、別に訊きいて見る気にもならなかった。

「本というものは実に有難いもので、一つ作つて置くとそれが何時までも売れるんですからね」

健三は黙っていた。仕方なしに吉田が相手になつて、何でも儲もうけるには本に限るような事をいった。

「御祝儀は済んだが、——が死んだ時後あとが女だけだもんだから、実は私わたしが本屋に懸け合いましたね。それで年々いくらと極きめて、向うから収めさせるようにしたんです」

「へえ、大したもんですな。なるほどどうも学問をなさる時は、それだけ資金もとでが要いるようで、ちよつと損な気もしますが、さて仕

上げて見ると、つまりその方が利廻りの好い訳になるんだから、
無学のものはとても敵かないませんな」

「結局得ですよ」

彼らの応対は健三に何の興味も与えなかった。その上いくら相あ
槌いづちを打とうにも打たれないような変な見当へ向いて進んで行く
ばかりであつた。手持無沙汰てもちぶさたな彼は、やむをえず二人の顔を見比
べながら、時々庭の方を眺めた。

その庭はまた見苦しく手入の届かないものであつた。何時緑を
とつたか分らないような一本の松が、息苦しうに蒼黒あおぐろい葉を
垣根そばの傍に茂らしている外ほかに、木らしい木は殆どほとんどなかつた。箒ほうきに
馴染なじまない地面は小石交まじりに凸凹でこぼこしていた。

「こちらの先生も一つ御儲けになつたら如何です」

吉田は突然健三の方を向いた。健三は苦笑しない訳に行かなかつた。仕方なしに「ええ儲けたいものですね」といつて跋ぼつを合せた。

「なに訳はないんです。洋行まですりや」

これは年寄の言葉であつた。それがあたかも自分で学資でも出して、健三を洋行させたように聞こえたので、彼は厭いやな顔をした。しかし老人は一向そんな事に頓とん着じゃくする様子も見えなかつた。

迷惑ていそうな健三の体ていを見ても澄ていましていた。しまいに吉田が例の烟草タバコ入いれを腰へ差して、「では今日こんにちはこれで御暇おいとまを致す事にしましうか」と催促したので、彼は漸ようやく帰る氣になつたらしか

った。

二人を送り出してまたちよつと座敷へ戻った健三は、再び座蒲ざぶ団どんの上に坐つたまま、腕組をして考えた。

「一体何のために来たのだろう。これじや他ひとを厭がらせに来るのと同じ事だ。あれで向は面白いのだろうか」

彼の前には先刻島田さつきの持つて来た手土産てみやげがそのまま置いてあつた。彼はぼんやりその粗末な菓子折を眺めた。

何にもいわずに茶碗ちやわんだの烟草盆を片付け始めた細君は、しまいに黙つて坐つてゐる彼の前に立つた。

「あなたまだ其処そこに坐つていらつしやるんですか」

「いやもう立つても好い」

健三はすぐ立上^{たちあが}ろうとした。

「あの人たちはまた来るんでしうか」

「来るかも知れない」

彼はこう言い放ったまま、また書齋へ入った。一しきり箒で座敷を掃く音が聞えた。それが済むと、菓子折を奪^とり合う子供の声^{すべ}がした。凡^{すべ}てがやがて静^{しずか}になったと思う頃、黄^{たそがれ}昏の空からまた雨が落ちて来た。健三は買おう買おうと思いながら、ついまだ買わずにいるオヴァーシューの事を思い出した。

十八

雨の降る日が幾日も続いた。いくかそれがからりと晴れた時、染付けられたような空から深い輝きが大地の上に落ちた。毎日鬱陶しうつとうい思いをして、縫針ぬいはりにばかり気をとられていた細君は、縁鼻えんばなへ出てこの蒼い空あおを見上げた。それから急に箆笥たんすの抽斗ひきだしを開けた。

彼女が服装を改ためて夫の顔を覗のぞきに來た時、健三は頬杖ほおづえを突いたまま盆ぼんやり槍汚やうない庭を眺めていた。

「あなた何を考えていらつしやるの」

健三はちよつと振り返つて細君の余所行姿よそゆきすがたを見た。その刹那せつなに爛熟らんじゆくした彼の眼はふとした新らし味を自分の妻の上に見出した。

「どこかへ行くのかい」

「ええ」

細君の答は彼に取つて余りに簡潔過ぎた。彼はまたもとの佗^わびしい我に歸つた。

「子供は」

「子供も連れて行きます。置いて行くと八釜^{やかま}しくつて御蒼蠅^{おうるさ}いでしょうから」

その日曜の午後を健三は独り静かに暮らした。

細君の歸つて来たのは、彼が夕飯^{ゆうめし}を済ましてまた書斎へ引き取つた後^{あと}なので、もう灯^{あかり}が点いてから一、二時間経つていた。

「ただ今」

遅くなりましたとも何ともいわない彼女の無愛嬌ぶあいぎょうが、彼には
 気に入らなかつた。彼はちよつと振り向いただけで口を利かなか
 った。するとそれがまた細君の心に暗い影を投げる媒介なかだちとなつ
 た。細君もそのまま立つて茶の間の方へ行つてしまった。

話をする機会はそれぎり二人の間に絶えた。彼らは顔さえ見れ
 ば自然何かいいなくなるような仲の好い夫婦でもなかつた。また
 それだけの親しみを現わすには、御互が御互に取つてあまりに陳腐ちんぷ
 過ぎた。

二、三日経つてから細君は始めてその日外出した折の事を食事
 の時話題のばに上せた。

「此間宅こないだうちへ行つたら、門司もじの叔父おじに会いましたね。随分驚ろい

ちまいました。まだ台湾にいるのかと思つたら、何時の間にか歸つて来ているんですもの」

門司の叔父というのは油断のならない男として彼らの間に知られていた。健三がまだ地方にいる頃、彼は突然汽車で遣つて来て、急にいりよう入用が出来たから、是非とも少し都合してくれまいかと頼むので、健三は地方の銀行に預けて置いた貯金を些さし少ながら用立てたら、立派に印紙を貼つた証文を後から郵便で送つて来た。その中に「但し利子の儀は」という文句まで書き添えてあつたので、健三はむしろ堅過ぎる人だと思つたが、貸した金はそれぎり戻つて来なかつた。

「今何をしているのかね」

「何をしているんだか分りやしません。何とかの会社を起すんで、是非健三さんにも賛成してもらいたいから、その内上る^{あが}つもりだつていつてました」

健三にはその後を訊^きく必要もなかった。彼が昔し金を借りられた時分にも、この叔父は何かの会社を建てているとかいうので彼はそれを本^{うま}当にしていた。細君の父もそれを疑わなかった。叔父はその父を旨^{うま}く説きつけて、門司まで引張つて行つた。そうしてこれが今建築中の会社だといって、縁もゆかりもない他人の建てている家を見せた。彼は実にこの手段で細君の父から何千かの資本を捲^まき上げたのである。

健三はこの人についてこれ以上何も知りたがらなかった。細君

もいうのが厭らしかった。しかし何時もの通り会話は其所^{そこ}で切れてしまわなかつた。

「あの日はあまり好^{いい}い御天氣だったから、久しぶりで御兄^{おあにい}さんの所へも廻つて来ました」

「そうか」

細君の里は、小石川台町^{こいしかわだいまち}で、健三の兄の家は市ヶ谷^{いちがや}薬王寺^{やくおうじ}前^{まえ}だから、細君の訪問は大した迂回^{まわりみち}でもなかつた。

十九

「御兄^{おあにい}さんに島田の来た事を話したら驚ろいていらつしやいま

したよ。今更来られた義理じゃないんだって。健三もあんなものを相手にしなければ好いものにつて」

細君の顔には多少諷諫ふうかんの意が現われていた。

「それを聞きに、御前わざわざ薬王寺前へ廻ったのかい」

「またそんな皮肉を仰おつしやる。あなたは どうして そう他のする事

を悪くばかり御取りになるんでしょう。妾わたくしあんまり御無沙汰ごぶさたをし

て済まないと思つたから、ただ歸りにちよつと伺つただけですわ」

彼が滅多に行つた事のない兄の家へ、細君がたまに訪ねて行く

のは、つまり夫の代りに交際つきあいの義理を立てているようなものな

ので、いかな健三もこれには苦情をいう余地がなかった。

「御兄おあにいさんは貴夫あなたのために心配していらつしやるんですよ。あ

あいう人と交際^{つきあ}いだして、またどんな面倒が起らないとも限らないからって」

「面倒ってどんな面倒を指すのかな」

「そりや起って見なければ、御^{おあにい}兄さんにだって分りつ子ないでしようけれども、何しろ碌^{ろく}な事はないと思っていらっしゃるんでしよう」

碌な事があるうとは健三にも思えなかった。

「しかし義理が悪いからね」

「だって御金^やを遣^やって縁を切った以上、義理の悪い訳はないじやありませんか」

手切の金は昔し養育料の名前^{もと}の下に、健三の父の手から島田に

渡されたのである。それはたしか健三が廿二の春であつた。

「その上その御金をやる十四、五年も前から貴夫は、もう貴夫の宅^{うち}へ引き取られていらしたんでしよう」

いくつの年からいくつの年まで、彼が全然島田の手で養育されたのか、健三にも判^{はつきり}然分らなかった。

「三つから七つまでですつて。御^{おあにい}兄さんがそう御^{おっしや}仰いましたよ」

「そうかしら」

健三は夢のように消えた自分の昔を回顧した。彼の頭の中には眼鏡^{めがね}で見るような細かい絵が沢山出た。けれどもその絵にはどれを見ても日付がついていなかった。

「証文にちゃんとそう書いてあるそうですから大丈夫間違はないでしょう」

彼は自分の離籍に關した書類というものを見た事がなかった。

「見ない訳はないわ。きつと忘れていらつしやるんですよ」

「しかしハツで宅へ歸つたにしたところで復籍するまでは多少往来もしていたんだから仕方がないさ。全く縁が切れたという訳でもないんだからね」

細君は口を噤つぶんだ。それが何故なぜだか健三には淋さびしかった。

「己おれも実は面白くないんだよ」

「じゃ御止およしになれば好いのに。つまらないわ、貴夫、今になつてあんな人と交際うのは。一体どういふ氣なんでしょう、先方むこうは」

「それが己には些^{ちつ}とも解らない。向^{むこう}でもさぞ詰らないだろうと思うんだがね」

「御兄さんは何でもまた金にしようと思つて遣つて来たに違いないから、用心なくつちやいけないっていつていらつしやいましたよ」

「しかし金は始めから断つちまつたんだから、構わないさ」

「だってこれから先何をいい出さないとも限らないわ」

細君の胸には最初からこうした予感が働らいていた。其^{そこ}所を既に防ぎ止めたとばかり信じていた理に強い健三の頭に、微^{かす}かな不安がまた新らしく萌^{きざ}した。

二十

その不安は多少彼の仕事の上に即^ついて廻った。けれども彼の事はまたその不安の影をどこかへ埋^{うず}めてしまうほど忙がしかった。そうして島田が再び健三の玄関へ現れる前に、月は早くも末になった。

細君は鉛筆で汚ならしく書き込んだ会計簿を持って彼の前に出た。

自分の外で働いて取る金額の全部を挙げて細君の手に委^{ゆた}ねるのを例にしていた健三には、それが意外であつた。彼はいまだかつて月^{げつまつ}末に細君の手から支出の明^{めい}細^{さい}書^{がき}を突き付けられた例^{ためし}がな

かった。

「まあどうにかしているんだろう」

彼は常にかう考えた。それで自分に金の要^いる時は遠慮なく細君に請求した。月々買う書物の代価だけでも随分の多額^{のほ}に上る事があつた。それでも細君は澄ま^{うたぐ}していた。経済に暗い彼は時として細君の放漫をさえ疑^{うたぐ}つた。

「月々の勘定はちゃんとして己^{おれ}に見せなければいけないぜ」

細君は厭^{いや}な顔をした。彼女自身からいえば自分ほど忠実な経済家はどこにもいない気なのである。

「ええ」

彼女の返事はこれぎりであつた。そうして月末^{つきすえ}が来ても会計簿

はついに健三の手に渡らなかつた。健三も機嫌の好い時はそれを黙認した。けれども悪い時は意地になつてわざと見せろと逼せまる事があつた。そのくせ見せられるとごちやごちやしてなかなか解らなかつた。たとい帳面づらは細君の説明を聴いて解るにしても、實際月に肴さかなをどれだけ食くたものか、または米がどれほど要いつたものか、またそれが高過ぎるのか、安過ぎるのか、更に見当が付かなかつた。

この場合にも彼は細君の手から帳簿を受取つて、ざつと眼を通しただけであつた。

「何か変つた事でもあるのかい」

「どうかして頂かないと……」

細君は目下の暮し向について詳しい説明を夫にして聞かせた。

「不思議だね。それで能くよきよう今日まで遣つて来られたものだね」

「実は毎月まいげつ余らないんです」

余ろうとは健三にも思えなかつた。先月末すえふるに旧い友達が四、五

人でどこかへ遠足に行くとかいうので、彼にも勧誘の端書をよこした時、彼は二円の会費がないだけの理由で、同行を断つたおぼえ覚もあつた。

「しかしかつかつ位には行きそうなものだがな」

「行つても行かなくつても、これだけの収入で遣つて行くより仕方がないんですけれども」

細君はいい悪にくそうに、筆筭たんすの抽匣ひきだしにしまつて置いた自分の着

物と帯を質に入れた顛末てんまつを話した。

彼は昔自分の姉や兄が彼らの晴着を風呂敷へ包んで、こつそり外へ持つて出たりまた持つて入ったりしたのをよく目撃した。他に知れないように気を配りがちな彼らの態度は、あたかも罪を犯した日影者のように見えて、彼の子供心に淋しい印象を刻み付けた。こうした聯想れんそうが今の彼を特更ことさらに侘わびしく思わせた。

「質を置いたつて、御前が自分で置きに行つたのかい」

彼自身いまだ質屋の暖簾のれんを潜くぐつた事のない彼は、自分より貧苦の経験に乏しい彼女が、平気でそんな所へ出入でいりするはずがないと考えた。

「いいえ頼んだんです」

「誰に」

「山野のうちの御婆おばあさんにです。あすこには通いつけの質屋の帳面があつて便利ですから」

健三はその先を訊きかなかつた。夫が碌な着物一枚さえ拵こしらえてやらないのに、細君が自分の宅うちから持つてきたものを質に入れて、家計の足たしにしなければならぬというのは、夫の恥に相違なかつた。

二十一

健三はもう少し働らこうと決心した。その決心から来る努力が、

月々幾枚かの紙幣に変形して、細君の手に渡るようになったのは、それから間もない事であつた。

彼は自分の新たに受取つたものを洋服の内うちかくし隠袋から出して封筒のまま畳の上へ放り出した。黙つてそれを取り上げた細君は裏を見て、すぐその紙幣の出でどころ所を知つた。家計の不足はかくの如くにして無言のうちに補なわれたのである。

その時細君は別に嬉しい顔うれもしなかつた。しかしもし夫が優しい言葉に添えて、それを渡してくれたなら、きっと嬉しい顔をする事が出来たろうにと思つた。健三はまたもし細君が嬉しそうにそれを受取つてくれたら優しい言葉も掛けられたろうにと考えた。それで物質的の要求に応ずべく工面されたこの金は、二人の間に

存在する精神上の要求を充たす方便としてはむしろ失敗に帰してしまつた。

細君はその折の物足らなさを回復するために、二、三日経つてから、健三に一反の反物を見せた。

「あなたの着物を拵えようと思うんですが、これはどうでしょう」

細君の顔は晴々しく輝やいていた。しかし健三の眼にはそれ

が下手な技巧を交えているように映つた。彼はその不純を疑がつ

た。そうしてわざと彼女の愛嬌に誘われまいとした。細君は

寒そうに座を立つた。細君の座を立つた後で、彼は何故自分の細

君を寒がらせなければならぬ心理状態に自分が制せられたのか

と考へて益不愉快になつた。

細君と口を利く次の機会が来た時、彼はこういった。

「己^{おれ}は決して御前の考えているような冷刻な人間じゃない。ただ自分の有^もっている温かい情愛を堰^せき止めて、外へ出られないように仕向けるから、仕方なしにそうするのだ」

「誰もそんな意地の悪い事をする人はいないじゃないですか」
「御前はしょっちゅうしているじゃないか」

細君は恨めしそうに健三を見た。健三の論^{ロジック}理はまるで細君に通じなかった。

「貴夫^{あなた}の神経は近頃よつぽど変ね。どうしてもっと穏当^{わたくし}に私を觀察して下さらないのでしょうか」

健三の心には細君の言葉に耳^{かたぶ}を傾ける余裕がなかった。彼は自

分に不自然な冷かさひややに対して腹立たしいほどの苦痛を感じていた。
「あなたは誰も何にもしないのに、自分一人で苦しんでいらつしやるんだから仕方がない」

二人は互に徹底するまで話し合う事のついに出来ない男女なんによのような気がした。従つて二人とも現在の自分を改める必要を感じ得なかつた。

健三の新たに求めた余分の仕事は、彼の学問なり教育なりに取つて、さして困難のものではなかつた。ただ彼はそれに費やす時間と努力とを厭いとつた。無意味に暇を潰つぶすという事が目下の彼には何よりも恐ろしく見えた。彼は生きているうちに、何かし終おほせる、またし終おほせなければならぬと考える男であつた。

彼がその余分の仕事を片付けて家に帰るときは何時でも夕暮になつた。

或日彼は疲れた足を急がせて、自分の家の玄関の格子を手荒く開けた。すると奥から出て来た細君が彼の顔を見るなり、「あなたあの人^ががまた来ましたよ」といった。細君は島田の事を始終あの人あの人と呼んでいたので、健三も彼女の様子と言葉から、留守のうちに誰^がが来たのかほぼ見当が付いた。彼は無言のまま茶の間へ上^{あが}つて、細君に扶^{たす}けられながら洋服を和服に改めた。

彼が火鉢ひばちの傍そばに坐すわつて、烟草タバコを一本吹かしていると、間もなく夕飯ゆうめしの膳ぜんが彼の前に運ばれた。彼はすぐ細君に質問を掛けた。
「上あがつたのかい」

細君には何が上つたのか解らない位この質問は突然であつた。
ちよつと驚ろいて健三の顔を見た彼女は、返事を待ち受けている
夫の様子から始めてその意味を悟さとつた。

「あの人ですか。——でも御留守でしたから」

細君は座敷へ島田を上げなかったのが、あたかも夫の氣に障さわる
事でもしたような調子で、言訳がましい答をした。

「上げなかったのかい」

「ええ。ただ玄関でちよつと」

「何とかいつていたかい」

「とうに伺うはずだったけれども、少し旅行していたものだから
御不沙汰ごぶさたをして済みませんって」

済みませんという言葉が一種の嘲弄ちやうろうのように健三の耳に響いた。

「旅行なんぞするのかな、田舎いなかに用のある身体からだとも思えないが。
御前にその行つた先を話したかい」

「そりや何ともいいませんでした。ただ娘の所で来てくれって頼
まれたから行つて来たっていいました。大方あの御縫おぬいさんて人の
宅うちなんでしょう」

御縫かたづさんの嫁しよめいた柴野しばのという男には健三もその昔会つた覚おぼえがあ

った。柴野の今の任地先もこの間吉田から聞いて知っていた。それは師団か旅団のある中国辺の或^{ある}都会であつた。

「軍人なんですか、その御縫さんて人の御嫁に行った所は」

健三が急に話を途切らしたので、細君はしばらく間^まを置いたあとでこんな問^とを掛けた。

「能^よく知つてゐるね」

「何時^{いつ}か御兄^{おあにい}さんから伺いましたよ」

健三は心のうちで昔見た柴野と御縫さんの姿を並べて考えた。

柴野は肩の張つた色の黒い人であつたが、眼^め鼻立^{はなだち}からいうとむ

しろ立派な部類に属すべき男に違なかつた。御縫さんはまたすら

りとした恰好^{かつこう}の好^いい女で、顔は面^{おもな}長^がの色白という出来であつた。

ことに美しいのは睫毛まつげの多い切長きれながのその眼のように思われた。彼らの結婚したのは柴野がまだ少尉か中尉の頃であつた。健三は一度その新宅の門を潜くぐつた記憶を有もつていた。その時柴野は隊から歸つて来た身体を大きくして、長火鉢ながひばちの猫板ねこいたの上にある洋盃ツブから冷酒ひやざけをぐいぐい飲んだ。御縫さんは白い肌をあらわに、鏡台の前で鬢びんを撫なでつけていた。彼はまた自分の分として取り配わけられた握り鮎にぎすしをしきりに皿の中から撮つまんで食べた。……

「御縫さんて人はよっぽど容色きりようが好いんですか」

「何故なぜ」

「だつて貴夫あなたの御嫁にするつて話があつたんだそうじゃありませんか」

なるほどそんな話もない事はなかった。健三がまだ十五、六の時分、ある友達を往来へ待たせて置いて、自分一人ちよつと島田の家へ寄ろうとした時、偶然門前の泥溝に掛けた小橋の上に立つて往来を眺めていた御縫さんは、ちよつと微笑しながら出合頭であいがしらの健三に会釈した。それを目撃した彼の友達ドイツは独乙語を習い始める子供であつたので、「フラウ門に倚よつて待つ」といつて彼をひやかした。しかし御縫さんは年齒としからいうと彼より一つ上であつた。その上その頃の健三は、女に対する美醜の鑑別もなければ好悪うおもも有たなかつた。それから羞恥はにかみに似たような一種妙な情緒があつて、女に近寄りたがる彼を、自然の力で、護謨球ゴムだまのように、かえつて女から弾はじき飛ばした。彼と御縫さんとの結婚は、他ほかに面

倒のあるなしを差措さしおいて、到底物にならないものとして放棄されてしまった。

二十三

「貴夫あなたどうしてその御縫さんて人を御貫おもいにならなかったの」
健三は膳ぜんの上から急に眼を上げた。追憶の夢を愕おどろかされた人のように。

「まるで問題にやならない。そんな料簡は島田にあっただけなんだから。それに己おれはまだ子供だったしね」
「あの人の本当の子じやないんでしよう」

「無論さ。御縫さんは御藤さんの連れっ子だもの」

御藤さんというのは島田の後妻の名であつた。

「だけど、もしその御縫さんて人と一所になつていらしたら、
どうでしょう。今頃は」

「どうなつてるか判らないじゃないか、なつて見なければ」

「でも殊ことによると、幸福かも知れせんわね。その方が」

「そうかも知れない」

健三は少し忌々いまいましくなつた。細君はそれぎり口を噤つぶんだ。

「何故なぜそんな事を訊きくのだい。詰らない」

細君は窘たしなめられるような気がした。彼女にはそれを乗り越す
だけの勇気がなかつた。

「どうせ私は始めつから御氣に入らないんだから……」

健三は箸^{はし}を放り出して、手を頭の中に突込んだ。そうして其所^{そこ}に溜^{たま}っている雲脂^{ふけ}をごしごし落し始めた。

二人はそれなり別々の室^{へや}で別々の仕事をした。健三は御機嫌よくと挨拶^{あいさつ}に來た子供の去つた後で、例の如く書物を読んだ。細君はその子供を寐^ねかした後で、昼の残りの縫物を始めた。

御縫さんの話がまた二人の間の問題になつたのは、中一日置いた後^{あと}の事で、それも偶然の切ツ懸けからであつた。

その時細君は一枚の端書を持って、健三の部屋へ這入^{はい}つて來た。それを夫の手に渡した彼女は、何時ものようにそのまま立ち去るうともせず、彼の傍^{そば}に腰を卸した。健三が受取つた端書を手に

持ったなり何時までも読みそうにしないので、我慢しきれなくなつた細君はついに夫を促した。

「あなたその端書は比田さんから来たんですよ」

健三は漸やく書物から眼を放した。

「あの人の事で何か用事が出来たんですって」

なるほど端書には島田の事で会いたいからちよつと来てくれと書いた上に、日と時刻が明記してあつた。わざわざ彼を呼び寄せる失礼も鄭寧に詫びてあつた。

「どうしたんでしょう」

「まるで判明^{わか}らないね。相談でもなかりうし。こつちから相談を持ち懸けた事なんかまるでないんだから」

「みんなで交際^{つきあ}つちやいけないって忠告でもなさるんじゃないくつて。御兄^{おあにい}さんもいらつしやると書いてあるでしょう、其所^{そこ}に」

端書には細君のいつた通りの事がちゃんと書いてあつた。

兄の名前を見た時、健三の頭にふとまた御縫さんの影が差した。島田が彼とこの女を一所にして、後まで両家の關係をつなごうとした如く、この女の生母はまた彼の兄と自分の娘とを夫婦にしたような希望^もを有つていたらしかったのである。

「健ちゃん^{うち}の宅^{うち}とこんな間柄にならないとね。あたしも始終健ちゃん^{うち}の家へ行かれるんだけれども」

御藤さんが健三にこんな事をいつたのも、顧りみれば古い昔であつた。

「だって御縫さんが今嫁かたづいてる先は元からの許嫁いいなずけなんですよ」

「許嫁でも場合によつたら断る気だつたんだろうよ」

「一体御縫さんはどっちへ行きたかつたんでしょう」

「そんな事が判明わかるもんか」

「じゃ御兄おあにいさんの方はどうなの」

「それも判明らんさ」

健三の子供の時分の記憶の中には、細君の問に応ぜられるような人情がかった材料が一つもなかった。

二十四

健三はやがて返事の端書を書いて承知の旨を答えた。そうして指定の日が来た時、約束通りまた津の守坂へ出掛けた。

彼は時間に対して頗^{すこ}ぶる正確な男であつた。一面において愚直に近い彼の性格は、一面においてかえつて彼を神経的にした。彼は途中で二度ほど時計を出して見た。實際今の彼は起きると寐^ねるまで、始終時間に追い懸けられているようなものであつた。

彼は途^{みちみち}々自分の仕事について考えた。その仕事は決して自分の思い通りに進行していなかった。一步目的へ近付くと、目的はまた一步彼から遠ざかつて行つた。

彼はまた彼の細君の事を考えた。その当時強烈であつた彼女の

ヒステリー

歇私的里は、自然と軽くなつた今でも、彼の胸になお暗い不安の影を投げてやまなかつた。彼はまたその細君の里の事を考えた。経済上の圧迫が家庭を襲おうとしているらしい気配が、船に乗つた時の鈍い動揺を彼の精神に与える種となつた。

彼はまた自分の姉と兄と、それから島田の事も一所に纏めて考へなければならなかつた。凡てが頽^{すべ}廢^{たいはい}の影であり凋^{ちようらく}落^{らく}の色であるうちに、血と肉と歴史とで結び付けられた自分をも併せて考へなければならなかつた。

姉の家へ来た時、彼の心は沈んでいた。それと反対に彼の気は興奮していた。

「いやどうもわざわざ御呼び立て申して」と比田が挨拶^{あいさつ}した。

これは昔の健三に対する彼の態度ではなかった。しかし變つて行く世相のうちに、彼がひとり姉の夫たるこの人にだけ優者になり得たという誇りは、健三にとって満足であるよりも、むしろ苦痛であつた。

「ちよつと上がろうにも、どうにもこうにも忙がしくつて遣り切れないもんですから。現に昨夜なども宿直でしてね。今夜も実は頼まれたんですけれども、貴方あなたと御約束があるから、断わつてやつとの事で今歸つて来たところで」

比田のいうところを黙つて聴いてみると、彼が變な女をその勤つとめ先さきの近所に囲つているといふ噂うわさはまるで嘘うそのようであつた。

古風な言葉で形容すれば、ただ算筆さんぴつに達者だといふ事の外に、

大した学問も才幹もない彼が、今時の会社で、そう重宝がられるはずがないのに。——健三の心にはこんな疑問さえ湧いた。

「姉さんは」

「それに御夏おなつがまた例の喘息ぜんそくでね」

姉は比田のいう通り針箱の上に載せた括り枕くくまくらに倚りかかつて、ぜいぜいいつていた。茶の間を覗のぞきに立った健三の眼に、その乱れた髪の毛がむごたらしく映った。

「どうです」

彼女は頭を真直まつすぐに上る事さえ叶かなわないで、小さな顔を横にしたまま健三を見た。挨拶をしようと思う努力が、すぐ咽喉のどに障ったと見えて、今まで多少落ち付いていた咳嗽せきの発作が一度に來た。

その咳嗽は一つがまだ済まないうちに、後から後から仕切りなしに出て来るので、傍はたで見えていても気が退ひけた。

「苦しそうだな」

彼は独り言のようにこう囁つぶやいて、眉まゆを顰ひそめた。

見馴れない四十恰がつこう好の女が、姉の後うしろから脊中せなかを撫さすっている傍

に、一本の杉すぎ箸ばしを添えた水飴みずあめの入物が盆の上に載せてあつた。

女は健三に会釈した。

「どうも一昨日おとといからね、あなた」

姉はこうして三日も四日も不眠絶食の姿で衰ろえて行つたあと、また活作用の弾力で、じりじり元へ戻るのを、年来の習慣としていた。それを知らない健三ではなかったが、目まのあたり前この猛烈な

咳嗽と消え入るような呼吸遣とを見ていると、病氣に罹つた当人よりも自分の方がかえつて不安で堪らなくなつた。

「口を利こうとすると咳嗽を誘い出すのでしよう。静かにしてい
らつしやい。私はあつちへ行くから」

発作の一仕切収まつた時、健三はこういつて、またもとの座敷へ歸つた。

二十五

比田は平氣な顔をして本を読んでいた。「いえなにまた例の持病ですから」といつて、健三の慰問にはまるで取り合わなかつた。

同じ事を年に何度となく繰り返して行くうちに、自然と末枯れて来る氣の毒な女房の姿は、この男にとって毫も感傷の種にならないように見えた。實際彼は三十年近くも同棲して来た彼の妻に、ただの一つ優しい言葉を掛けた例のない男であつた。

健三の這入つて来るのを見た彼は、すぐ読み懸けの本を伏せて、鉄縁の眼鏡を外した。

「今ちよつと貴方が茶の間へ行つていらした間に、下らないものを読み出したんです」

比田と読書——これはまた極めて似つかわしくない取合わせであつた。

「何ですか、それは」

「なに健ちゃんなんぞの読むもんじゃありません、古いもんで」

比田は笑いながら、机の上に伏せた本を取って健三に渡した。

それが意外にも『常山紀談』じようざんきだんだったので健三は少し驚ろいた。

それにしても自分の細君が今にも絶息しそうな勢で咳せき込んでいるのを、まるで余所事よそこごとのように聴いて、こんなものを平気で読んでいるところ、如何いかにも能くよこの男の性質をあらわしていた。

「私わたしや旧弊だからこういう古い講談物が好きでしてね」

彼は『常山紀談』を普通の講談物と思っているらしかった。しかしそれを書いた湯浅常山ゆあさじようざんを講釈師と間違えるほどでもなかった。

「やッぱり学者なんでしようね、その男は。曲亭馬琴きょくてい ばきんとどつちでしょう。私や馬琴の『八犬伝はっけん でん』も持っているんだが」

なるほど彼は桐きりの本箱の中に、日本紙へ活版で刷った予約の『八犬伝』を綺麗きれいに重ね込んでいた。

「健ちゃんは『江戸名所図絵』を御持ちですか」

「いいえ」

「ありや面白い本ですね。私や大好きだ。なんなら貸して上げましょうか。なにしろ江戸といった昔の日本橋にほんばしや桜田さくらだがすっかり分るんだからね」

彼は床の間の上にある別の本箱の中から、美濃紙版みのがみの浅黄あさぎの表紙をした古い本を一、二冊取り出した。そうしてあたかも健三を

『江戸名所図絵』の名さえ聞いた事のない男のように取扱った。その健三には子供の時分その本を蔵くらから引き摺ずり出して来て、頁ページから頁へと丹念に挿絵さしえを拾って見て行くのが、何よりの楽しみであつた時代の、懐かしい記憶があつた。中にも駿河町するがちようという所に描かいてある越後屋えちごやの暖簾のれんと富士山とが、彼の記憶を今代表する焼しようてん点となつた。

「この分ではとてもその頃の悠長な心持で、自分の研究と直接関係のない本などを読んでゐる暇は、薬にしたくつても出て来こまい」健三は心のうちでこう考えた。ただ焦燥あせりに焦燥つてばかりいる今の自分が、恨めしくもありまた気の毒でもあつた。

兄が約束の時間までに顔を出さないので、比田はその間を繋つなぐ

ためか、しきりに書物の話をつづけようとした。書物の事なら何時まで話していても、健三にとって迷惑にならないという自信でも持っているように見えた。不幸にして彼の知識は、『常山紀談』を普通の講談ものとして考える程度であつた。それでも彼は昔し出た『風俗画報』を一冊残らず綴とじて持っていた。

本の話が尽きた時、彼は仕方なしに問題を変えた。

「もう来そうなもんですね、長ちようさんも。あれほどいつてあるんだから忘れるはずはないんだが。それに今日は明けの日だから、遅くとも十一時頃までには帰らなきゃならないんだから。何ならちよつと迎むかいに遣やりましょうか」

この時また変化が来たと見えて、火の着くように咳き入る姉の

声が茶の間の方で聞こえた。

二十六

やがて門かどぐち口の格子こうしを開けて、沓くつぬぎ脱へ下駄げたを脱ぐ音がした。
「やつと来たようですぜ」と比田ひだがいった。

しかし玄関を通り抜けたその足音はすぐ茶の間へ這入はいった。

「また悪いの。驚ろいた。ちつとも知らなかった。何時いつから」

短かい言葉が感投詞のようにまた質問のように、座敷に坐すわつて
いる二人の耳に響いた。その声は比田の推察通りやっぱり健三の
兄であつた。

「長さん、先刻さつきから待つてるんだ」

性急な比田はすぐ座敷から声を掛けた。女房の喘息ぜんそくなどはどうなつても構わないといった風のその調子が、如何いかにもこの男の特性をよく現わしていた。「本当に手前勝手な人だ」とみんなからいわれるだけあつて、彼はこの場合にも、自分の都合より外に何にも考えていないように見えた。

「今行きますよ」

ちようたろう

長太郎も少し癩しやくだと見えて、なかなか茶の間から出て来なかつた。

つた。

「重湯おもゆでも少し飲んだら好いでしよう。厭いや？　でもそう何にも食

べなくつちや身体からだが疲れるだけだから」

姉が息苦しくって、受答えが出来かねるので、脊中せなかを撫さすつていた女が一口ごとに適宜な挨拶あいさつをした。平生へいぜい健三よりは親しくその宅うちへ出入でいりする兄は、見馴みなれないこの女とも近付ちかづきと見えた。そのせいか彼らの応対は容易に尽きなかった。

比田はぷりつと膨ふくれていた。朝起きて顔を洗う時のように、両手で黒い顔をこすごしごし擦こすった。しまいに健三の方を向いて、小さな声でこんな事をいった。

「健ちゃんあれだから困るんですよ。口ばかり多くってね。こつちも手がないから仕方なしに頼むんだが」

比田の非難は明らかに健三の見知らない女の上に投げ掛けられた。

「何ですあの人は」

「そら梳手すきての御勢おせいですよ。昔し健ちゃんあすの遊びあそびに来る時分、よくいたじゃありませんか、宅に」

「へええ」

健三には比田の家うちでそんな女に会った覚おぼえが全くなかった。

「知りませんね」

「なに知らない事があるもんですか、御勢だもの。あいつはね、御承知の通りまことに親切で実意のある好い女なんだが、あれだから困るんです。喋しゃべ舌べるのが病なんだから」

よく事情を知らない健三には、比田のいう事が、ただ自分だけに都合のいい誇張のように聞こえるばかりで、大した感銘も与え

なかった。

姉はまた咳^せき出した。その発作が一段落片付くまでは、さすがの比田も黙^{もく}っていた。長太郎も茶の間を出て来なかった。

「何だか先刻^{さつき}より劇^{はげ}しいようですね」

少し不安になった健三は、そういいながら席を立とうとした。

比田は一も二もなく留めた。

「なあに大丈夫、大丈夫。あれが持病なんですから大丈夫。知らない人が見るとちよつと吃^{びっくり}驚^{おどろ}しますがね。私^{わたし}なんざあもう年来馴^なれっ子になつてゐるから平気なもんですよ。実際またあれを一々苦にしているようじゃ、とても今^{こんにち}日まで一所に住んでゐる事は出来ませんからね」

健三は何とも答える訳に行かなかった。ただ腹の中で、自分の細君が歇私的里ヒステリーの発作に冒された時の苦しい心持を、自然の対照として描き出した。

姉の咳嗽せきが一収ひとおさまり収った時、長太郎は始めて座敷へ顔を出した。

「どうも済みません。もつと早く来るはずだったが、生憎あいにく珍らしく客があつたもんだから」

「来たか長さん待つてたほい。冗談じゃないよ。使でも出そうかと思つてたところですよ」

比田は健三の兄に向つてこの位な気安い口調で話の出来る地位にあつた。

二十七

三人はすぐ用談に取り掛った。比田ひだが最初に口を開いたひら。

彼はちよつとした相談事にも仔細しさいぶる男であつた。そうして仔細しさいぶればぶるほど、自分の存在が周囲から強く認められると考えているらしかった。「比田さん比田さんって、立てて置きさえすりや好いんだ」と皆みんななが蔭かげで笑つていた。

「時に長さんどうしたもんだろう」

「そう」

「どうもこりや天から筋が違ちがうんだから、健ちゃんに話をするま

でもなかろうと思うんだがね、私わたしや」

「そうさ。今更そんな事を持ち出して来たって、こっちで取り合
う必要もないだろうじゃないか」

「だから私も突つ跳ぽねたのさ。今時分そんな事を持ち出すのは、
まるで自分の殺した子供を、もう一返ぺん生かしてくれって、御寺様
へ頼みに行くようなものだから御止およしなさいって。だけど大將い
くら何といつても、坐すわり込んで動いごかないんだからね、仕方がない。
しかしあの男がああやって今頃私の宅うちへのんこのしやあで遣やつて
来るのも、実はというと、やっぱり昔れこし〇の関係があつたからの
事さ。だってそりや昔しも昔し、ずっと昔しの話でさあ。その上
ただで借りやしまいしね、……」

「またただで貸す風でもなしね」

「そうさ。口じや親類付合だとか何とかいつてるくせに、金にかけちやあかの他人より阿漕あこぎなんだから」

「来た時にそういつて遣れば好いのに」

比田と兄との談話はなかなか元へ戻つて来なかつた。ことに比田は其所そこに健三のいるのさえ忘れてしまったように見えた。健三は好加減いいかげんに何とか口を出さなければならなくなつた。

「一体どうしたんです。島田がこちらへでも突然伺つたんですか」

「いやわざわざ御呼び立て申して置いて、つい自分の勝手ばかり喋舌しゃべつて済みません。——じや長さん私から健ちゃんに一応その顛末てんまつを御話しする事にしようか」

「ええどうぞ」

話しは意外にも単純であつた。——ある日島田が突然比田の所へ来た。自分も年を取つて頼りにするものがないので心細いという理由の下に、^{もと}昔し通り島田姓に復歸してもらいたいからどうぞ健三にそう取り次いでくれと頼んだ。比田もその要求の突^{とつ}飛^びなのに驚ろいて最初は拒絶した。しかし何といつても動かないので、ともかくも彼の希望だけは健三に通じようと受合つた。——ただこれだけなのである。

「少し変ですねえ」

健三にはどう考えても変としか思われなかつた。

「変だよ」

兄も同じ意見を言葉にあらわした。

「どうせ変にや違ない、何しろ六十以上になって、少しやきが廻つてゐるからね」

「慾よくでやきが廻りやしないか」

比田も兄も可笑おかしように笑つたが、健三は独りその仲間へ入る事が出来なかつた。彼は何時までも変だと思ふ氣分に制せられていた。彼の頭から判断すると、そんな事は到底ありようはずがなかつた。彼は最初に吉田が来た時の談話を思い出した。次に吉田と島田が一所に來た時の光景を思い出した。最後に彼の留守に旅先から歸つたといつて、島田が一人で訪ねて來た時の言葉を思い出した。しかしどこをどう思い出しても、其そこ所からこんな結果が

生れて来ようとは考えられなかった。

「どうしても変ですね」

彼は自分のために同じ言葉をもう一度繰り返して見た。それから漸やっと氣を換えてこういった。

「しかしそりや問題にやならないでしょう。ただ断りさえすりや好いんだから」

二十八

健三の眼から見ると、島田の要求は不思議な位理に合わなかった。従つてそれを片付けるのも容易であつた。ただ簡単に断りさ

えすれば済んだ。

「しかし一旦は貴方あなたの御耳まで入れて置かないと、私の落度わたくしになりますからね」と比田は自分を弁護するようにいった。彼はどこまでもこの会合を真面目まじめなものにしなければ気が済まないらしかった。それで言う事も時によつて変化した。

「それに相手が相手ですからね。まかり間違えば何をするか分らないんだから、用心しなくっちゃいけませんよ」

「焼が廻つてゐるなら構わないじゃないか」と兄が冗談半分に彼の矛盾を指摘すると、比田はなお真面目になつた。

「焼が廻つてゐるから怖いんです。なに先が当り前の人間なら、私わたしだつてその場ですぐ断つちまいまさあ」

こんな曲折は会談中に時々起つたが、要するに話は最初に戻つて、つまり比田が代表者として島田の要求を断るという事になった。それは三人が三人ながら始めから予期していた結局なので、そこ其所へ行き着くまでの筋道は、健三から見ると、むしろ時間の空費に過ぎなかつた。しかし彼はそれに対して比田に礼を述べる義理があつた。

「いえ何御礼なんぞ御おつしや仰られると恐縮します」といった比田の方はかえつて得意であつた。誰が見ても宅うちへも帰らずに忙がしがっている人の様子とは受取れないほど、調子づいて来た。

彼は其所にある塩煎餅しおせんべいを取つてやたらにぼりぼり噛かんだ。そうしてその相間あいま々々には大きな湯呑ゆのみへ茶を何杯も注つぎ易かえて飲ん

だ。

「相変らず能く食べますね。今でも鰻飯を二つ位遣るんではよう」

「いや人間も五十になるともう駄目ですね。もとは健ちゃんの見ている前で天ぷら蕎麦を五杯位ぺろりと片付けたもんでしたかね」
比田はその頃から食気の強い男であつた。そうして余計食うのを自慢にしていた。それから腹の太いのを賞められたがつて、時機さえあれば始終叩いて見せた。

健三は昔しこの人に連れられて寄席などに行つた歸りに、能く二人して屋台店の暖簾を潜つて、鮎や天麩羅の立食をした當時を思い出した。彼は健三にその寄席で聴いたしかおどりとかい

う三味線しやみせんの手を教えたり、またはさばを読むという隠語などを習い覚えさせたりした。

「どうもやつぱり立食に限るようですね。私もこの年になるまで、段々方々食って歩いて見たが。健ちゃん、一遍かるいざわ軽井沢で蕎麦を食って御覧なさい、騙だまされたと思つて。汽車の停とまつてるうちに、降りて食うんです、プラットフォームの上へ立つてね。さすが本場だけあつて旨うもうがすぜ」

彼は信心を名として能く方々遊び廻る男であつた。

「それよか、善光寺ぜんこうじの境内けいだいに元祖藤八拳指南所とうはちけんという看板が懸かつていたには驚ろいたね、長さん」

「這はい入いつて一つ遣はなつて来やしないか」

「だって 束修そくしゅうが要いるんだからね、君」

こんな談話を聞いていると、健三も何時か昔の我に帰ったような心持になった。同時に今の自分が、どんな意味で彼らから離れてどこに立っているかも明らかに意識しなければならなくなった。しかし比田は一向そこに気が付かなかった。

「健ちゃんはたしか京都へ行つた事がありますね。彼所あそこに、ちんちらでんき皿持もてこ汁飲ましょつて鳴く鳥がいるのを御存じですか」などと訊きいた。

先刻さつきから落付おちついていた姉が、また劇はげしく咳せき出した時、彼は漸ようやく口を閉じた。そうしてさもなくさくさしたといわぬばかりに、左右の手の平を揃そろえて、黒い顔をごしごし擦こすった。

兄と健三はちよつと茶の間の様子を覗き^{のぞ}に立つた。二人とも発作の静まるまで姉の枕元に坐^{すわ}つていた後で、別々に比田の家を出た。

二十九

健三は自分の背後にこんな世界の控えている事を遂に忘れることが出来なくなつた。この世界は平^{へい}生^{せい}の彼にとって遠い過去のものであつた。しかしいざという場合には、突然現在に変化しなければならぬ性質を帯びていた。

彼の頭には願^{がんにんぼうず}仁坊主に似た比田の毬栗^{いがぐりあたま}頭が浮いたり沈ん

だりした。猫のように顚あごの詰った姉の息苦しく喘あえいでいる姿が薄暗く見えた。血の気の竭つきかけた兄に特有なひすばった長い顔も出たり引込ひっこんだりした。

昔しこの世界に人となつた彼は、その後自然の力でこの世界から独り脱け出してしまった。そうして脱け出したまま永く東京の地を踏まなかつた。彼は今再びその中へ後戻りをして、久しぶりに過去の臭においを嗅かいだ。それは彼に取つて、三分の一の懐かしさと、三分の二の厭いやらしさとを齎もたらす混合物であつた。

彼はまたその世界とはまるで関係のない方角を眺めた。すると其所そこには時々彼の前を横切る若い血と輝いた眼を有もつた青年がいた。彼はその人々の笑いに耳を傾むけた。未来の希望を打ち出す

鐘のように朗かなその響が、健三の暗い心を躍らした。

或日彼はその青年の一人に誘われて、池の端を散歩した歸りに、
ひろ小路から切通しへ抜ける道を曲った。彼らが新らしく建て
られた見番の前へ来た時、健三はふと思い出したように青年の
顔を見た。

彼の頭の中には自分とまるで縁故のない或女の事が閃いた。そ
の女は昔し芸者をしていた頃人を殺した罪で、二十年余も牢屋の
中で暗い月日を送った後、漸と世の中へ顔を出す事が出来るよう
になったのである。

「さぞ辛いだろう」

容色を生命とする女の身になったら、殆んど堪えられない淋

しみが其所そこにあるに違ないと健三は考えた。しかしいくらでも春が永く自分の前に続いているとしか思わない伴つれの青年には、彼の言葉が何ほどの効果にもならなかった。この青年はまだ二十三、四であつた。彼は始めて自分と青年との距離を悟つて驚ろいた。

「そういう自分もやっぱりこの芸者と同じ事なのだ」

彼は腹の中で自分と自分にこういい渡した。若い時から白髪が生えたがる性質たちの彼の頭には、気のせいか近頃めつきり白い筋が増して来た。自分はまだまだだと思つてゐるうちに、十年は何時の間にか過ぎた。

「しかし他事ひとごとじゃないね君。その実僕も青春時代を全く牢獄うちの裡で暮したのだから」

青年は驚ろいた顔をした。

「牢獄とは何です」

「学校さ、それから図書館さ。考えると両方ともまあ牢獄のようなものだね」

青年は答えなかった。

「しかし僕がもし長い間の牢獄生活をつづけなければ、こんにち今日の僕は決して世の中に存在していないんだから仕方がない」

健三の調子は半ば弁解的であつた。半ばじちようてき自嘲的であつた。過

去の牢獄生活の上に現在の自分を築き上げた彼は、その現在の自分の上に、是非とも未来の自分を築き上げなければならなかつた。それが彼の方針であつた。そうして彼から見ると正しい方針に違

なかった。けれどもその方針によつて前へ進んで行くのが、この時の彼には徒らいたずに老ゆるという結果より外に何物をも持ち来きたさないように見えた。

「学問ばかりして死んでしまつても人間は詰らないね」

「そんな事はありません」

彼の意味はついに青年に通じなかった。彼は今の自分が、結婚当時の自分と、どんなに變つて、細君の眼に映るだろうかを考えながら歩いた。その細君はまた子供を生むたびに老けて行つた。髪の毛なども気の引けるほど抜ける事があつた。そうして今は既に三番目の子を胎内に宿していた。

三十

家^{うち}へ帰ると細君は奥の六畳に手^て枕^{まくら}をしたなり寐^ねていた。健三はその傍^{そば}に散らばっている赤い片^{きれ}端^{はし}だの物^{もの}指^{さし}だの針箱だのを見て、またかという顔をした。

細君はよく寐る女であつた。朝もことによると健三より遅く起きた。健三を送り出してからまた横になる日も少なくなかつた。こうしてあくまで眠りを貪^{むさ}ぼらないと、頭が痺^{しび}れたようになって、その日一日何事をしても判^は然^{つきり}しないというのが、常に彼女の弁解であつた。健三はあるいはそうかも知れないと思つたり、またはそんな事があるものかと考えたりした。ことに小言^{こごと}をいったあ

とで、寐られるときは、後の方の感じが強く起った。

「不貞寐ふてねをするんだ」

彼は自分の小言が、歇私ヒステリー的里性しりようの細君に對して、どう反応す

るかを、よく觀察してやる代りに、單なる面つらあて当あたのために、こう

した不自然の態度を彼女が彼に示すものと解釈して、苦々つぶやしい囁ささ

きを口の内もで洩もらす事がよくあつた。

「何故なぜ夜早く寐ないんだ」

彼女は宵つ張であつた。健三にこういわれる度に、夜は眼が冴さえて寐られないから起きているのだという答弁をきつとした。そうして自分の起きていたい時までには必ず起きて縫物の手をやめなかつた。

健三はこうした細君の態度を悪^{にく}んだ。同時に彼女の歇^{ヒステリー}私^リ的^ー里を恐れた。それからもしや自分の解釈が間違つてはいはしまいかという不安にも制せられた。

彼は其所^{そこ}に立つたまま、しばらく細君の寐^ひ顔を見詰めていた。肱^{ひじ}の上に載せられたその横顔はむしろ蒼^{あお}白^{しろ}かった。彼は黙つて立つていた。御住^{おすみ}という名前さえ呼ばなかった。

彼はふと眼を転じて、あらわな白^{かい}腕^なの傍に放り出された一^{ひとつ}束^ばの書^{かき}物^{もの}に気を付けた。それは普通の手紙の重なり合ったものでもなければ、また新らしい印刷物を一^{ひとつ}纏^{まと}に括^{くく}つたものとも見えなかった。惣^{そう}体^{たい}が茶色がかつて既に多少の時代を帯びている上に、古風なかんじん撚^{より}で丁寧な結び目がしてあつた。その

書ものの一端は、殆んど細君の頭の下に敷かれていられると思われ、位、彼女の黒い髪で、健三の目を遮ぎっていた。

彼はわざわざそれを引き出して見る気にもならず、また眼を蒼白い細君の額のひたい上に注いだ。彼女の頬は滑り落ちるようほおにこけていた。

「まあ御瘦おやせなすった事」

久しぶりに彼女を訪問した親族のある女は、近頃の彼女の顔を見て驚ろいたように、こんな評を加えた事があつた。その時健三は何故なぜだかこの細君を瘦せさせた凡すべての原因が自分一人にあるような心持がした。

彼は書齋に入った。

三十分も経ったと思う頃、門口かどぐちを開ける音がして、二人の子供が外から帰つて来た。坐すわっている健三の耳には、彼らと子守との問答が手に取るように聞こえた。子供はやがて馳かけ込むように奥へ入った。其所ではまた細君が蒼蠅うるさいといつて、彼らを叱しかる声が出た。

それからしばらくして細君は先刻さつき自分の枕元にあつた一束の書ものを手に持ったまま、健三の前にあらわれた。

「先ほど御留守に御おあにい兄さんがいらつしやいましたね」

健三は万年筆の手を止めて、細君の顔を見た。

「もう帰ったのかい」

「ええ。今ちよつと散歩に出掛ましたから、もうじき帰りましよ

うって御止めしたんですけれども、時間がないからって御上りおあがになりませんでした」

「そうか」

「何でも谷中やなかに御友達とかの御葬式があるんですって。それで急いで行かないと間に合わないから、上ってられないんだと仰おつしやいました。しかし帰りに暇があつたら、もしかすると寄るかも知れないから、帰ったら待つてるようにいつてくれって、いい置いていらつしやいました」

「何の用なのかね」

「やっぱりあの人の事なんだそうです」

兄は島田の事で来たのであつた。

三十一

細君は手に持った書かきつけ付の束を健三の前に出した。

「これを貴夫あなたに上げてくれと仰おつしやいました」

健三は怪訝けげんな顔をしてそれを受取った。

「何だい」

「みんなあの人に関係した書類なんだそうです。健三に見せたら参考になるだろうと思って、用筆筒ようだんすの抽匣ひきだしの中にしまつて置いたのを、今日出きようして持つて来たつて仰おつしやいました」

「そんな書類があつたのかしら」

彼は細君から受取った一括^{ひとくく}りの書付を手に載せたまま、ぼんやり時代の付いた紙の色を眺めた。それから何も意味なしに、裏表を引繰返して見た。書類は厚さにしてほぼ二寸^{すん}もあつたが、風の通らない湿気^{しっけ}た所に長い間放り込んであつたせいか、虫に食われた一筋の痕^{あと}が偶然健三の眼を懐古的にした。彼はその不規則な筋を指の先でざらざら撫^なでて見た。けれども今更^{てい}鄭^{ねい}寧^{けい}に絡^{から}げたかんじん撚^{より}の結び目を解^{ほど}いて、一々中を検^{あら}ためる気も起らなかつた。

「開けて見たつて何が出て来るものか」

彼の心はこの一句でよく代表されていた。

「御父さまが後^{のちのち}々々のためにちゃんと一纏^{ひとまと}めにして取つて御置^{おおき}に

なつたんですって」

「そうか」

健三は自分の父の分別と理解力に対して大した尊敬を払っていなかった。

「おやじの事だからきつと何でもかんでも取って置いたんだろう」

「しかしそれもみんな貴夫に対する御親切からなんでしょう。あんな奴だから己おれのいなくなつた後のちに、どんな事をいつて来ないとも限らない、その時にはこれが役に立つて、わざわざ一纏めにおあにいして、御兄さんに御渡になつたんだそうですよ」

「そうかね、己は知らない」

健三の父は中気で死んだ。その父のまだ達者でいるずっと前か

ら、彼はもう東京にいなかった。彼は親の死目しにめにさえ会わなかった。こんな書付が自分の眼に触れないで、長い間兄の手元に保管されていたのも、別段の不思議ではなかった。

彼は漸ようやく書類の結目を解といて一所に重なっているものを、一々ほごし始めた。手続き書と書いたものや、取り替かわせ一札の事と書いたものや、明治二十一年子ね一月約やく定じよう金請取きんうけとりの証と書いた半紙二つ折の帳面やらが順々にあらわれて来た。その帳面のしまいには、右本日受取うけとり右月賦金は皆かいざいあいなりそうろうこと済相成候事と島田の手蹟で書いて黒い判がべたりと捺おしてあつた。

「おやじは月々三円か四円ずつ取られたんだな」

「あの人にですか」

細君はその帳面を逆さまに覗き込んでいた。^{のぞ}

「メ《しめ》ていくらになるかしら。しかしこの外にまだ一時に遣ったものがあるはずだ。おやじの事だから、きつとその受取を取って置いたに違ない。どこかにあるだろう」

書付はそれからそれへと続々出て来た。けれども、健三の眼にはどれもこれもごちやごちやして容易に解らなかつた。彼はやがて四つ折にして一纏めに重ねた厚みのあるものを取り上げて中を開いた。

「小学校の卒業証書まで入れてある」

その小学校の名は時によつて変つていた。一番古いものには第一大学区第五中学区第八番小学などという朱印が押してあつた。

「何ですかそれは」

「何だか己も忘れてしまった」

「よつぽど古いものね」

証書のうちには賞状も二、三枚交まじつていた。昇のぼり竜と降くだり竜で丸い輪廓りんかくを取った真中に、甲科と書いたり乙科と書いたりしてある下に、いつも筆墨紙と横に断つてあつた。

「書物も貰もらつた事があるんだがな」

彼は『勸善訓蒙かんぜんくんもう』だの『輿地誌略よちしりやく』だのを抱いて喜びの余

り飛んで宅へ歸つた昔を思い出した。御褒美ごほうびをもらう前の晩夢に

見た蒼い竜あおと白い虎の事も思い出した。これらの遠いものが、平へ

生いぜいと違つて今の健三には甚だ近く見えた。

三十二

細君にはこの古臭い免状がなおの事珍らしかった。夫の一旦下へ置いたのをまた取り上げて、一枚々々鄭寧に剥繰つて見た。変ですわね。下等小学第五級だの六級だのつて。そんなものがあつたんでしょうか」

「あつたんだね」

健三はそのまま外の書付に手を着けた。読みにくい彼の父の手蹟が大いに彼を苦しめた。

「これを御覧、とても読む勇氣がないね。ただでさえ判明らない

ところへ持つて来て、むやみに朱を入れたり棒を引いたりしてあるんだから」

健三の父と島田との懸合かけあいについて必要な下書したがりらしいものが細君の手に渡された。細君は女だけあつて、綿密にそれを読み下した。

「貴夫あなたの御父さまはあの島田つて人の世話をなすつた事があるのね」

「そんな話は己おれも聞いてはいるが」

「此所ここに書いてありますよ。——同人幼少つとめむきにて勤向つとめむき相成りがたく当方とうかたへ引き取り五力年間養育致候縁合そろえんあいを以てと」

細君の読み上げる文章は、まるで旧幕時代の町人が町奉行まちぶぎようか

何かへ出す訴状のように聞こえた。その口調に動かされた健三は、自然古風な自分の父を眼の前に髣髴ほうふつした。その父から、將軍の鷹狩たかがりに行く時の模様などを、それ相当の敬語で聞かされた昔も思い合された。しかし事実の興味が主として働らきかけている細君の方ではまるで文体などに頓とん着じゃくしなかった。

「その縁故で貴夫はあの人の所へ養子に遣やられたのね。此所にそう書いてありますよ」

健三は因果な自分を自分で憐あわれんだ。平気な細君はその続きを讀み出した。

「右健三三歳のみぎり養子に差遣さしかわし置候おきそろ処ところ平吉儀妻常へいきちぎさいつねと不和を生じ、遂に離別と相成候につき当時八歳の健三を当方へ

引き取りこんにち今日まで十四力年間養育致し、——あとは真赤まつかでごちやごちやして読めないわね」

細君は自分の眼の位置と書付の位置とを色々に配合して後を読もうと企てた。健三は腕組をして黙って待っていた。細君はやがてくすくす笑い出した。

「何が可笑おかしいんだ」

「だって」

細君は何にもいわずに、書付を夫の方に向け直した。そうして人さし指の頭で、細かく割わり註ちゆうのように朱で書いた所を抑えた。「ちよつと其所そこを読んで御覧なさい」

健三は八の字を寄せながら、その一行を六むずかしそうに読み下

した。

「取扱い所勤務中遠山藤と申す後家へ通じ合い候が事の起り。」

——何だ下らない」

「しかし本当なんでしょう」

「本当は本当さ」

「それが貴夫の八ツの時なのね。それから貴夫は御自分の宅へ御
歸りになつた訳ね」

「しかし籍を返さないんだ」

「あの人が？」

細君はまたその書付を取り上げた。読めない所はそのままに
して置いて、読める所だけ眼を通して、自分のまだ知らない事実

が出て来るだろうという興味が、少なからず彼女の好奇心を唆^{そそ}つた。

書付のしまいの方には、島田が健三の戸籍を元通りにして置いて実家へ返さないのみならず、いつの間にか戸主に改めた彼の印^{いんぎよう}形^{らんよう}を濫用して金を借り散らした例などが挙げてあつた。

いよいよ手を切る時に養育料として島田に渡した金の証文も出て来た。それには、しかる上は健三離縁本籍と引替に当金——円御渡し被^{くだされ}下、残金——円は毎^{まいげつ}月三十日限り月賦にて御差入^{おさしいれ}のつもり御対談云々と長たらしく書いてあつた。

「凡^{すべ}て変^{へんてこ}挺な文句ばかりだね」

「親類取扱人比田寅八^{ひだとらはち}つて下に印が押してあるから、大方比田さ

んでも書いたんでしょ」

健三はついこの間会った比田の万事に心得顔な様子と、この証文の文句とを引き比べて見た。

三十三

葬式の帰りに寄るかも知れないといった兄は遂に顔を見せなかった。

「あんまり遅くなったから、すぐ御帰りになつたんでしょ」

健三にはその方が便宜であつた。彼の仕事は前の日か前の晩を潰^{つぶ}して調べたり考えたりしなければ義務を果す事の出来ない性質

のものであつた。従つて必要な時間を他^{ひと}に食い削られるのは、彼に取つて甚しい苦痛になつた。

彼は兄の置いて行つた書類をまた一纏^{ひとまと}めにして、元のかんじん燃^{より}で括^{くく}ろうとした。彼が指先に力を入れた時、そのかんじん燃はぷつりと切れた。

「あんまり古くなつて、弱つたのね」

「まさか」

「だって書付の方は虫が食つてゐる位ですもの、貴夫^{あなた}」

「そういえばそうかも知れない。何しろ抽斗^{ひきだし}に投げ込んだなり、今日^{こんにち}まで放つて置いたんだから。しかし兄貴も能く^よまあこんなものを取つて置いたものだね。困つちや何でも売るくせに」

細君は健三の顔を見て笑い出した。

「誰も買い手がないでしょう。そんな虫の食った紙なんか」

「だがさ。能く紙屑籠かみくずかごの中へ入れてしまわなかったという事さ」

細君は赤と白で燃った細い糸を火鉢ひばちの抽斗から出して来て、其所こに置かれた書類を新らしく絡からげた上、それを夫に渡した。

「己おれの方にやしまつて置く所がないよ」

彼の周囲は書物で一杯になっていた。手文庫には文ふみ殻がらとノートがぎっしり詰っていた。空地くうちのあるのは夜具蒲団やぐふとんのしまつてある一間の戸棚けんだけであつた。細君は苦笑して立ち上つた。

「御兄おあにいさんは二、三日うちきつとまたいらつしやいますよ」

「あの事でかい」

「それもそうですけれども、今日御葬式にいらつしやる時に、袴はかまが要いるから借してくれて、此所ここで穿はいていらしたんですもの。きつとまた返しにいらつしやるに極きまつていますわ」

健三は自分の袴を借りなければ葬式の供に立てない兄の境遇を、ちよつと考えさせられた。始めて学校を卒業した時彼はその兄から貰もらったべろべろの薄羽織うすばおりを着て友達と一所いけに池の端はたで写真を撮った事をまだ覚えていた。その友達の一人いちにんが健三に向つて、この中で一番先に馬車へ乗るものは誰たれだろうといった時に、彼は返事をしないで、ただ自分の着ている羽織を淋さびしそうに眺めた。その羽織は古い紹ろの紋付に違なかつたが、悪くいえば申し訳のために破けずにいる位な見すばらしい程度のものであつた。懇意な

友人の新婚披露ひろうに招かれて星が岡ほしおかの茶寮さりように行った時も、着るものがないので、袴羽織すべとも凡て兄のを借りて間に合せた事もあった。

彼は細君の知らないこんな記憶を頭の中に呼び起した。しかしそれは今の彼を得意にするよりもかえって悲しくした。今こんじやく昔の感——そういう在ありきたり来の言葉で一番よく現せる情緒が自然と彼の胸に湧わいた。

「袴位ありそうなものだがね」

「みんな長い間に失くして御しまいなすったんでしよう」

「困るなあ」

「どうせ宅うちにあるんだから、要る時に貸して上げさいすりやそれ

で好いでしよう。毎日使うものじやなし」

「宅にある間はそれで好いがね」

細君は夫に内^{ないしょ}所で自分の着物を質に入れたついこの間の事件を思い出した。夫には何時自分が兄と同じ境遇に陥らないものでもないという悲觀的な哲学があつた。

昔の彼は貧しいながら一人で世の中に立っていた。今の彼は切り詰めた余裕のない生活をしている上に、周囲のものからは、活力の心棒のように思われていた。それが彼には辛かつた。自分のようなものが親類中で一番好くなっていると考えられるのはなおさら情^{なさけ}なかつた。

三十四

健三の兄は小役人であつた。彼は東京の真中にある或大きな局へ勤めていた。その宏壯な建物のなかに永い間憐れな自分の姿を見出す事が、彼には一種の不調和に見えた。

「僕なんぞはもう老朽なんだからね。何しろ若くつて役に立つ人が後から後からと出て来るんだから」

その建物のなかには何百という人間が日となく夜となく烈しく働らいていた。氣力の尽きかけた彼の存在はまるで形のない影のようなものに違なかつた。

「ああ厭だ」

活動を好まない彼の頭には常にこんな觀念が潜んでいた。彼は病身であつた。年齒^{とし}より早く老けた。年齒より早く干乾^{ひから}びた。そうして色沢^{いろつや}の悪い顔をしながら、死ににでも行く人のように働いた。

「何しろ夜寐^ねないんだから、身体^{からだ}に障つてね」

彼はよく風邪^{かぜ}を引いて咳嗽^{せき}をした。ある時は熱も出た。すると

その熱が必ず肺病の前兆でなければならぬように彼を脅かした。

實際彼の職業は強壯な青年にとつても苦しい性質のものに違なかつた。彼は隔晩に局へ泊らせられた。そうして夜通し起きて働らかなければならなかつた。翌^{あくるひ}日の朝彼はぼんやりして自分の宅^{うち}へ歸つて來た。その日一日は何をする勇氣もなく、ただぐたり

と寐て暮らす事さえあつた。

それでも彼は自分のためまた家族のために働らくべく余儀なくされた。

「今度は少し危険いようだから、誰かに頼んでくれないか」

改革とか整理とかいう噂うわさのあるたびに、健三はよくこんな言葉を彼の口から聞かされた。東京を離れている時などは、わざわざ手紙で依頼して来た事も一返や二返ではなかった。彼はその都度つど誰それにといつて、わざわざ要路の人を指名した。しかし健三にはただ名前が知れているだけで、自分の兄の位置を保証してもらうほどの親しみのあるものは一人もなかった。健三は頬杖ほおづえを突いて考えさせられるばかりであつた。

彼はこうした不安を何度となく繰り返しながら、昔こしから今こん日まで同じ職務に従事して、動きもしなければ発展もしなかつた。健三よりも七つばかり年上な彼の半生は、あたかも変化を許さない器械のようなもので、次第に消しょう耗こうして行くより外には何の事実も認められなかつた。

「二十四、五年もあんな事をしている間には何か出来そうなものだがね」

健三は時々自分の兄をこんな言葉で評したくなつた。その兄の派出好はでずきで勉強嫌ぎらいであつた昔も眼の前に見えるようであつた。三味線せんを弾ひいたり、一絃琴いちげんきんを習しつたり、白玉しらたまを丸めて鍋なべの中へ放り込んだり、寒天を煮て切溜きりだめで冷したり、凡すべての時間はそ

の頃の彼に取って食う事と遊ぶ事ばかりに費やされていた。

「みんな自業自得だといえ、まあそんなものさね」

これが今の彼の折々他ひとに洩もらす述懐になる位彼は怠け者であつた。

兄弟が死に絶えた後あと、自然健三の生家の跡を襲つぐようになった

彼は、父が亡くなるのを待って、家屋敷をすぐ売り払ってしまつ

た。それで元からある借金を済なして、自分は小さな宅うちへ這入はいつた。

それから其所そこに納まり切らない道具類を売払つた。

間もなく彼は三人の子の父になった。そのうちで彼の最も可愛かあい

がつていた惣そう領りようの娘が、年頃になる少し前から悪性の肺結核

に罹かかつたので、彼はその娘を救うために、あらゆる手段を講じた。

しかし彼のなし得うる凡ては残酷な運命に対して全くの徒労に帰し

た。二年越煩わづらった後で彼女が遂に斃たおれた時、彼の家の箆たんす笥はまるで空になっていた。儀式に要いる袴はかまは無論、ちよつとした紋付の羽織おりさえなかった。彼は健三の外国で着古した洋服を貰もらつて、それを大事に着て毎日局へ出勤した。

三十五

二、三日経つて健三の兄は果して細君の予想通り袴はかまを返しに來た。

「どうも遅くなつて御氣の毒さま。有難う」

彼は腰板の上に双方の端はじを折返して小さく畳んだ袴を、風呂敷

の中から出して細君の前に置いた。大の見栄坊で、ちよつとした包物を持つのも厭いやがった昔に比べると、今の兄は全く色気が抜けていた。その代り膏あぶらつけ気もなかった。彼はぱさぱさした手で、汚れた風呂敷の隅を掴つまんで、それを鄭寧ていねいに折った。

「こりや好い袴だね。近頃拵こしらえたの」

「いいえ。なかなかそんな勇氣はありません。昔からあるんです」

細君は結婚のときこの袴を着けて勿体もったいらしく坐すわった夫の姿を思ひだした。遠い所で極簡略ごくに行われたその結婚の式に兄は列席していなかった。

「へええ。そうかね。なるほどそういわれるとどこかで見たような気もするが、しかし昔のものはやっぱり丈夫なんだね。ちつと

も敗^{いた}んでいないじゃないか」

「滅多に穿^はかないんですもの。それでも一人でいるうちに能^よくそんな物を買う気になれたのね、あの人が。私^{わたくし}今でも不思議だと思いますわ」

「あるいは婚礼の時に穿くつもりでわざわざ拵えたのかも知れないね」

二人はその時の異様な結婚式について笑いながら話し合った。

東京からわざわざ彼女を伴^つれて来た細君の父は、娘に振^{ふり}袖^{そで}を

着せながら、自分は一通りの礼装さえ調^とえてい^{との}なかった。セルの

単衣^{ひとえ}を着流しのままでしまいには胡坐^{あぐら}さえ搔^かいた。婆^{ばあ}さん一人よ

り外に誰も相談する相手のない健三の方ではなおの事困った。彼

は結婚の儀式について全くの無方針であつた。もともと東京へ帰つてから貰うという約束があつたので、媒酌人なこうどもその地にはいなかった。健三は参考のためこの媒酌人が書いて送つてくれた注ちゆう意書いしよのようなものを読んで見た。それは立派な紙に楷書かいしよで認められた嚴めしいものには違なかつたが、中には『東鑑あづまかがみ』などが例に引いてあるだけで、何の実用にも立たなかつた。

「雌蝶めちようも雄蝶おちようもあつたもんじやないのよ貴方あなた。だいち御おさかず盃きの縁が欠けているんですもの」

「それで三々九度を遣つたのかね」

「ええ。だから夫婦中ふうふなかがこんなにがたぴしするんでしょう」

兄は苦笑した。

「健三もなかなかの氣^き六^むずかしやだから、御住^{おすみ}さんも骨が折れるだろう」

細君はただ笑っていた。別段兄の言葉に取り合う氣色^{けしき}も見えなかった。

「もう帰りそうなものですがね」

「今日は待つて例の事件を話して行かなくっちゃあ、……」

兄はまだその後をいおうとした。細君はふいと立つて茶の間へ時計を見に這^{はい}入った。其所^{そこ}から出て来た時、彼女はこの間の書類を手^てにしていた。

「これが要^いるんでしょう」

「いえそれはただ参考までに持つて来たんだから、多分要るまい。

もう健三に見せてくれたんでしよう」

「ええ見せました」

「何といつてたかね」

細君は何とも答えようがなかった。

「随分沢山色々な書付が這入っていますわね。この中には」

「御父さんが、今に何か事があるといけないって、丹念に取って置いたんだから」

細君は夫から頼まれてその中の最も大切らしい一部分を彼のために代読した事はいわなかった。兄もそれぎり書類について語らなくなった。二人は健三の帰るまでの時間をただの雑談に費やした。その健三は約三十分ほどして帰って来た。

三十六

彼が何時いつもの通り服装を改めて座敷へ出た時、赤と白と撚より合
せた細い糸で括くられた例の書類は兄の膝の上にあつた。

「先せん達だつては」

兄は油気の抜けた指先で、一度解きかけた糸の結び目を元の通
りに締めた。

「今ちよつと見たらこの中には君に不必要なものが紛れ込んでい
るね」

「そうですか」

この大事そうにしまい込まれてあつた書付に、兄が長い間眼を通さなかつた事を健三は知つた。兄はまた自分の弟がそれほど熱心にそれを調べていない事に気が付いた。

「御由およしの送籍願が這入はいつてゐるんだよ」

御由およしというのは兄の妻さいの名であつた。彼がその人と結婚する當時に必要であつた区長宛の願書が其所そこから出て来きようとは、二人とも思いがけなかつた。

兄は最初の妻さいを離別した。次の妻に死なれた。その二度目の妻が病氣の時、彼は大きく心配の様子もなく能く出歩よいた。病症が悪阻つわりだから大丈夫という安心もあるらしく見えたが、容体ようたいが険悪になつて後も、彼は依然としてその態度を改める様子がなかつ

たので、人はそれを氣に入らない妻つまに対する仕打とも解釈した。健三もあるいはそうだろうと思つた。

三度目の妻さいを迎える時、彼は自分から望みの女を指名して父の許諾を求めた。しかし弟には一いちごん言の相談もしなかつた。それがため我がの強い健三の、兄に対する不平が、罪もない義姉あねの方にまで影響した。彼は教育も身分もない人を自分の姉と呼ぶのは厭いやだと主張して、氣の弱い兄を苦しめた。

「なんて捌さばけない人だろう」

陰で批評の口に上るこうした言葉は、彼を反省させるよりもかえつて頑固かたくなにした。習コンヴェンション俗を重んずるために学問をした

ような悪い結果に陥つて自ら知らなかつた彼には、とかく自分の

不見識を認めて見識と誇りたがる弊^{へい}があつた。彼は慚愧^{ざんき}の眼をもつて当時の自分を回顧した。

「送籍願が紛れ込んでゐるなら、それを御返しするから、持つて行つたら好^いいでしょう」

「いいえ写しだから、僕も要らないんだ」

兄は紅白の糸に手も触れなかつた。健三はふとその日附が知りたくなつた。

「一体何時頃でしたかね。それを区役所へ出したのは」

「もう古い事さ」

兄はこれだけいつたぎりであつた。その唇には微笑の影が差した。最初も二返目も失敗^{しくじ}つて、最後にやっと自分の氣に入つた女

と一所になった昔を忘れるほど、彼は耄碌もうろくしていなかった。同時にそれを口へ出すほど若くもなかった。

「御幾年おいくつでしたかね」と細君が訊きいた。

「御由おすみですか。御由は御住さんと一つ違ですよ」

「まだ御若いのね」

兄はそれには何とも答えずに、先刻から膝ひざの上に置いた書類の帯を急に解き始めた。

「まだこんなものが這入はいっていたよ。これも君にや関係のないものだ。さつき見て僕もちよいと驚ろいたが、こら」

彼はごたごたした故紙の中から、何の雑作もなく一枚の書付を取り出した。それは喜代子きよこという彼の長女の出産届の下書であつ

た。^{みぎはほんげつ}「右者本月二十三日午前十一時五十分^{しゅつしょう}出生致^{そろ}し候」という文句の、「本月二十三日」だけに棒が引懸けて消してある上に、虫の食った不規則な線が^{すじかい}筋違に入っていた。

「これも御父^{おとつ}さんの手蹟^てだ。ねえ」

彼はその一枚の反故^{ほご}を大事らしく健三の方へ向け直して見せた。

「御覧、虫が食ってるよ。^{もつと}尤もそのはずだね。出産届ばかりじゃない、もう死亡届まで出ているんだから」

結核で死んだその子の生年月を、兄は口のうちで静かに読んでいた。

兄は過去の人であつた。華美^{はなやか}な前途はもう彼の前に横わ^{よこた}つて
い^うなかつた。何かに付けて後^{うしろ}を振り返りがちな彼と対坐^{たいざ}している
健三は、自分の進んで行くべき生活の方向から逆に引き戻される
ような気がした。

「淋^{さむ}しいな」

健三は兄の道伴^{みちづれ}になるには余りに未来の希望を多く持ち過ぎ
た。そのくせ現在の彼もかなりに淋^{さむ}しいものに違なかつた。その
現在から順に推した未来の、当然淋^{さむ}しかるべき事も彼にはよく解
つていた。

兄はこの間の相談通り島田の要求を断つた旨を健三に話した。

しかしどんな手続きでそれを断ったのか、また先方がそれに対してどんな挨拶あいさつをしたのか、そういう細かい点になると、全く要領を得た返事をしなかった。

「何しろ比田ひだからそういつて来たんだから慥たしかだろう」

その比田が島田に会いに行つて話を付けたとも、または手紙で会見の始末を知らせて遣やつたとも、健三には判明わからなかった。

「多分行つたんだろうと思うがね。それともあの人の事だから、手紙だけで済ましてしまったのか。其所そこはつい聴いて来るのを忘れたよ。尤ももつとあの後一返姉ごぺんさんの見舞かたが行つた時にや、比田が相変らず留守だったので、つい会う事が出来なかったのさ。しかしその時姉さんの話じゃ、何でも忙がしいんで、まだそのま

まにしてあるようだっていつてたがね。あの男も随分無責任だから、ことによると行かないのかも知れないよ」

健三の知っている比田も無責任の男に相違なかった。その代り頼むと何でも引き受ける性質たちであつた。ただ他ひとから頭を下げて頼まれるのが嬉うれしくつて物を受合いたがる彼は、頼み方が気に入らないと容易に動かなかつた。

「しかしこんだの事なんざあ、島田がじかに比田の所へ持ち込んだんだからねえ」

兄は暗あんに比田自身が先方へ出向いて話し合を付けなければ義理の悪いような事をいった。そのくせ彼はこんな場合に決して自分かけあいごとで懸合事などに出掛ける人ではなかつた。少し氣を遣つかわなけれ

ばならない面倒が起ると必ず顔を背けた。そうして事情の許す限り凝^{じつ}と辛^{しん}防^{ぼう}して独り苦しんだ。健三にはこの矛盾が腹立たしくも可笑^{おか}しくもない代りに何となく気の毒に見えた。

「自分も兄弟だから他^{ひと}から見たらどこか似ているのかも知れない」
こう思うと、兄を気の毒がるのは、つまり自分を気の毒がると同じ事にもなった。

「姉さんはもう好^いいんですか」

問題を変えた彼は、姉の病氣について経過を訊^{たず}ねた。

「ああ。どうも喘^{ぜん}息^{そく}つてもものは不思議だねえ。あんなに苦しんでいても直^{じき}癒^なるんだから」

「もう話が出来ますか」

「出来るどころか、なかなか能く喋舌しゃべってね。例の調子で。――
姉さんの考じや、島田は御縫おぬいさんの所へ行つて、智慧ちえを付けられ
て来たんだらうっていうんだがね」

「まさか。それよりあの男だからあんな非常識な事をいつて来る
のだと解釈する方が適当でしょう」

「そう」

兄は考えていた。健三は馬鹿らしいという顔付をした。

「でなければね。きつと年を取つて皆なから邪魔にされるんだら
うって」

健三はまだ黙っていた。

「何しろ淋さむしいには違ないんだね。それもあいつの事だから、人

情で淋しいんじゃない、慾よくで淋しいんだ」

兄はお縫さんの所から毎月彼女の母の方へ手宛てあてが届く事をどうしてか知っていた。

「何でも金きんしくんしょう鵒勲章の年金か何かを御藤おふじさんが貰もらってるんだとさ。だから島田もどこからか貰わなくっちゃ淋しくって堪らなくなつたんだろうよ。何なんしろあの位慾張よくばってるんだから」

健三は慾で淋しがってる人に対して大した同情も起し得なかつた。

事件のない日がまた少し続いた。事件のない日は、彼に取って沈黙の日に過ぎなかった。

彼はその間に時々己れの追憶を辿るべく余儀なくされた。自分の兄を気の毒がりつつも、彼は何時の間にか、その兄と同じく過去の人となった。

彼は自分の生命を両断しようと試みた。すると綺麗に切り棄てられべきはずの過去が、かえって自分を追掛けて来た。彼の眼は行手を望んだ。しかし彼の足は後へ歩きがちであつた。

そうしてその行き詰りには、大きな四角な家が建っていた。家には幅の広い階子段のついた二階があつた。その二階の上も下も、健三の眼には同じように見えた。廊下で囲まれた中庭もまた

眞まっしかく四角であつた。

不思議な事に、その広い宅うちには人が誰も住んでいなかった。それを淋さみしいとも思わずにいられるほどの幼ない彼には、まだ家というものの経験と理解が欠けていた。

彼はいくつとなく続いている部屋だの、遠くまで眞直まっすぐに見える廊下だのを、あたかも天井の付いた町のように考えた。そうして人の通らない往来を一人で歩く気でそこいら中馳かけ廻つた。

彼は時々表おもてにかい二階あがへ上つて、細い格子こうしの間から下を見下した。

鈴を鳴らしたり、腹掛はらがけを掛けたりした馬が何匹も続いて彼の眼

の前を過ぎた。路みちを隔てた真まん向うには大きな唐金からかねの仏様があつた。その仏様は胡坐あぐらをかいて蓮台れんだいの上に坐すわっていた。太い錫し

やくじよう

杖を担いでいた、それから頭に笠を被っていた。

健三は時々薄暗い土間へ下りて、其所からすぐ向側の石段

を下りるために、馬の通る往来を横切った。彼はこうしてよく仏様へ攀じ上った。着物の襷へ足を掛けたり、錫杖の柄へ捉まったりして、後から肩に手が届くか、または笠に自分の頭が触れると、その先はもうどうする事も出来ずにまた下りて来た。

彼はまたこの四角な家と唐金の仏様の近所にある赤い門の家を覚えていた。赤い門の家は狭い往来から細い小路を二十間も折れ曲つて這入った突き当りにあった。その奥は一面の高藪で蔽われていた。

この狭い往来を突き当って左へ曲ると長い下り坂があった。健

三の記憶の中に出てくるその坂は、不規則な石段で下から上まで
畳み上げられていた。古くなつて石の位置が動いたためか、段の
方々には凸凹でこぼこがあつた。石と石の罅隙すきまからは青草が風に靡なびいた。
それでも其所は人の通行する路に違なかつた。彼は草履穿ぞうりばきのま
まで、何度かその高い石段を上のぼつたり下さがつたりした。

坂を下り尽すとまた坂があつて、小高い行手に杉の木立こたちが蒼あおぐ
黒く見えた。丁度その坂と坂の間の、谷くぼちになつた窪地くぼちの左側に、
また一軒の萱葺かやぶきがあつた。家は表から引込ひっこんでいる上に、少し
右側の方へ片寄かまへこしらっていたが、往来に面した一部分には掛茶屋かけぢややの
ような雑な構かまへこしらが拵こしらえられて、常には二、三脚の床しょうぎ几ていさえ体よく
据えてあつた。

葭簀よしずの隙すきから覗のぞくと、奥には石で囲んだ池が見えた。その池の

上には藤棚が釣つつてあつた。水の上に差し出された両端りようはじを支

える二本の棚たなばしら柱はしらは池の中に埋まつていた。周囲まわりには躑躅つづじが多

かつた。中には緋鯉ひぎいの影があちこちと動いた。濁つた水の底を幻ま

ぼろし

影のように赤くするその魚うおを健三は是非捕りたいと思つた。

或日彼は誰も宅にいない時を見計みはからつて、不細工な布袋竹ほていちくの

先へ一枚糸を着けて、餌えさと共に池の中に投げ込んだら、すぐ糸を

引く気味の悪いものに脅かされた。彼を水の底に引つ張り込まな

ければやまないその強い力が二の腕まで伝つた時、彼は恐ろしく

なつて、すぐ竿さおを放り出した。そうして翌日あくるひ静かに水面に浮い

ている一尺余しやくりの緋鯉を見出した。彼は独り怖がつた。……

「自分はその時分誰と共に住んでいたのだろうか」

彼には何らの記憶もなかった。彼の頭はまるで白紙のようなものであった。けれども理解力の索引に訴えて考えれば、どうしても島田夫婦と共に暮したといわなければならなかった。

三十九

それから舞台が急に変わった。淋^{さみ}しい田舎^{いなか}が突然彼の記憶から消えた。

すると表に櫺^{れん}子^{じまど}窓の付いた小さな宅^{うち}が朧^{おぼろげ}気に彼の前にあらわれた。門のないその宅は裏通りらしい町の中にあつた。町は細

長かった。そうして右にも左にも折れ曲つていた。

彼の記憶がぼんやりしているように、彼の家も始終薄暗かった。

彼は日光とその家とを連想する事が出来なかつた。

彼は其所で^{そこ}庖瘡^{ほうそう}をした。大きくなつて聞くと、種痘が元で、

ほんほうそう

本庖瘡を誘い出したのだとかいう話であつた。彼は暗い櫺子の

うちで^{ころ}転げ廻つた。惣身^{そうしん}の肉を所嫌わず搔^かき撈^{むし}つて泣き叫んだ。

彼はまた偶然広い建物の中に幼い自分を見出した。区切られて

いるように続いている仕切のうちには人がちらほらいた。空いた

場所の畳^{うすべり}だか薄縁^{うすべり}だが、黄色く光つて、あたりを伽藍堂^{がらんどう}の

如く^{さび}淋しく見せた。彼は高い所にいた。其所で弁当を食つた。そ

うして油揚^{あぶらあげ}の胴^{かみ}を干瓢^{かんぴょう}で結^いえた稲荷^{いなり}鮓^{ずし}の恰好^{かつこう}に似たもの

を、上から下へ落した。彼は勾欄てすりにつらまって何度も下を覗のぞいて見た。しかし誰もそれを取ってくれるものはなかった。伴つれの大人はみんな正面に気を取られていた。正面ではぐらぐらと柱が揺れて大きな宅が潰つぶれた。するとその潰れた屋根の間から、髭ひげを生やした軍人いくさにんが威張いばつて出て来た。——その頃の健三はまだ芝居というものの観念を有もつていなかったのである。

彼の頭にはこの芝居と外それ鷹たかとが何の意味なしに結び付けられていた。突然鷹が向うに見える青い竹たけやぶ藪くさの方へ筋すじ違かいに飛んで行つた時、誰だか彼の傍そばにいるものが、「外それた外それた」と叫こけんだ。すると誰だかまた手を叩たたいてその鷹を呼び返そうとした。——健三の記憶は此所ここでぷつりと切れていた。芝居と鷹とどっち

を先に見たのか、それさえ彼には不分明ふぶんみようであつた。従つて彼が田圃たんぼや藪やぶばかり見える田舎に住んでいたのと、狭苦しい町内の往来に向いた薄暗い宅に住んでいたのと、どっちが先になるのか、それも彼にはよく判明わからなかつた。そうしてその時代の彼の記憶には、殆んど人というものの影が働はたらいていなかった。

しかし島田夫婦が彼の父母として明瞭めいりように彼の意識に上つたのは、それから間もない後の事であつた。

その時夫婦は変な宅にいた。門かどぐち口から右へ折れると、他の堀ひとへ際いぎわ伝いに石段を三つほど上らなければならなかつた。そこから幅三尺ばかりの露地ろじで、抜けると広くて賑にぎやかな通りへ出た。

左は廊下を曲つて、今度は反対に二、三段下りる順になつていた。

すると其所に長方形の広間があつた。広間に沿うた土間^{どま}も長方形であつた。土間から表へ出ると、大きな河が見えた。その上を白^し帆^{らほ}を懸けた船が何艘^{なんぞう}となく往^いつたり来^きたりした。河岸^{かし}には柵^{さく}を結^いつた中へ薪^{まき}が一杯積んであつた。柵と柵の間にある空地^{あきち}は、だらだら下^{さが}りに水際まで続いた。石垣の隙間からは弁慶蟹^{べんけいがに}がよく鉈^{はさみ}を出した。

島田の家はこの細長い屋敷を三つに区切つたものの真中にあつた。もとは大きな町人の所有で、河岸に面した長方形の広間がその店になつていたらしく思われるけれども、その持主の何者であつたか、またどうして彼が其所を立ち退^のいたものか、それらは凡^{すべ}て健三の知識の外^{ほか}に横^{よこ}わる秘密であつた。

一頃その広い部屋をある西洋人が借りて英語を教えた事があつた。まだ西洋人を異人という昔の時代だったので、島田の妻さいの御お常つねは、化物ばけものと同居でもしているように気味を悪がった。尤もこの西洋人は上靴スリッパを穿はいて、島田の借りている部屋の縁側までそのそ歩いてくる癖を有もっていた。御常しやくが癩しやくの気味だとかいつて蒼い顔あおをして寐ねていると、其所の縁側へ立つて座敷を覗き込みながら、見舞を述べたりした。その見舞の言葉は日本語か、英語か、またはただ手真似だけか、健三にはまるで解っていないかった。

四十

西洋人は何時の間にか去つてしまつた。小さい健三がふと心付いて見ると、その広い室へやは既にあつかいじよ扱所あつかいじよというものに変つていた。扱所あつかいじよというのは今の区役所のようなものらしかった。みんなが低い机を一列に並べて事務を執つていた。テーブルや椅子いすが今日こんにちのようちに広く用いられない時分の事だったので、畳の上に長く坐すわるのが、それほどの不便でもなかったのだろう、呼び出されるものも、また自分から遣やつて来るものも、悉く自分の下駄げたを土間まへ脱ぎ捨てて掛り掛りの机の前へ畏かしこまつた。

島田はこの扱所あつかいじよの頭かしらであつた。従つて彼の席は入口からずっと遠い一番奥の突つき当あたりに設けられた。其所そこから直角に折れ曲つて、河の見える櫺子れんじまど窓の際までに、人の数が何人いたか、机の数が

幾脚あつたか、健三の記憶は慥かにそれを彼に語り得なかつた。

島田の住居すまいと扱所とは、もとより細長い一つ家いえを仕切つたまでの事なので、彼は出勤しっきんといわず退出たいしつといわず、少なからぬ便宜もを有つていた。彼には天氣の好い時でも土を踏む面倒がなかつた。雨の降る日には傘を差す臆おっくう劫おっくうを省く事が出来た。彼は自宅から縁側伝いで勤めに出た。そうして同じ縁側を歩いて宅うちへ歸つた。

こういう関係が、小さい健三を少なからず大胆にした。彼は時々公けの場所へ顔を出して、みんなから相手にされた。彼は好い氣になつて、書記の硯すずりばこ箱の中にある朱墨しゅすみを弄いじつたり、小刀さやの鞘さやを払つて見たり、他ひとに蒼蠅うるさがられるような悪戯いたずらを続けざま

にした。島田はまた出来る限りの専横をもつて、この小暴君の態度を是認した。

島田は吝りんしよく嗇さくな男であつた。妻さいの御常は島田よりもなお吝嗇であつた。

「爪つめに火を点ともすつてえのは、あの事だね」

彼が実家に帰つてから後のち、こんな評が時々彼の耳に入いつた。しかし当時の彼は、御常が長火鉢ながひばちの傍そばへ坐まつて、下女げじよに味噌汁おつけをよそつて遣るのを何の気もなく眺めていた。

「それじゃ何ぼ何でも下女が可哀かわいそうだ」

彼の実家のものは苦笑した。

御常はまた飯櫃おはちや御菜おかずの這入はいっている戸棚に、いつでも錠錠を卸お

ろした。たまに実家の父が訪ねて来ると、きつと蕎麦そばを取り寄せ
て食わせた。その時は彼女も健三も同じものを食った。その代り
飯時が来ても決して何時ものように膳ぜんを出さなかった。それを当
然のように思っていた健三は、実家へ引き取られてから、間食の
上に三度の食事が重なるのを見て、大いに驚ろいた。

しかし健三に対する夫婦は金の点に掛けてむしろ不思議な位寛
大であつた。外へ出る時は黄八丈きはちしようの羽織はおりを着せたり、縮緬ちりめんの
着物を買うために、わざわざ越後屋えちごやまで引つ張つて行つたりした。
その越後屋の店へ腰を掛けて、柄を扨より分けている間に、夕暮の
時間が逼せまつたので、大勢の小僧が広い間口の雨戸を、両側から一
度に締め出した時、彼は急に恐ろしくなつて、大きな声を揚げて

泣き出した事もあつた。

彼の望む玩具おもちゃは無論彼の自由になつた。その中には写し絵の

道具も交まじつていた。彼はよく紙を継ぎ合わせた幕の上に、三番さんばそ

叟うの影を映して、烏帽子姿えぼしに鈴を振らせたり足を動かさせたり

して喜こんだ。彼は新らしい独楽こまを買つてもらつて、時代を着け

るために、それを河岸際かしぎわの泥溝どぶの中に浸けた。ところがその泥溝

は薪積場まきつみばの柵さくと柵との間から流れ出して河へ落ち込むので、彼

は独楽の失くなるのが心配さに、日に何遍となく扱所の土間を抜

けて行つて、何遍となくそれを取り出して見た。そのたびに彼は

石垣の間へ逃げ込む蟹かにの穴を棒で突ツついた。それから逃げ損な

つたものの甲を抑えて、いくつも生捕いけどりにして袂たもとへ入れた。……

要するに彼はこの吝嗇な島田夫婦に、よそから貰^{もら}い受けた一人っ子として、異数の取扱いを受けていたのである。

四十一

しかし夫婦の心の奥には健三に対する一種の不安が常に潜^{ひそ}んでいた。

彼らが長火鉢^{ながひばち}の前で差向^{すわ}いに坐り合う夜寒^{よさむ}の宵などには、健三によくこんな質問を掛けた。

「御前の御父^{おとつ}ツさんは誰だい」

健三は島田の方を向いて彼を指^{ゆびさ}した。

「じゃ御前の御母おつかさんは」

健三はまた御常の顔を見て彼女を指さした。

これで自分たちの要求を一応満足させると、今度は同じような事を外の形で訊きいた。

「じゃ御前の本当の御父さんと御母さんは」

健三は厭いやいや々ながら同じ答を繰り返すより外に仕方がなかった。

しかしそれが何故なぜだか彼らを喜ばした。彼らは顔を見合せて笑った。

或時はこんな光景が殆んど毎日のように三人の間に起った。或時は単にこれだけの問答では済まなかつた。ことに御常は執濃しつこかつた。

「御前はどこで生れたの」

こう聞かれるたびに健三は、彼の記憶のうちに見える赤い門――

――高敷たかやぶで蔽おほわれた小さな赤い門うちの家を挙げて答えなければなら

なかった。御常は何時この質問を掛けても、健三が差さ支しかえなく

同じ返事の出来るように、彼を仕込んだのである。彼の返事は無

論器械的であつた。けれども彼女はそんな事には一向頓とん着じゃくし

なかった。

「健坊けんぼう、御前本当は誰の子なの、隠さずにそう御いい」

彼は苦しめられるような心持がした。時には苦しいより腹が立
 った。向うの聞きたがる返事を与えずに、わざと黙っていたくな
 った。

「御前誰が一番好きだい。御父ッさん？　御母さん？」

健三は彼女の意を迎えるために、向うの望むような返事をするのが厭で堪らなかつた。彼は無言のまま棒のように立ッていた。それをただ年齒としはの行かないためとのみ解釈した御常の觀察は、むしろ簡単に過ぎた。彼は心のうちで彼女のこうした態度を忌み悪にくんだのである。

夫婦は全力を尽して健三を彼らの専有物にしようと力つとめた。また事実上健三は彼らの専有物に相違なかつた。従つて彼らから大事にされるのは、つまり彼らのために彼の自由を奪われるのと同じ結果に陥つた。彼には既に身体からだの束縛があつた。しかしそれよりもなお恐ろしい心の束縛が、何も解らない彼の胸に、ぼんやり

した不満足の影を投げた。

夫婦は何かにつけて彼らの恩恵を健三に意識させようとした。それで或時は「御父ツさんが」という声を大きくした。或時はまた「御母さんが」という言葉に力を入れた。御父ツさんと御母さんを離れたただの菓子を食べたり、ただの着物を着たりする事は、自然健三には禁じられていた。

自分たちの親切を、無理にも子供の胸に外部から叩き込^{たた}もうとする彼らの努力は、かえって反対の結果をその子供の上に引き起した。健三は蒼蠅^{うるさ}がった。

「なんでそんなに世話を焼くのだろう」

「御父ツさんが」とか「御母さんが」とかが出るたびに、健三は

己^{おの}れ独りの自由を欲しがった。自分の買ってもらう玩具^{おもちゃ}を喜んだり、錦^{にしき}絵を飽かず眺めたりする彼は、かえってそれらを買ってくれる人を嬉^{うれ}しがらなくなった。少なくとも両^{ふた}つのものを綺麗^{きれ}いに切り離して、純粹な楽みに耽^{ふけ}りたかった。

夫婦は健三を可^か愛^{あい}がっていた。けれどもその愛情のうちには変な報酬が予期されていた。金の力で美くしい女を囲っている人が、その女の好きなものを、いうがままに買ってくれるのと同じように、彼らは自分たちの愛情そのものの発現を目的として行動する事が出来ずに、ただ健三の歡心^うを得るために親切を見せなければならなかった。そうして彼らは自然のために彼らの不純を罰せられた。しかも自^{みづ}から知らなかった。

四十二

同時に健三の氣質も損われた。順良な彼の天性は次第に表面から落ち込んで行つた。そうしてその陥欠を補うものは強情の二字に外ならなかつた。

彼の我^{わがまま}儘には日増^{ひまし}に募つた。自分の好きなものが手に入らないと、往來でも道端でも構わずに、すぐ其所^{そこ}へ坐^{すわ}り込んで動かなかつた。ある時は小僧の脊中^{せなか}から彼の髪の毛を力に任せて撈^{むし}り取つた。ある時は神社に放し飼^{はと}の鳩をどうしても宅^{うち}へ持つて歸るのだと主張してやまなかつた。養父母の寵^{ちよう}を欲しいままに専有^うし得

る狭い世界の中に起きたり寐^ねたりする事より外に何にも知らない彼には、凡^{すべ}ての他人が、ただ自分の命令を聞くために生きているように見えた。彼はいえば通るとばかり考えるようになった。

やがて彼の横着はもう一步深入りをした。

ある朝彼は親に起こされて、眠い眼を擦^{こす}りながら縁側^{えんがわ}へ出た。彼は毎朝寐起に其所から小便をする癖を有^もっていた。ところがその日は何時もより眠かったので、彼は用を足しながらつい途中で寐てしまった。そうしてその後^{あと}を知らなかった。

眼が覚めて見ると、彼は小便の上に転げ落ちていた。不幸にして彼の落ちた縁側は高かった。大通りから河岸^{かし}の方へ滑り込んでいる地面の中途に当るので、普通の倍ほどあった。彼はその出来

事のためにとうとう腰を抜かした。

驚ろいた養父母はすぐ彼を千住せんじゆの名倉なぐらへ伴つれて行つて出来るだけの治療を加えた。しかし強く痛められた腰は容易に立たなかつた。彼は醋すの臭のする黄色いどろどろしたものを毎日局部に塗つて座敷に寐ふていた。それが幾日いくか続いたか彼は知らなかつた。

「まだ立てないかい。立つて御覧」

御常は毎日のように催促した。しかし健三は動けなかつた。動けるようになってもわざと動かなかつた。彼は寐ながら御常のやきもきする顔を見てひそかに喜こんだ。

彼はしまいに立つた。そうして平生へいぜいと何の異なる所なく其所いら中歩き廻つた。すると御常の驚ろいて嬉うれしがりようが、如何いか

にも芝居じみた表情に充ちていたので、彼はいつそ立たずにもう少し寐ていればよかったという氣になった。

彼の弱点が御常の弱点とまともに相搏あいうつ事も少なくはなかった。

御常は非常に嘘うそを吐く事の巧うまい女であつた。それからどんな場

合でも、自分に利益があるときえ見れば、すぐ涙を流す事の出来る重宝な女であつた。健三をほんの小供だと思つて氣を許していた彼女は、その裏面をすっかり彼に曝露ばくろして自みづから知らなかつた。

或日一人の客と相對して坐つていた御常は、その席で話題に上のぼつた甲という女を、傍はたで聴きいていても聴きづらいほど罵ののつた、と

ころがその客が歸つたあとで、甲がまた偶然彼女を訪ねて來た。すると御常は甲に向つて、そらぞらしい御世辭を使い始めた。遂

に、今誰さんとあなたの事を大變賞めていた所だというような必要な嘘まで吐いた。健三は腹を立てた。

「あんな嘘を吐いてらあ」

彼は一徹な小供の正直をそのまま甲の前に披瀝した。甲の帰ったあとで御常は大變に怒った。

「御前と一所にいと顔から火の出るような思をしなくつちやならない」

健三は御常の顔から早く火が出れば好い位に感じた。

彼の胸の底には彼女を忌み嫌う心が我知らず常にどこかに働らいていた。いくら御常から可愛がられても、それに酬いるだけの情合がこつちに出て来得ないような醜いものを、彼女は彼女

の人格の中に蔵うちかくしていたのである。そうしてその醜みにくいものを一番能よく知っていたのは、彼女の懷に温められて育った駄だ々だツ子こに外ならなかったのである。

四十三

その中うち変な現象が島田と御常との間に起った。

ある晩健三がふと眼を覚まして見ると、夫婦は彼の傍そばではげしく罵ののり合っていた。出来事は彼に取って突然であつた。彼は泣き出した。

その翌晩も彼は同じ争いの声で熟睡を破られた。彼はまた泣い

た。

こうした騒がしい夜が幾つとなく重なって行くに連れて、二人の罵る声は次第に高まって来た。しまいには双方とも手を出し始めた。打つ音、踏む音、叫ぶ音が、小さな彼の心を恐ろしがらせた。最初彼が泣き出すとやんだ二人の喧嘩けんかが、今では寐ねようが覚めようが、彼に用捨なく進行するようになった。

幼稚な健三の頭では何のために、ついで見馴みなれないこの光景が、毎夜深更に起るのか、まるで解釈出来なかった。彼はただそれを嫌った。道徳も理非も持たない彼に、自然はただそれを嫌うように教えたのである。

やがて御常は健三に事実を話して聞かせた。その話によると、

彼女は世の中で一番の善人であつた。これに反して島田は大変な悪ものであつた。しかし最も悪いのは御藤さんおふじであつた。「あいつが」とか「あの女が」とかいう言葉を使うとき、御常は口惜しくつて堪まらないという顔付をした。眼から涙を流した。しかしそうした劇烈な表情はかえつて健三の心持を悪くするだけで、外に何の効果もなかつた。

「あいつは讐かたきだよ。御母さんおつかにも御前にも讐だよ。骨を粉こにしても仇かたきうち討うをしなくつちや」

御常は齒をぎりぎり噛かんだ。健三は早く彼女の傍を離れたくなつた。

彼は始終自分の傍にいて、朝から晩まで彼を味方にしたがる御

常よりも、むしろ島田の方を好いた。その島田は以前と違って、大抵は宅うちにいない事が多かった。彼の帰る時刻は何時も夜更よふけらしかつた。従つて日中は滅多に顔を合せる機会がなかつた。

しかし健三は每晚暗い灯ともしび火の影で彼を見た。その険悪な眼と怒いかりに顫ふるえる唇とを見た。咽喉のどから渦捲うずまく烟けむりのように洩もれて出るその憤りの声を聞いた。

それでも彼は時々健三を伴つれて以前の通り外へ出る事があつた。彼は一口も酒を飲まない代りに大変甘いものを嗜たしなんだ。ある晩彼は健三と御藤おぬいさんの娘の御縫おぬいさんとを伴つれて、賑にぎやかな通りを散歩した帰りに汁粉屋しるこやへ寄つた。健三の御縫おぬいさんに会つたのはこの時が始めてであつた。それで彼らは碌ろくに顔さえ見合せなかつた。口

はまるで利かなかった。

宅へ帰った時、健三は御常から、まず島田にどこへ伴れて行かれたかを訊きかれた。それから御藤さんの宅へ寄りはいないかと念を押された。最後に汁粉屋へは誰と一所に行つたという詰問を受けた。健三は島田の注意にかかわらず、事実をありのままに告げた。しかし御常の疑いはそれでもなかなか解けなかった。彼女はいろいろな鎌かまを掛けて、それ以上の事実を釣り出そうとした。

「あいつも一所なんだろう。本当を御いい。いえば御母おつかさんが好いものを上げるから御いい。あの女も行つたんだろう。そうだろう」

彼女はどうしても行つたといわせようとした。同時に健三はど

うしてもいうまいと決心した。彼女は健三を疑^{うたぐ}った。健三は彼女を卑しんだ。

「じやあの子に御父^{おとつ}ツさんが何といったい。あの子の方に余計口を利くかい、御前の方にかい」

何の答もしなかった健三の心には、ただ不愉快の念のみ募った。しかし御常は其所^{そこ}で留まる女ではなかった。

「汁粉屋で御前をどっちへ坐らせた^{しつと}い。右の方かい、左の方かい」嫉妬^{しつと}から出る質問は何時まで経つても尽きなかった。その質問のうちに自分の人格を会釈なく露^{あら}わして顧り見ない彼女は、十^{とお}にも足りないわが養い子から、愛想^{あいそ}を尽かされて毫^{ごう}も気が付かずにいた。

四十四

間もなく島田は健三の眼から突然消えて失くなった。河岸かしを向いた裏通りと賑にぎやかな表通りとの間に挟すままっていた今までの住居すまいも急にどこへか行いってしまつた。御常とたつた二人ぎりになつた健三は、見馴みなれない変な宅うちの中に自分を見出み出した。

その家の表には門かどぐち口に縄なわのれん暖簾れんを下さげた米屋みだか味噌屋そやだかがあつた。彼の記憶はこの大きな店と、茹うでた大豆とを彼に連想せしめた。彼は毎日それを食たつた事をいまだに忘れいずにいた。しかし自分の新らしく移うつつた住居については何の影像イメージも浮かべ得な

かった。「時」は綺麗きれいにこの佗わびしい記念かたみを彼のために払い去つてくれた。

御常は会う人ごとに島田の話をした。口惜くやしい口惜くやしいといつて泣いた。

「死んで崇たたつてやる」

彼女の権幕は健三の心をますます彼女から遠ざける媒なかだち介となるに過ぎなかった。

夫と離れた彼女は健三を自分一人の専有物にしようとした。また専有物だと信じていた。

「これから御前一人が依怙たよりだよ。好いかい。確しつかりしてくれなくつちやいけないよ」

こう頼まれるたびに健三はいい渋った。彼はどうしても素直な子供のようには心持の好い返事を彼女に与える事が出来なかった。

健三を物にしようという御常の腹の中には愛に駆られる衝動よりも、むしろ慾よくに押し出される邪氣が常に働いていた。それが頑が isn't 健三の胸に、何の理窟なしに、不愉快な影を投げた。しかしその他の点たについて彼は全くの無我夢中であつた。

二人の生活は僅わずかの間ましか続かなかつた。物質的の欠乏が原因になったのか、または御常の再縁が現状の変化を余儀なくしたのか、年齒としの行かない彼にはまるで解らなかつた。何しろ彼女はまた突然健三の眼から消えて失くなった。そうして彼は何時の間に彼の実家へ引き取られていた。

「考えるとまるで他の身の上のようだ。自分の事とは思えない」
健三の記憶に上のせた事相は余りに今の彼と懸隔へつしていた。それでも彼は他人の生活に似た自分の昔を思い浮べなければならなかった。しかも或る不快な意味において思い浮べなければならなかった。

「御常さんて人はその時にあの波多野はたのとかいう宅うちへまた御嫁に行つたんでしょうか」

細君は何年前か夫の所へ御常から来た長い手紙の上書うわがきをまだ覚えていた。

「そうだろうよ。己おれも能く知らないが」

「その波多野という人は大方まだ生きてるんでしょうね」

健三は波多野の顔さえ見た事がなかった。生死しやうしなどは無論考
えの中になかった。

「警部だつていうじやありませんか」

「何んだか知らないね」

「あら、貴夫あなたが自分でそう御仰おつしやつたくせに」

「何時いつ」

「あの手紙を私わたくしに御見せになつた時よ」

「そうかしら」

健三は長い手紙の内容を少し思い出した。その中には彼女が幼
い健三の世話をした時の辛苦ばかりが並べ立ててあつた。乳がな
いので最初からおじやだけで育てた事だの、下性げしやうが悪くつて寐ね

小便しょうべんの始末に困った事だの、凡すべてそうした顛末てんまつを、飽きるほど委くわしく述べた中に、甲府こうふとかにいる親類の裁判官が、月々彼女に金を送ってくれるので、今では大變仕合しあわせだと書いてあつた。しかし肝心の彼女の夫が警部であつたかどうか、其所そこになると健三には全く覺がなかつた。

「ことによると、もう死んだかも知れないね」

「生きているかも分りませんわ」

二人の間には波多野の事ともつかず、また御常の事ともつかず、こんな問答が取り換かわされた。

「あの人が不意に遣やつて来たように、その女の人も、何時突然訪ねて来ないとも限らないわね」

細君は健三の顔を見た。健三は腕組をしたなり黙っていた。

四十五

健三も細君も御常の書いた手紙の傾向をよく覚えていた。彼女とはさして縁故のない人ですら、親切に毎月いくらかずつの送金をしてくれるのに、小さい時分あれほど世話になつて置きながら、今更知らん顔をしていられた義理でもあるまいといった風の筆意が、一頁ごとに見透かされた。

その時彼はこの手紙を東京にいる兄の許に送つた。勤先へこんなものを度々寄こされては迷惑するから、少し気を付けるように

先方へ注意してくれと頼んだ。兄からはすぐ返事が来た。もともと養家先を離縁になって、他家へ嫁に行つた以上は他人である、その上健三はその養家さえ既に出てしまつた後なのだから、今になつて直接本人へ文通などされては困るという理由を持ち出して、先方を承知させたから安心しろと、その返事には書いてあつた。御常の手紙はその後^ごふつつり来なくなつた。健三は安心した。

しかしどこかに心持の悪い所があつた。彼は御常の世話を受けた昔を忘れる訳に行かなかつた。同時に彼女を忌み嫌う念は昔の通り変らなかつた。要するに彼の御常に対する態度は、彼の島田に対する態度と同じ事であつた。そうして島田に対するよりも一層嫌悪の念が劇^{はげ}しかつた。

「島田一人でもう沢山なところへ、また新らしくそんな女が遣^やつて来られちゃ困るな」

健三は腹の中でこう思った。夫の過去について、それほど知識のない細君の腹の中はなおの事であった。細君の同情は今その生家の方にばかり注がれていた。もとかなりの地位にあつた彼女の父は、久しく浪人生活を続けた結果、漸^{だんだん}々々経済上の苦境に陥いつて来たのである。

健三は時々宅^{うち}へ話しに来る青年と対坐^{たいざ}して、晴々しい彼らの様子と自分の内面生活とを対照し始めるようになった。すると彼の眼に映^{うつ}ずる青年は、みんな前ばかり見詰めて、愉快に先へ先へと歩いて行くように見えた。

或日彼はその青年の一人に向つてこういつた。

「君らは幸福だ。卒業したら何になろうとか、何をしようとか、そんな事ばかり考えているんだから」

青年は苦笑した。そうして答えた。

「それは貴方^{あなた}がた時代の事でしょう。今の青年はそれほど呑気^{のんき}でもありません。何^{なん}になろうとか、何^{なに}をしようとか思わない事は無論ないでしょうけれども、世の中が、そう自分の思い通りにならない事もまた能^よく承知していますから」

なるほど彼の卒業した時代に比べると、世間は十倍も世知辛^{せちがら}くなつていた。しかしそれは衣食住に関する物質的問題に過ぎなかった。従つて青年の答には彼の思わくと多少喰^くい違つた点があ

った。

「いや君らは僕のように過去に煩らわされないから仕合せだというのさ」

青年は解しがたいという顔をした。

「あなただつて些^{ちつ}とも過去に煩らわされているようには見えませんよ。やっぱり己^{おれ}の世界はこれからだという所があるようですね」

今度は健三の方が苦笑する番になった。彼はその青年に仏蘭西^{フランス}のある学者が唱え出した記憶に関する新説を話した。

人が溺^{おぼ}れかかったり、または絶壁から落^{おち}ようとする間際に、よく自分の過去全体を一瞬間の記憶として、その頭に描き出す事があるという事実には、この哲学者は一種の解釈を下したのである。

「人間は平生^{へいぜい}彼らの未来ばかり望んで生きているのに、その未来が咄嗟^{とつさ}に起つたある危険のために突然塞^{ふさ}がれて、もう己は駄目だと事が極^{きま}ると、急に眼を転じて過去を振り向くから、そこで凡^{すべ}ての過去の経験が一度に意識に上^{のぼ}るのだというんだね。その説によると」

青年は健三の紹介を面白そうに聴いた。けれども事状を一向知らない彼は、それを健三の身の上に引き直して見る事が出来なかった。健三も一刹那^{いつせつな}にわが全部の過去を思い出すような危険な境遇に置かれたものとして今の自分を考えるほどの馬鹿でもなかった。

四十六

健三の心を不愉快な過去に捲き込む端緒いとくちになった島田は、それから五、六日ほどして、ついにまた彼の座敷にあらわれた。

その時健三の眼に映じたこの老人は正しく過去の幽霊であつた。また現在の人間でもあつた。それから薄暗い未来の影にも相違なかつた。

「どこまでこの影が己おれの身体からだに付いて回るだろう」

健三の胸は好奇心の刺戟しげきに促されるよりもむしろ不安の漣漪さざなみに揺れた。

「この間比田ひだの所をちよつと訪ねて見ました」

島田の言葉遣はこの前と同じように鄭^{てい}重^{ちゆう}であつた。しかし

彼が何で比田の家へ足を運んだのか、その点になると、彼は全く知らん顔をして澄ましていた。彼の口ぶりはまるで無沙汰^{ぶさた}見舞かたがたそつちへ用のあつたついでに立ち寄つた人の如くであつた。「あの辺^{へん}も昔と違つて大分^{だいぶん}変りましたね」

健三は自分の前に坐^{すわ}っている人の真面目^{まじめ}さの程度を疑^{うたぐ}つた。果してこの男が彼の復籍を比田まで頼み込んだのだろうか、また比田が自分たちと相談の結果通り、断然それを拒絶したのだろうか、健三はその明白な事実さえ疑わずにはいられなかつた。

「もとはそら彼^{あそこ}処^{たき}に瀑があつて、みんな夏になると能^よく出掛けたものですがね」

島田は相手に頼とんじやく着やくなくただ世間話を進めて行つた。健三の

方では無論自分から進んで不愉快な問題に触れる必要を認めないので、ただ老人の迹あとに跟ついて引つ張られて行くだけであつた。すると何時の間にか島田の言葉遣が崩れて来た。しまいに彼は健三の姉を呼び捨すてにし始めた。

「御夏おなつも年を取つたね。尤もつとももう大分久しく会わないには違ないが。昔はあれでなかなか勝気な女で、能く私わたしに喰くつて掛かつたり何なんかしたもののさ。その代り元々兄弟同様の間柄だから、いくら喧嘩けんかをしたつて、仲の直るのもまた早いには早い。何しろ困ると助けてくれつて能く泣き付いて来るんで、私や可哀かわいそう想だからその度たんびにいくらかずつ都合して遣やつたよ」

島田のいう事は、姉が蔭で聴いていたらさぞ怒るだろうと思うように横柄おうへいであつた。それから手前勝手な立場からばかり見た歪ゆがんだ事実を他に押し付けようとする邪氣ひとに充ちていた。

健三は次第に言葉少すくなになつた。しまいには黙つたなり凝じつと島田の顔を見詰めた。

島田は妙に鼻の下の長い男であつた。その上往来などで物を見るときは必ず口を開けていた。だからちよつと馬鹿のようであつた。けれども善良な馬鹿としては決して誰の眼にも映ずる男ではなかつた。落ち込んだ彼の眼はその底で常に反対の何物かを語つていた。眉まゆはむしろ険しかった。狭くて高い彼の額のほういん上にある髪は、若い時分から左右に分けられた例ためしがなかつた。法印ほういんか何ぞ

のように常に後へ撫で付けられていた。

彼はふと健三の眼を見た。そうして相手の腹を読んだ。一旦横風うふうの昔に返った彼の言葉遣がまた何時の間にか現在の鄭寧ていねいさに立ち戻つて来た。健三に対して過去の己おのれに返ろう返ろうとする試みを遂に断念してしまった。

彼は室へやの内をきよろきよろ見廻し始めた。殺風景を極めたその室の中には生憎あいにく額も掛物も掛けていなかった。

「李鴻章りこうしょうの書は好きですか」

彼は突然こんな問を発した。健三は好きとも嫌きらいともいい兼かねた。

「好きなら上げてても好よござんす。あれでも価値ねうちにしたら今じやよっぽどするでしょう」

昔し島田は藤田東湖ふじたとうこの偽筆に時代を着けるのだといって、白はくは髪つそう蒼顔がんばん万死余云々しのようんぬんと書いた半切はんせつの唐紙とうしを、台所の竈へつついの上
 に釣るしていた事があつた。彼の健三にくれるという李鴻章も、
 どこの誰が書いたものか頗すこぶる怪しかった。島田から物を貰う氣の
 絶対になかつた健三は取り合わずにいた。島田は漸ようやく歸つた。

四十七

「何しに來たんでしよう、あの人は」

目的あてなしにただ來るはずがないという感じが細君には強くあつ
 た。健三も丁度同じ感じに多少支配されていた。

「解らないね、どうも。一体魚と獸さかなものほど違うんだから」

「何が」

「ああいう人と己おれなどとはさ」

細君は突然自分の家族と夫との關係を思い出した。両者の間には自然の造った溝があつて、御互を離隔していた。片意地な夫は決してそれを飛び超えてくれなかつた。溝をこしらえたるものの方で、それを埋めるのが当然じゃないかといった風の氣分で何時までも押し通していた。里ではまた反対に、夫が自分の勝手でこの溝を掘り始めたのだから、彼の方で其所そこを平たいにしたら好かろうという考えを有もっていた。細君の同情は無論自分の家族の方にあつた。彼女はわが夫を世の中と調和する事の出来ない偏窟な学者だと解

釈していた。同時に夫が里と調和しなくなつた原因の中に、自分が主な要素として這入っている事も認めていた。

細君は黙つて話を切り上げようとした。しかし島田の方にばかり気を取られていた健三にはその意味が通じなかつた。

「御前はそう思わないかね」

「そりやあの人と貴夫あなたとなら魚と獣位違うでしょう」

「無論外の人と己と比較していやしない」

話はまた島田の方へ戻つて来た。細君は笑いながら訊いた。

「李鴻章の掛物をどうかいつてたのね」

「己に遣やろうかかっていうんだ」

「御止およしなさいよ。そんな物を貰つてまた後からどんな無心を持

ち懸けられるかも知れないわ。遣るつていうのは、大方口の先だ
けなんでしょう。本当は買ってくれつていう気なんですよ、きつ
と」

夫婦には李鴻章の掛物よりもまだ外に買いたいものが沢山あつ
た。段々大きくなつて来る女の子に、相当の着物を着せて表へ出
す事の出来ないのも、細君からいえば、夫の気の付かない心配に
違なかつた。二円五十銭の月賦で、この間拵えたあまがつぱ雨合羽のどかの代を、
月々洋服屋に払っている夫も、あまり長閑な心持になれようはず
がなかつた。

「復籍の事は何にもいい出さなかつたようですね」

「うん何にもいわない。まるで狐きつねにつま抓つかまれたようなものだ」

始めからこつちの気を引くためにわざとそんな突飛とつぴな要求を持ち出したものか、または真面目まじめな懸合かけあいとして、それを比田ひだへ持ち込んだ後あと、比田からきっぱり断られたので、始めて駄目だめだと覺さとつたものか、健三にはまるで見当が付かなかった。

「どつちでしょう」

「到底解らないよ、ああいう人の考えは」

島田は實際どつちでも遣りかねない男であつた。

彼は三日ほどしてまた健三の玄関を開けた。その時健三は書齋に灯火あかりを点つけて机の前に坐すわっていた。丁度彼の頭に思想上のある問題が一筋の端緒いとぐちを見せかけた所であつた。彼は一瞬にそれを手近まで手繰たぐり寄せようとして骨を折つた。彼の思索は突然截たち

切られた。彼は苦い顔をして室の入口に手を突いた下女の方を顧みた。

「何もそう度々来て、他の邪魔をしなくつても好きそうなものだ」

彼は腹の中でこう呟やいた。断然面会を謝絶する勇氣を有たない彼は、下女を見たなり少時黙っていた。

「御通し申しますか」

「うん」

彼は仕方なしに答えた。それから「御奥さんは」と訊ねた。

「少し御気分が悪いと仰しやつて先刻から伏せつていらつしやいます」

細君の寐ねるときは歇私ヒステリー的里の起つた時に限るように健三には思えてならなかつた。彼は漸ようやく立ち上つた。

四十八

電氣燈のまだ戸こごとに点ともされない頃だったので、客間には例いも
の通り暗い洋燈ランプが点ついていた。

その洋燈は細長い竹の台の上に油あぶら壺つぼを簾はめ込むように拵こしらえ
たもので、鼓つづみの胴かの恰かつこう形に似た平たい底が畳へ据わるように出
来ていた。

健三が客間へ出た時、島田はそれを自分の手元に引き寄せて心しん

を出したり引つ込ましたりしながら灯火あかりの具合を眺めていた。彼は改まった挨拶あいさつもせず、「少し油煙がたまるようですね」といった。

なるほど火屋ほやが薄黒く燻くすぶっていた。丸心まるじんの切方きりかたが平に行かないところを、むやみに灯ひを高くすると、こんな変調を来すのがこの洋燈の特徴であつた。

「換えさせましょう」

家には同じ型のものが三つばかりあつた。健三は下女げじよを呼んで茶の間にあるのとり換えさせようとした。しかし島田は生返事をするぎりで、容易に煤すすで曇つた火屋から眼を離さなかつた。

「どういう加減だろう」

彼は独り言をいって、草花の模様だけを不透明に擦^すった丸い蓋^{かさ}の隙間^{のぞ}を覗き込んだ。

健三の記憶にある彼は、こんな事を能く氣にするという点において、頗^{すこぶ}る几帳面^{きちょうめん}な男に相違なかった。彼はむしろ潔癖であつた。持つて生れた倫理上の不潔癖と金銭上の不潔癖の償いにでもなるように、座敷や縁側の塵^{ちり}を氣にした。彼は尻^{しり}をからげて、拭^{ふき}掃除をした。跣足^{はだし}で庭へ出て要^いらざる所まで掃いたり水を打ったりした。

物が壊れると彼はきつと自分で修復^なした。あるいは修復^おしようとした。それがためにどの位な時間が要つても、またどんな労力が必要になつて来ても、彼は決して厭^{いと}わなかつた。そういう事が彼

の性しょうにあるばかりでなく、彼には手に握った一錢銅貨の方が、時間や労力よりも遥かに大切に見えたのである。

「なにそんなものは宅うちで出来る。金を出して頼むがものはない。損だ」

損をするという事が彼には何よりも恐ろしかった。そうして目に見えない損はいくらしても解らなかつた。

「宅うちの人はあんまり正直過ぎるんで」

御藤おふじさんは昔健三に向つて、自分の夫を評するとき、こんな言葉を使った。世の中をまだ知らない健三にもその真実でない事はよく解つていた。ただ自分の手前、嘘うそと承知しながら、夫の品性を取り繕うのだろうと善意に解釈した彼は、その時御藤さんに

向つて何にもいわなかった。しかし今考えて見ると、彼女の批評にはもう少し慥^{たしか}な根底があるらしく思えた。

「必^{ひつきよう} 竟 大きな損に氣のつかない所が正直なんだろう」

健三はただ金銭上の慾^{よく}を満たそうとして、その慾に伴なわないう程度の幼稚な頭腦を精一杯に働らかせている老人をむしろ憐れに思つた。そうして凹^{くぼ}んだ眼を今擦^すり硝子^{ガラス}の蓋の傍^{そば}へ寄せて、研究でもする時のように、暗い灯を見詰めている彼を氣の毒な人として眺めた。

「彼はこうして老いた」

島田の一生を煎^{せん}じ詰めたような一句を眼の前に味わつた健三は、自分は果してどうして老ゆるのだろうかと考えた。彼は神という

言葉が嫌きらであつた。しかしその時の彼の心にはたしかに神という言葉が出た。そうして、もしその神が神の眼で自分の一生を通して見たならば、この強ごう慾よくな老人の一生と大した変りはないかも知れないという気が強きくした。

その時島田は洋燈の螺旋ねじを急に廻したと見えて、細長い火屋の中が、赤い火で一杯になつた。それに驚ろいた彼は、また螺旋を逆に廻し過ぎたらしく、今度はただでさえ暗い灯火あかりをなおの事暗くした。

「どうもどこか調子が狂つてますね」

健三は手を敲たたいて下女に新しい洋燈を持って来さした。

四十九

その晩の島田はこの前来た時と態度の上において何の異なる所もなかった。応対にはどこまでも健三を独立した人と認めるような言葉ばかり使った。

しかし彼はもう先^{せん}達^{だつ}ての掛物についてはまるで忘れているかの如くに見えた。李^り鴻^{こう}章^{しょう}の李の字も口にしなかった。復籍の事はなお更であつた。噫^{おくび}にさえ出す様子を見せなかった。

彼はなるべくただの話をしようにとした。しかし二人に共通した興味のある問題は、どこをどう探しても落ちているはずがなかった。彼のいう事の大部分は、健三に取って全くの無意味から余り

遠く隔^{へだた}つているとも思えなかつた。

健三は退屈した。しかしその退屈のうちには一種の注意^とが徹つていた。彼はこの老人が或日或物を持つて、今より判明^{はつき}りした姿で、きつと自分の前に現れてくるに違ないという予覺に支配された。その或物がまた必ず自分に不愉快なもしくは不利益な形を具えているに違ないという推測にも支配された。

彼は退屈のうちに細いながらかなり鋭い緊張を感じた。そのせいか、島田の自分を見る眼が、さつき擦硝^{すりガラス}子の蓋^{かさ}を通して油煙^{くす}に燻^{くす}ぶつた洋燈^{ランプ}の灯^ひを眺めていた時とは全く變つていた。

「隙^{すき}があつたら飛び込もう」

落ち込んだ彼の眼は鈍いくせに明らかにこの意味を物語つてい

た。自然健三はそれに抵抗して身構えなければならなくなった。

しかし時によると、その身構えをさらりと投げ出して、飢えたよ
うな相手の眼に、おちつき落付を与えて遣りたくなる場合もあった。

その時突然奥の間で細君の唸るうなような声がした。健三の神経は
この声に対して普通の人以上の敏感を有もっていた。彼はすぐ耳を
峙そばだてた。

「誰か病気ですか」と島田が訊きいた。

「ええ妻さいが少し」

「そうですか、それはいけませんね。どこが悪いんです」

島田はまだ細君の顔を見た事がなかった。何時どこから嫁に
来た女かさえないらしいかった。従つて彼の言葉にはただ挨あい拶さつ

があるだけであつた。健三もこの人から自分の妻に対する同情を求めようとは思つていなかった。

「近頃は時候が悪いから、能く^よ気を付けないといけませんね」

子供は疾^とうに寐^ね付いた後^{あと}なので奥は寂^{しん}としていた。下女^{げじよ}は一番

懸け離れた台所の傍^{そば}の三畳にいるらしかった。こんな時に細君をたつた一人で置くのが健三には何より苦しかった。彼は手^たを叩いて下女を呼んだ。

「ちよつと奥へ行つて奥さんの傍^{すわ}に坐つててくれ」

「へええ」

下女は何のためだか解らないといった様子をして間の襖^{ふすま}を締めた。健三はまた島田の方を向き直つた。けれども彼の注意はむしろ

ろ老人を離れていた。腹の中で早く帰ってくれば好いと思うので、その腹が言葉にも態度にもありありと現れた。

それでも島田は容易に立たなかった。話の接穂つぎほがなくなつて、手持無沙汰ぶさたで仕方なくなつた時、始めて座蒲団ざぶとんから滑り落ちた。

「どうも御邪魔をしました。御忙がしいところを。いずれまたその内」

細君の病氣については何事もいわなかつた彼は、沓脱くつぬぎへ下りてからまた健三の方を振り向いた。

「夜分なら大抵御暇ですか」

健三は生返事をしたなり立っていた。

「実は少し御話したい事があるんですが」

健三は何の御用ですかとも聞き返さなかった。老人は健三の手
に持った暗い灯影ひかげから、鈍い眼を光らしてまた彼を見上げた。そ
の眼にはやつぱりどこかに隙があつたら彼の懷もぐに潜り込もうとい
う人の悪い厭いやな色か動いていた。

「じゃ御免」

最後に格子こうしを開けて外へ出た島田はこういつてとうとう暗がり
に消えた。健三の門には軒燈さえ点ついていなかった。

五十

健三はすぐ奥へ来て細君の枕元に立った。

「どうかしたのか」

細君は眼を開けて天井を見た。健三は蒲団ふとんの横からまたその眼みおろを見下した。

襖ふすまの影に置かれた洋燈ラングの灯ひは客間のよりも暗かった。細君の眸ひとみがどこに向つて注がれているのか能く分らない位暗かった。

「どうかしたのか」

健三は同じ問をまた繰り返さなければならなかった。それでも細君は答えなかった。

彼は結婚以来こういう現象に何度となく遭遇した。しかし彼の神経はそれに慣らされるには余りに鋭敏過ぎた。遭遇するたびに、同程度の不安を感じるのが常であつた。彼はすぐ枕元に腰を卸し

た。

「もうあっちへ行つても好い。此所には己おれがいるから」

ぼんやり蒲団の裾すわに坐つて、退屈そうに健三の様子を眺めていた下女げじよは無言のまま立ち上つた。そして「御休みなさい」と敷

居の所へ手を突いて御辞儀をしたなり襖を立て切つた。後には赤

い筋を引いた光るものが畳の上に残つた。彼は眉まゆを顰ひそめながら下

女の振り落して行つた針を取り上げた。何時もなら婢おんなを呼び返し

て小言こことをいつて渡すところを、今の彼は黙つて手に持ったまま、

しばらく考えていた。彼はしまいにその針をぶつりと襖に立てた。

そうしてまた細君の方へ向き直つた。

細君の眼はもう天井を離れていた。しかし判然はつきりどこを見てい

ると思えなかった。黒い大きな瞳子には生きた光があつた。けれども生きた働きが欠けていた。彼女は魂と直接に繋がつていないような眼を一杯に開けて、漫然と瞳孔の向いた見当を眺めていた。

「おい」

健三は細君の肩を揺つた。細君は返事をせず、ただ首だけをそろりと動かして心持健三の方に顔を向けた。けれども其所に夫の存在を認める何らの輝きもなかった。

「おい、己だよ。分るかい」

こういう場合に彼の何時でも用いる陳腐で簡略でしかもぞんざいなこの言葉のうちには、他に知れないで自分にばかり解つてい

る憐憫れんびんと苦痛と悲哀があつた。それから跪ひざまずいて天に禱いのする時
の誠と願もあつた。

「どうぞ口を利いてくれ。後生だから己の顔を見てくれ」

彼は心のうちでこういつて細君に頼むのである。しかしその痛
切な頼みを決して口へ出していおうとはしなかつた。感傷センチメンタル的
な氣分に支配されやすいくせに、彼は決して外デモンストラチヴ表的になれ
ない男であつた。

細君の眼は突然平生へいぜいの我に歸つた。そうして夢から覺めた人
のように健三を見た。

「貴夫あなた?」

彼女の声は細くかつ長かつた。彼女は微笑しかけた。しかしま

だ緊張している健三の顔を認めた時、彼女はその笑を止めた。

「あの人はもう帰ったの」

「うん」

二人はしばらく黙っていた。細君はまた頸^{くび}を曲げて、傍^{そば}に寐^ねて
いる子供の方を見た。

「能く寐ているのね」

子供は一つ床の中に小さな枕を並べてすやすや寐ていた。

健三は細君の額の上に自分の右の手を載せた。

「水で頭でも冷して遣^やろうか」

「いいえ、もう好^よござんす」

「大丈夫かい」

「ええ」

「本当に大丈夫かい」

「ええ。貴夫ももう御休みなさい」

「己はまだ寐る訳に行かないよ」

健三はもう一遍書齋へ入って静かな夜よを一人更ふかさなければならなかった。

五十一

彼の眼が冴さえている割に彼の頭は澄み渡らなかつた。彼は思索の綱を中断された人のように、考察の進路を遮さぐる霧の中で苦し

んだ。

彼は明日あしたの朝多くの人より一段高い所に立たなければならぬ
 憐あわれな自分の姿を想い見た。その憐れな自分の顔を熱心に見詰
 たり、または不得意な自分のいう事を真面目まじめに筆記したりする青
 年に対して済まない気がした。自分の虚栄心や自尊心を傷きずけるの
 も、それらを超越する事の出来ない彼には大きな苦痛であつた。

「明日あしたの講義もまた纏まとまらないのかしら」

こう思うと彼は自分の努力が急に厭いやになつた。愉快に考えの筋
 道が運んだ時、折々何者にか煽せんどう動されて起る、「己おれの頭は悪く
 ない」という自信も己惚うぬぼれも忽たちまち消えてしまった。同時にこの頭
 の働からきを攪かき乱す自分の周囲についての不平も常時ふだんよりは高ま

つて来た。

彼はしまいに投げるように洋筆^{ペン}を放り出した。

「もうやめだ。どうでも構わない」

時計はもう一時過ぎていた。洋燈^{ランプ}を消して暗闇^{くらやみ}を縁側伝いに

廊下へ出ると、突^{つき}当^{あた}りの奥の間の障子二枚だけが灯^ひに映って明

るかった。健三はその一枚を開けて内に入った。

子供は犬ころのように塊^{かた}まって寐^ねていた。細君も静かに眼を閉じて仰向^{あおむけ}に眠っていた。

音のしないように気を付けてその傍^{そば}に坐^{すわ}った彼は、心持頸^{くび}を延

ばして、細君の顔を上から覗^{のぞ}き込んだ。それからそつと手を彼女の寐顔^{ねがお}の上に翳^{かげ}した。彼女は口を閉じていた。彼の掌^{てのひら}には細君の

鼻の穴から出る生暖かい呼息^{いき}が微かに感ぜられた。その呼息は規則正しかった。また穏やかだった。

彼は漸く^{ようや}出した手を引いた。するともう一度細君の名を呼んで見なければまだ安心が出来ないという気が彼の胸を衝^ついて起った。けれども彼は直^{すぐ}その衝動に打勝った。次に彼はまた細君の肩へ手を懸けて、再び彼女を揺^ゆり起そうとしたが、それもやめた。

「大丈夫だろう」

彼は漸く普通の人の断案に帰着する事が出来た。しかし細君の病氣に対して神経の鋭敏になつている彼には、それが何人^{なんびと}もこういう場合に取りなければならない尋常の手続きのように思われたのである。

細君の病氣には熟睡が一番の薬であつた。長時間彼女の傍に坐つて、心配そうにその顔を見詰めている健三に何よりも有難いその眠りが、静かに彼女の^{まぶた}瞼の上に落ちた時、彼は天から降る甘露をまのあたり見るような気が常にした。しかしその眠りがまた余り長く続き過ぎると、今度は自分の視線から隠された彼女の眼がかえつて不安の種になつた。ついに^{まつげ}睫毛の鎖^{とぎ}している奥を見るために、彼は正体^{たわい}なく寐入つた細君を、わざわざ^{ゆす}揺り起して見る事が折々あつた。細君がもつと寐かして置いてくれれば^{いい}好いのにと、いう訴えを疲れた顔色に現わして重い瞼を開くと、彼はその時始めて後悔した。しかし彼の神経はこんな気の毒な^{まね}真似をしてまでも、彼女の実在を確かめなければ承知しなかつたのである。

やがて彼は寐衣ねまきを着換えて、自分の床に入った。そうして濁りながら動いているような彼の頭を、静かな夜の支配に任せた。夜はその濁りを清めてくれるには余りに暗過ぎた、しかし騒がしいその動きを止めるには充分静かであつた。

翌朝あくるあさ

彼は自分の名を呼ぶ細君の声で眼を覚ました。

「貴夫あなたもう時間ですよ」

まだ床を離れない細君は、手を延ばして彼の枕元から取った袂た時計もとどけいを眺めていた。下女げじよが俎板まないたの上で何か刻む音が台所の方で聞こえた。

「婢おんなはもう起きてるのか」

「ええ。さつき先刻起しに行つたんです」

細君は下女を起して置いてまた床の中に這入ったのである。健三はすぐ起き上がった。細君も同時に立った。

昨夜の事は二人ともまるで忘れたように何にもいわなかった。

五十二

二人は自分たちのこの態度に対して何の注意も省察も払わなかった。二人は二人に特有な因果関係を有っている事を冥々の裡に自覚していた。そうしてその因果関係が一切の他人には全く通じないのだという事も能く呑み込んでいた。だから事状を知らない第三者の眼に、自分たちがあるいは変に映りはしまいかとい

う疑念さえ起さなかつた。

健三は黙つて外へ出て、例の通り仕事をした。しかしその仕事の真際中に彼は突然細君の病氣を想像する事があつた。彼の眼の前に夢を見ているような細君の黒い眼が不意に浮んだ。すると彼はすぐ自分の立つてゐる高い壇から降りて宅へ歸らなければならぬような気がした。あるいは今にも宅から迎^{むか}が来るような心持になつた。彼は広い室^{へや}の片隅^{かど}にいて真ん向^{まむかひ}うの突^{つき}当^{あた}りにある遠い戸口を眺めた。彼は仰向^{かぶと}いて兜^{かぶと}の鉢^{はち}金^{がね}を伏せたような高い丸天井を眺めた。仮^{ヴァーニツシ}漆^{ニツシ}で塗り上げた角材を幾段にも組み上げて、高いものを一層高く見えるように工夫したその天井は、小さい彼の心を包むに足りなかつた。最後に彼の眼は自分の下に黒い頭を

並べて、神妙に彼のいう事を聴いている多くの青年の上に落ちた。そうしてまた卒然として現実に帰るべく彼らから余儀なくされた。これほど細君の病気に悩まされていた健三は、比較的島田のために崇^{たた}られる恐れを抱^{いだ}かなかつた。彼はこの老人を因^{いん}業^{ごう}で強^{ごう}慾^{よく}な男と思つていた。しかし一方ではまたそれらの性癖を充分發揮する能力がないものとしてむしろ見^み縊^{くび}つてもいた。ただ要^いらぬ会談に惜い時間を潰^{つぶ}されるのが、健三には或種類の人の受ける程度より以上の煩いになつた。

「何をいつて来る気かしら、この次は」

襲^おわれる事を予期して、暗^{あん}にそれを苦にするような健三の口^{くち}振^ぶが、細君の言葉を促^うがした。

「どうせ分っているじやありませんか。そんな事を気になさるより早く絶交した方がよっぽど得ですわ」

健三は心の裡で細君のいう事を肯が^{うけ}った。しかし口ではかえって反対な返事をした。

「それほど気にしちやいないさ、あんな者。もともと恐ろしい事なんかないんだから」

「恐ろしいって誰もいやしませんわ。けれども面倒臭^{めんどくさ}いにや違いないでしょう、いくら貴夫^{あなた}だって」

「世の中にはただ面倒臭い位な単純な理由でやめる事の出来ないものがいくらでもあるさ」

多少片意地の分子を含んでいるこんな会話を細君と取り換わせ

た健三は、その次島田の来た時、例^{いつも}よりは忙がしい頭を抱えてい
るにもかかわらず、ついに面会を拒絶する訳に行かなかつた。

島田のちと話したい事があるといったのは、細君の推察通りや
っぱり金の問題であつた。隙^{すき}があつたら飛び込もうとして、この
間^{ねらい}から覘^{ねらい}を付けていた彼は、何時まで待つても際限がないとでも
思つたものか、機会のあるなしに頓^{とんじやく}着^{やく}なく、ついに健三に肉^に
薄^{くはく}し始めた。

「どうも少し困るので。外にどこといって頼みに行く所もない私^{わたし}
なんだから、是非一つ」

老人の言葉のどこかには、義務として承知してもらわなくつち
や困るといった風の横着さが潜んでいた。しかしそれは健三の神

経を自尊心の一角において傷め付けるほど強くも現われていなかった。

健三は立つて書斎の机の上から自分の紙入を持って来た。一家の会計を司どつていない彼の財囊は無論軽かった。空のまま硯箱の傍に幾日も横たわっている事さえ珍らしくはなかった。

彼はその中から手に触れるだけの紙幣を攫み出して島田の前に置いた。島田は変な顔をした。

「どうせ貴方の請求通り上げる訳には行かないんです。それでもありつたけ悉皆上げたんですよ」

健三は紙入の中を開けて島田に見せた。そうして彼の帰ったあとで、空の財布を客間へ放り出したまままた書斎へ入った。細君

には金を遣^やつた事を一口もいわなかつた。

五十三

翌^{あくるひ}日例刻に歸つた健三は、机の前に坐^{すわ}つて、大事らしく何時もの所に置かれた昨日^{きのう}の紙入に眼を付けた。革で拵^{こし}えられた大型のこの二つ折は彼の持物としてむしろ立派過ぎる位上等な品であつた。彼はそれを倫敦^{ロンドン}の最も賑^{にぎ}やかな町で買つたのである。

外国から持つて歸つた記念が、何の興味も惹^ひかなくなりつつある今の彼には、この紙入も無用の長物と見える外はなかつた。細君^{なげ}が何故丁寧^{なげ}にそれを元の場所へ置いてくれたのだろうかときえ

疑った彼は、皮肉な一瞥いちべつを空っぽうの入物に与えたぎり、手も触れずに幾日かを過ごした。

その内何かで金の要いる日が来た。健三は机の上の紙入を取り上げて細君の鼻の先へ出した。

「おい少し金を入れてくれ」

細君は右の手で物指ものさしを持ったまま夫の顔を下から見上げた。

「這入はいつてるはずですよ」

彼女はこの間島田の帰ったあとで何事も夫から聴こうとしなかった。それで老人に金を奪とられたことも全く夫婦間の話題に上のぼっていなかった。健三は細君が事状を知らないでこういうのかと思つた。

「あれはもう遣^やつちやつたんだ。紙入は疾^とうから空っぽうになっているんだよ」

細君は依然として自分の誤解に気が付かないらしかった。物指を畳の上へ投げ出して手を夫の方へ差し延べた。

「ちよつと拝見」

健三は馬鹿々々しいという風をして、それを細君に渡した。細君は中を検^{あら}ためた。中からは四、五枚の紙幣^{さつ}が出た。

「そらやつぱり入ってるじゃありませんか」

彼女は手垢^{てあか}の付いた皺^{しわ}だらけの紙幣を、指の間に挟んで、ちよつと胸のあたりまで上げて見せた。彼女の挙動は自分の勝利に誇るものの如く微^{かす}かな笑に伴なつた。

「何時入れたのか」

「あの人の帰った後です」

健三は細君の心遣を嬉しく思うよりもむしろ珍らしく眺めた。

彼の理解している細君はこんな気の利いた事を滅多にする女ではなかったのである。

「己が内所で島田に金を奪られたのを気の毒とでも思ったものかしら」

彼はこう考えた。しかし口へ出してその理由を彼女に訊き糺して見る事はしなかった。夫と同じ態度をついに失わずにいた彼女も、自ら進んで己れを説明する面倒を敢てしなかった。彼女の填補した金はいくして黙って受取られ、また黙って消費されてしま

った。

その内細君の御腹おなかが段々大きくなつて来た。起居たちいに重苦しうな呼息いきをし始めた。気分も能くよ变化した。

わたくしんだ

「妾今度はことによると助からないかも知れませんよ」

彼女は時々何に感じてかこういつて涙を流した。大抵は取り合わずにいる健三も、時として相手にさせられなければ済まなかつた。

「何故なぜだい」

「何故だかそう思われて仕方がないんですもの」

質問も説明もこれ以上には上る事のぼの出来なかつた言葉のうちに、ぼんやりした或ものが常に潜んでいた。その或ものは単純な言葉

を伝わって、言葉の届かない遠い所へ消えて行つた。鈴りんの音ねが鼓膜の及ばない幽かすかな世界に潜り込むように。

彼女は悪阻つわりで死んだ健三の兄の細君の事を思い出した。そうして自分が長女を生む時に同じ病で苦しんだ昔と照し合せて見たりした。もう二、三日食物が通らなければ滋養かんちよう灌腸かんちようをするはずだつた際どいところを、よく通り抜けたものだなどと考えると、生きている方がかえつて偶然のような気がした。

「女は詰らないものね」

「それが女の義務なんだから仕方がない」

健三の返事は世間並であつた。けれども彼自身の頭で批判すると、全くの出鱈目でたらめに過ぎなかつた。彼は腹の中で苦笑した。

五十四

健三の気分にも上り下りあがさががあつた。出任せにもせよ細君の心を休めるような事ばかりはいつていなかった。時によると、不快そうに寝ねている彼女の体ていたらくが癩しやくに障つて堪らなくなつた。枕元に突つ立つたまま、わざとけんどん癭貪いに要らざる用を命じて見たりした。

細君も動かなかつた。大きな腹を畳へ着けたなり打つとも蹴けるとも勝手にしろという態度をとつた。平生へいぜいからあまり口数を利かない彼女は益ますます沈黙を守つて、それが夫の気を焦いらだ立たせるのを目

の前に見ながら澄ましていた。

「つまりしぶといのだ」

健三の胸にはこんな言葉が細君の凡ての特色でもあるかのよう
 うに深く刻み付けられた。彼は外の事をまるで忘れてしまわな
 ればならなかった。しぶといという観念だけがあらゆる注意の焦
 点になつて来た。彼はよそを真闇まつくらにして置いて、出来るだけ強
 烈な憎悪の光をこの四字の上に投げ懸けた。細君はまた魚か蛇の
 ように黙つてその憎悪を受取つた。従つて人目には、細君が何時
 でも品格のある女として映る代りに、夫はどうしても氣違染み
 た癩癩持かんしやくもちとして評価されなければならなかった。

「貴夫あなたがそう邪慳じゃけんになさると、また歇私ヒステリー的里を起しますよ」

細君の眼からは時々こんな光が出た。どういふものか健三は非道くその光を怖れた。同時に劇しくそれを悪んだ。我慢な彼は内心に無事を祈りながら、外部では強いて勝手にしろという風を装った。その強硬な態度のどこかに何時でも仮装に近い弱点があるのを細君は能く承知していた。

「どうせ御産で死んでしまうんだから構やしない」

彼女は健三に聞えよがしに呟やいた。健三は死んじまえといいたくなつた。

或晩彼はふと眼を覚まして、大きな眼を開いて天井を見詰えている細君を見た。彼女の手には彼が西洋から持つて歸つた髪剃があつた。彼女が黒檀の鞘に折り込まれたその刃を真直に立て

ずに、ただ黒い柄^えだけを握っていたので、寒い光は彼の視覚を襲わずに済んだ。それでも彼はぎよつとした。半身を床の上に起して、いきなり細君の手から髪剃を^も撈ぎ取った。

「馬鹿な真似をするな」

こういうと同時に、彼は髪剃を投げた。髪剃は障子に^は簾め込んだ硝子^{ガラス}に^{あた}中つてその一部分を^{くだ}摧いて向う側の縁^{えん}に落ちた。細君は^{ぼうぜん}茫然として夢でも見ている人のように一口も物をいわなかった。

彼女は本当に情に^{せま}逼つて刃物^{はもの}三昧^{さんまい}をする気なのだろうか、または病気の発作に自己の意志を^{もてあ}捧げべく余儀なくされた結果、無我夢中で切れものを^{もてあ}弄そぶのだろうか、あるいは単に夫に打ち勝とうとする女の策略からこうして人を驚かすのだろうか、驚ろか

すにしてもその真意は果してどこにあるのだろうか。自分に対する夫を平和で親切な人に立ち返らせるつもりなのだろうか、またはただ浅墓な征服慾に駆られているのだろうか、——健三は床の中で一つの出来事を五^{いつすじ}条にも六^{むすじ}条にも解釈した。そうして時々眠れない眼をそつと細君の方に向けてその動静をうかがった。寐ているとも起きているとも付かない細君は、まるで動かなかつた。あたかも死を銜^{てら}う人のようであつた。健三はまた枕の上でまた自分の問題の解決に立ち歸つた。

その解決は彼の実生活を支配する上において、学校の講義よりも遙かに大切であつた。彼の細君に対する基調は、全^{まづたく}その解決一つでちゃんと定められなければならなかつた。今よりずっと單純

であつた昔、彼は一図に細君の不可思議な挙動を、病のためとのみ信じ切つていた。その時代には発作の起るたびに、神の前に己おのれを懺悔ざんげする人の誠を以て、彼は細君の膝下しつかひざまに跪ひざまずいた。彼はそれを夫として最も親切でまた最も高尚な処置と信じていた。

「今だつてその原因が判然はつきり分りさえすれば」

彼にはこういう慈愛の心が充ち満ちていた。けれども不幸にしてその原因は昔のように単純には見えなかつた。彼はいくらでも考えなければならなかつた。到底解決の付かない問題に疲れて、とろとろと眠るとまたすぐ起きて講義をしに出掛けなければならなかつた。彼は昨夕ゆうべの事について、ついに一言も細君に口を利くひとこと機会を得なかつた。細君も日の出と共にそれを忘れてしまったよ

うな顔をしていた。

五十五

こういう不愉快な場面の後には大抵仲裁者としての自然が二人の間に這入^{はい}つて来た。二人は何時となく普通夫婦の利くような口を利き出した。

けれども或時の自然は全くの傍観者に過ぎなかった。夫婦はどこまで行っても背中合せのまままで暮した。二人の関係が極端な緊張の度合に達すると、健三はいつも細君に向つて生家へ帰れといった。細君の方ではまた帰ろうが帰るまいがこっちの勝手だとい

う顔をした。その態度が憎らしいので、健三は同じ言葉を何遍でも繰り返して憚はばらなかつた。

「じや当分子供を伴つれて宅うちへ行つていきましょう」

細君はこういつて一旦里へ歸つた事もあつた。健三は彼らの食料を毎まい月送げつつて遣やるといふ条件もとの下に、また昔のような書生生活に立ち歸れた自分を喜んだ。彼は比較的広い屋敷に下女げじよとたつた二人ぎりになつたこの突然の変化を見て、少しも淋さびしいとは思わなかつた。

「ああ晴々せいせいして好いい心持だ」

彼は八畳の座敷の真中に小さな餉ちやぶだい台を据えてその上で朝から夕方までノートを書いた。丁度極暑の頃だったので、身体からだの強

くない彼は、よく仰向あおもむけになつてばかりと畳の上に倒れた。何時替えたとも知れない時代の着いたその畳には、彼の脊中せなかを蒸すような黄色い古びが心しんまで透つていた。

彼のノートもまた暑苦しいほど細かな字で書き下くだされた。蠅はえの頭というより外に形容のしようのないその草稿を、なるべくだけ余計こしら拵えるのが、その時の彼に取つては、何よりの愉快であつた。そして苦痛であつた。また義務であつた。

巣鴨すがもの植木屋の娘とかいう下女は、彼のために二、三の盆栽を宅から持つて来てくれた。それを茶の間の縁えんに置いて、彼が飯を食う時給仕をしながら色々な話をした。彼は彼女の親切を喜こんだ。けれども彼女の盆栽を軽蔑けいべつした。それはどこの縁日へ行つ

ても、二、三十銭出せば、鉢ごと買える安価な代物しろものだったのである。

彼は細君の事をかつて考えずにノートばかり作っていた。彼女の里へ顔を出そうなどという気はまるで起らなかった。彼女の病氣に対する懸念も悉く消えてしまった。

「病氣になつても父母が付いているじゃないか。もし悪ければ何とかいつて来るだろう」

彼の心は二人一所にいる時よりも遙はるかに平静であつた。

細君の關係者に会わないのみならず、彼はまた自分の兄や姉にも会いに行かなかつた。その代り向うでも来なかつた。彼はたった一人で、日中の勉強につづく涼しい夜を散歩に費やした。そう

して継布つぎのあたった青い蚊帳かやの中に入って寐ねた。

一カ月あまりすると細君が突然遣つて来た。その時健三は日のかぎった夕暮の空の下に、広くもない庭先を逍遙あちこちしていた。彼の歩みが書斎の縁側の前へ来た時、細君は半分朽ち懸けた枝折戸しおりどの影から急に姿を現わした。

「貴夫故あなたもとのようになって下さらなくって」

健三は細君の穿はいている下駄げたの表が変にささくれて、その後うしろの方が如何いかにも見苦しく擦すり減らされているのに気が付いた。彼は憐あわれになった。紙入の中から三枚の一円紙幣を出して細君の手に握らせた。

「見つともないからこれで下駄でも買ったら好いだろう」

細君が帰ってから幾日^{いくか}目か経つた後^{のち}、彼女の母は始めて健三を訪ずれた。用事は細君が健三に頼んだのと大同小異で、もう一遍彼らを引取ってくれという主意を畳の上で布^ふ衍^{えん}したに過ぎなかった。既に本人に帰りたい意志があるのを拒絶するのは、健三から見ると無情な挙^{ふる}動^{まい}であつた。彼は一も二もなく承知した。細君はまた子供を連れて駒^{こま}込^{ごめ}へ帰つて来た。しかし彼女の態度は里へ行く前と毫^{ごう}も違つていなかった。健三は心のうちで彼女の母に騙^{だま}されたような気がした。

こうした夏中の出来事を自分だけで繰り返して見るたびに、彼は不愉快になつた。これが何時まで続くのだろうかと考えたりした。

五十六

同時に島田はちよいちよい健三の所へ顔を出す事を忘れなかつた。利益の方面で一度手掛りを得た以上、放したらそれつきりだという懸念がなおさら彼を蒼蠅うるさくした。健三は時々書斎に入つて、例の紙入を老人の前に持ち出さなければならなかつた。

「^{いい}紙入ですね。へええ。外国のものはやつぱりどこか違いますね」

島田は大きな二つ折を手につつて、さも感服したらしく、裏表を打返して眺めたりした。

「失礼ながらこれでどの位します。あちらでは」

「たしか十志シリシグだつたと思います。日本の金にすると、まあ五円位なものでしょう」

「五円？——五円は随分好い価ねですね。浅草あさくさの黒船町くろふねちやうに古くから私の知わたしつてる袋物屋があるが、彼所あそこならもつとずっと安く拵こしらえてくれますよ。こんだ要いる時にや、私が頼んで上げましょう」

健三の紙入は何時も充実していなかった。全く空虚からの時もあった。そういう場合には、仕方がないので何時まで経つても立ち上がらなかつた。島田も何かに事寄せて尻しりを長くした。

「小遣を遣やらないうちは帰らない。厭いやな奴だ」

健三は腹の内で憤った。しかしいくら迷惑を感じても細君の方

から特別に金を取って老人に渡す事はしなかった。細君もその位な事ならといった風をして別に苦情を鳴らさなかった。

そうこうしているうちに、島田の態度が段々積極的になって来た。二十、三十と纏まとった金を、平気に向うから請求し始めた。

「どうか一つ。私もこの年になって倚かかる子はなし、依怙たよりにするのは貴方あなた一人なんだから」

彼は自分の言葉遣いの横着さ加減にさえ気が付いていなかった。それでも健三がむっとして黙っていると、凹くぼんだ鈍い眼を狡猾こうかつらしく動かして、じろじろ彼の様子を眺める事を忘れなかった。

「これだけの生活くらしをしていて、十や二十の金の出来ないはずはない」

彼はこんな事まで口へ出していった。

彼が帰ると、健三は厭な顔をして細君に向った。

「ありや成し崩しに己をおれ侵しんしよく蝕する気なんだね。始め一度に攻め落そうとして断られたもんだから、今度は遠巻にしてじりじり寄きつて来ようってんだ。実に厭な奴だ」

健三は腹が立ちさえすれば、よく実にとか一番とか大とかいう最大級を使つて鬱うつぶん憤の一端を洩もらしたがる男であつた。こんな点になると細君の方はしぶとい代りに大分落付だいぶんおちついていた。

「貴夫が引あなたつ掛るから悪いのよ。だから始めから用心して寄せ付けないようになされば好いのに」

健三はその位の事なら最初から心得ているといわぬばかりの様

子を、むつとした頬ほおと唇とに見せた。

「絶交しようと思えば何時だつて出来るさ」

「しかし今まで付合っただけが損になるじゃありませんか」

「そりや何の関係もない御前から見ればそうさ。しかし己は御前とは違うんだ」

細君には健三の意味が能く通よじなかつた。

「どうせ貴夫の眼から見たら、妾わたくしなんぞは馬鹿でしょうよ」
健三は彼女の誤解を正してやるのさえ面倒になつた。

二人の間に感情の行違ゆきちがひでもある時は、これだけの会話すら交換されなかつた。彼は島田の後うしろ影かげを見送つたまま黙つてすぐ書齋へ入つた。そこで書物も読まず筆も執らずただ凝じつと坐すわつて

いた。細君の方でも、家庭と切り離されたようなこの孤独な人にいつ何時までも構う気色けしきを見せなかった。夫が自分の勝手に座敷牢ざしきろうへ入っているのだから仕方がない位に考えて、まるで取り合ずにいた。

五十七

健三の心は紙屑かみくずを丸めたようにくしやくしやした。時によると肝癰かんしやくの電流を何かの機会に応じて外へ洩もらさなければ苦しいたたくつて居いたまれなくなった。彼は子供が母に強請せびつて買ってもらった草花の鉢などを、無意味に縁側から下へ蹴け飛ばして見たりし

た。赤ちやけた素焼すやきの鉢が彼の思い通りにがらがらと破るわれのさえ彼には多少の満足になった。けれども残酷むごたらしく摧くだかれたその花と茎あわの憐れな姿を見るや否や、彼はすぐまた一種の果敢はかない氣分に打ち勝たれた。何にも知らない我子の、嬉うれしがっている美しい慰みを、無慈悲に破壊したのは、彼らの父であるという自覺は、なおさら彼を悲しくした。彼は半ば自分の行為を悔いた。しかしその子供の前にわが非を自白する事は敢あえてし得なかつた。
「己おれの責任じゃない。必ひつきよう 竟こんな氣違じみた真似まねを己にさせるものは誰だ。そいつが悪いんだ」

彼の腹の底には何時でもこういう弁解が潜んでいた。

平静な会話は波だった彼の氣分を沈めるに必要であつた。しか

し人を避ける彼に、その会話の届きようはずはなかった。彼は一人いて一人自分の熱で燻^{くす}ぶるような心持がした。常でさえ有難くない保険会社の勧誘員などの名刺を見ると、大きな声をして罪もない取次の下女^{げじよ}を叱^{しか}った。その声は玄関に立っている勧誘員の耳にまで明らかに響いた。彼はあとで自分の態度を恥^{はじ}た。少なくとも好意を以て一般の人類に接する事の出来ない己^{おの}れを怒^{いか}った。同時に子供の植木鉢を蹴飛ばした場合と同じような言訳を、堂々と心の裡^{うち}で読み上げた。

「己^{おれ}が悪いのじゃない。己の悪くない事は、仮令^{たと}あの男に解つていなくつても、己には能^よく解っている」

無信心な彼はどうしても、「神には能く解っている」という事

が出来なかつた。もしそういういい得たならばどんなに仕合せだろうという気さえ起らなかつた。彼の道徳は何時でも自己に始まつた。そうして自己に終るぎりであつた。

彼は時々金の事を考えた。何故物質的の富を目標として今日まで働いて来なかつたのだらうと疑う日もあつた。

「己だつて、専門にその方ばかり遣りや」

彼の心にはこんな己惚おのぼれもあつた。

彼はけち臭い自分の生活状態を馬鹿らしく感じた。自分より貧乏な親類の、自分より切り詰めた暮し向に悩んでいるのを気の毒に思った。極めて低級な慾望で、朝から晩まで齷齪あくせくしているよ
うな島田をさえ憐れに眺めた。

「みんな金が欲しいのだ。そうして金より外には何にも欲しくないのでだ」

こう考えて見ると、自分が今まで何をして来たのか解らなくなつた。

彼は元来儲ける事の下手な男であつた。儲けられてもその方に使う時間を惜がる男であつた。卒業したてに、悉く他の口を断つて、ただ一つの学校から四十円貰つて、それで満足していた。彼はその四十円の半分を阿爺おやじに取られた。残る二十円で、古い寺の座敷を借りて、芋や油揚あぶらげばかり食っていた。しかし彼はその間に遂に何事も仕出かさなかつた。

その時分の彼と今の彼とは色々な点において大分だいぶ変っていた。

けれども經濟に余裕ゆとりのないのと、遂に何事も仕出かさないのとは、どこまで行つても變りがなさそうに見えた。

彼は金持になるか、偉くなるか、二つのうちどつちかに中途半端な自分を片付けたくなつた。しかし今から金持になるのは迂闊うかつな彼に取つてももう遅かつた。偉くなろうとすればまた色々な塵わづら勞いが邪魔をした。その塵勞の種をよくよく調べて見ると、やっぱり金のないのが大原因になつていた。どうして好いいか解らない彼はしきりに焦じれた。金の力で支配出来ない真に偉大なものが彼の眼に這入はいつて来るにはまだ大分間まがあつた。

健三は外国から歸つて來た時、既に金の必要を感じた。久しぶりにわが生れ故郷の東京に新らしい世帯を持つ事になった彼の懷中には一片の銀貨さえなかった。

彼は日本を立つ時、その妻子を細君の父に託した。父は自分の邸内にある小さな家を空けて彼らの住居に充てた。細君の祖父母が亡くなるまでいたその家は狭いながらさほど見苦しくもなかった。張交の襖には南湖の画だの鵬齋の書だの、すべて亡くなつた人の趣味を偲しのばせる記念と見るべきものさえ故の通り貼はり付けてあつた。

父は官吏であつた。大して派出な暮しの出来る身分ではなかつた。

たけれども、留守中手元に預かった自分の娘や娘の子に、苦しい
思いをさせるほど窮してもいなかった。その上健三の細君へは月
々いくらかの手当が公けから下りた。健三は安心してわが家族を
後に遺した。

彼が外国にいるうち内閣が變つた。その時細君の父は比較的安
全な閑職からまた引張出されて劇しく活動しなければならぬ或^{ある}
位置に就いた。不幸にしてその新らしい内閣はすぐ倒れた。父は
崩壊の渦の中に捲^{うち}き込まれなければならなかった。

遠い所でこの変化を聴いた健三は、同情に充ちた眼を故郷の空
に向けた。けれども細君の父の経済状態に關しては別に顧慮する
必要のないものとして、殆^{ほと}んど心を悩ませなかった。

迂闊^{うかつ}な彼は帰ってからも其所^{そこ}に注意を払わなかった。また気も付かなかつた。彼は細君が月々貰^{もら}う二十円だけでも子供二人に下^げ女^{じよ}を使つて充分遣^やつて行ける位に考えていた。

「何しろ家賃が出ないんだから」

こんな呑気^{のんき}な想像が、實際を見た彼の眼を驚愕^{おどろき}で丸くさせた。細君は夫の留守中に自分の不断着をことごとく着切つてしまった。仕方がないので、しまいには健三の置いて行つた地味^{じみ}な男物を縫い直して身に纏^{まと}つた。同時に蒲団^{ふとん}からは綿が出た。夜具は裂けた。それでも傍^{そば}に見ている父はどうして遣る訳にも行かなかつた。彼は自分の位地を失つた後^{あと}、相場に手を出して、多くもない貯蓄を悉く亡くしてしまったのである。

首の回らないほど高い襟^{カラ}を掛けて外国から帰って来た健三は、この惨澹^{みじめ}な境遇に置かれたわが妻子を黙って眺めなければならなかった。ハイカラな彼はアイロニーのために手非道^{てひど}く打ち据えられた。彼の唇は苦笑する勇氣さえ有^もたなかった。

その内彼の荷物が着いた。細君に指輪一つ買って来なかった彼の荷物は、書籍だけであつた。狭苦しい隠居所のなかで、彼はその箱の蓋^{ふた}さえ開ける事の出来ないのを馬鹿らしく思った。彼は新しい家を探し始めた。同時に金の工面もしなければならなかった。

彼は唯一の手段として、今まで継続して来た自分の職を辞した。彼はその行為に伴なつて起る必然な結果として、一時賜金^{いちじしきん}を受取

る事が出来た。一年勤めれば役をやめた時に月給の半額をくれるという規定に従って彼の手に入ったその金額は、無論大したものではなかった。けれども彼はそれで漸やっと日常生活に必要な家具家財を調えた。ととの

彼は僅わずばかりの金を懐にして、或る古い友達と一所に方々の道具屋などを見て歩いた。その友達がまた品物の如何いかんにかかわらずむやみに価切り倒す癖を有っているので、彼はただ歩くために少なからぬ時間を費やさされた。茶盆、烟草盆タバコぼん、火鉢ひばち、井鉢どんぶりばち、眼に入るものはいくらでもあったが、買えるのは滅多に出て来なかった。これだけに負けて置けと命令するようにいつて、もし主人がその通りにしないと、友達は健三を店先に残したまま、さつ

さと先へ歩いて行つた。健三も仕方なしに後を追おっかけ懸なければならなかつた。たまに愚図々々していると、彼は大きな声を出して遠くから健三を呼んだ。彼は親切な男であつた。同時に自分の物を買うのか他の物ひとを買うのか、その区別を弁わえていないように猛烈な男であつた。

五十九

健三はまた日常使用する家具の外に、本棚だの机だのを新調しなければならなかつた。彼は洋風の指物さしものを渡世とせにする男の店先に立つて、しきりに算盤そろばんを弾はく主人と談判をした。

彼の詔あつらえた本棚には硝子戸ガラスドも後部うしろも着いていなかった。塵埃ほこりの積る位は懷中に余裕のない彼の意とする所ではなかった。木がよく枯れていないので、重い洋書を載せると、棚板が気の引けるほどしな撓なった。

こんな粗末な道具ばかりを揃えるのにさえ彼は少からぬ時間を費やした。わざわざ辞職して貰もらった金は何時の間にかもうなくなっていた。迂闊うかつな彼は不思議そうな眼を開いて、索然たる彼の新居を見廻した。そうして外国にいる時、衣服を作る必要に逼せまられて、同宿の男から借りた金はどうして返して好いいか分らなくなつてしまったように思い出した。

そこへその男からもし都合が付くなら算段してもらいたいとい

う催促状が届いた。健三は新らしく^{こしら}拵えた高い机の前に坐^{すわ}つて、少^{しばら}く時彼の手紙を眺めていた。

僅^{わず}の間とはいいいながら、遠い国で一^{いっし}所に暮したその人の記憶は、健三に取つて淡い新しさを帯びていた。その人は彼と同じ学校の出身であつた。卒業の年もそう違わなかつた。けれども立派な御役人として、ある重要な事項取調のためという名義^{もと}の下に、官命で遣^やつて来たその人の財力と健三の給費との間には、殆^{ほと}んど比較にならないほどの懸隔があつた。

彼は寢室の外に応接間も借りていた。夜になると繻子^{しゆす}で作つた刺繡^{ぬいとり}のある綺麗^{きれい}な寝衣^{ナイトガウン}を着て、暖かそうに暖炉の前で書物などを読んでいた。北向の狭苦しい部屋で押し込められたように

凝^{じつ}と竦^{すく}んでゐる健三は、ひそかに彼の境遇^{うらや}を羨^{うらや}んだ。

その健三には、昼^{ちゆう}食^{うじき}を節約^{あわ}した憐^{あわ}れな経験^{あわ}さえあつた。ある

時の彼は表へ出た、帰^{かえり}掛^{かけ}に途中^{めあて}で買つたサンドウィッチを食

ながら、広い公園の中を目的^{めあて}もなく歩いた。斜めに吹きかける雨

を片^{かた}々^{かた}の手に持った傘で防^よけつつ、片々の手で薄く切つた肉と

麵^{パン}麩^ほを何度にも頬張^{ほおば}るのが非常に苦しかった。彼は幾たびか其所^{そこ}

にあるベンチへ腰^{おろ}を卸^{おろ}そうとしては、躊^{ちゆう}躇^{うちよ}した。ベンチは雨の

ために悉く濡^{ことごとぬ}れていたのである。

ある時の彼は町で買つて来たビスケットの缶^{ひる}を午になると開い

た。そうして湯も水も吞^のまずに、硬^{もろ}くて脆^{もろ}いものをぼりぼり嚙^かみ

摧^{くだ}いては、生^{なまつばき}唾^{なまつばき}の力で無理に嚙^のみ下^{くだ}した。

ある時の彼はまた馭者ぎよしやや労働者と一所に如何いかにわしい一膳飯いちぜんめし屋やで形かたばかりの食事を済ました。其所の腰掛うしろの後部は高い屏風びょうぶのように切立きつたっているので、普通の食堂の如く、広い室へやを一目に見渡す事は出来なかつたが、自分と一列に並んでいるものの顔だけは自由に眺められた。それは皆な何時湯に入つたか分らない顔であつた。

こんな生活をしている健三が、この同宿の男の眼にはさも氣の毒に映つたと見えて、彼は能く健三を午餐ひるめしに誘ひ出した。錢湯へも案内した。茶の時刻には向うから呼びに來た。健三が彼から金を借りたのはこうして彼と大分懇意だいぶんになつた時の事であつた。その時彼は反故ほごでも棄すてるように無雜作な態度を見せて、五磅ポンド

のバンクノートを二枚健三の手に渡した。何時返してくれとは無
論いわなかった。健三の方でも日本へ帰ったらどうにかなるだろ
う位に考えた。

日本へ帰った健三は能くこのバンクノートの事を覚えていた。
けれども催促状を受取るまでは、それほど急に返す必要が出て来
ようとは思わなかった。行き詰った彼は仕方なしに、一人の旧い
友達の所へ出掛けて行った。彼はその友達の大した金持でない事
を承知していた。しかし自分よりも少しは融通の利く地位にある
事も呑み込んでいた。友達は果して彼の請求を容れて、要るだけ
の金を彼の前に揃えてくれた。彼は早速それを外国で恩を受けた
人の許へ返しに行った。新らしく借りた友達へは月に十円ずつの
もと

割で成し崩しに取つてもらう事に極めた。

六十

こんな具合にして漸と東京に落付いた健三は、物質的に見た自分の、如何にも貧弱なのに気が付いた。それでも金力を離れた他^たの方面において自分が優者であるという自覚が絶えず彼の心に往來する間は幸福であつた。その自覚が遂に金の問題で色々に攪^かき乱されてくる時、彼は始めて反省した。平生何心なく身に着けて外へ出る黒木綿^{くろもめん}の紋付さえ、無能力の証拠のように思われ出した。

「この己おれをまた強請せびりに来る奴がいるんだから非道ひどい」

彼は最も質たちの悪いその種の代表者として島田の事を考えた。

今の自分がどの方角から眺めても島田より好いい社会的地位を占めてゐるのは明白な事実であつた。それが彼の虚栄心に少しの反響も与えないのもまた明白な事実であつた。昔し自分と呼び捨ずてにした人から今となつて鄭寧ていねいな挨拶あいさつを受けるのは、彼に取つて何の満足にもならなかつた。小遣こづかいの財源のように見込まれるのは、自分を貧乏人と見倣みなしている彼の立場から見て、腹が立つだけであつた。

彼は念のために姉の意見を訊たずねて見た。

「一体どの位困つてゐるんでしょうね、あの男は」

「そうさね。そう度々無心をいつて来るようじゃ、随分苦しいの
かも知れないね。だけど健ちゃんだつてそうそう他ひとにばかり貢みつ
いでいた日にや際限がないからね。いくら御金が取れたつて」

「御金がそんなに取れるように見えますか」

「だつて宅うちなんぞに比べれば、御前さん、御金がいくらでも取れ
る方じゃないか」

姉は自分の宅の活計くらしを標準にしていた。相変らず口数の多い彼
女は、比田ひだが月々貰もらうものを満足に持つて歸つた例ためしのない事や、
俸給の少ない割に交際費の要いる事や、宿直が多いので弁当代だけ
でも随分の額たかに上のぼる事や、毎月の不足はやつと盆暮の賞与で間に
合わせている事などを詳しく健三に話して聞かせた。

「その賞与だつて、そつくり私^{あたし}の手に渡してくれるんじゃないんだからね。だけど近頃じや私たち二人はまあ隠居見たようなもので、月々食料を彦^{ひこ}さんの方へ遣^やつて賄^{まか}なつてもらつてるんだから、少しは楽にならなけりやならない訳さ」

養子と經濟を別々にしながら一所の家^{うち}に住んでいた姉夫婦は、自分たちの搗^ついた餅^{もち}だの、自分たちの買った砂糖だのという特別な食^{くい}物^{もの}を有^もつていた。自分たちの所へ来た客に出す御馳走^{ごちそう}などもきつと自分たちの懷中から払う事になっているらしかつた。健三は殆^{ほと}んど考えの及ばないような眼付をして、極端に近い一種の個人主義の下に存在しているこの一家の經濟状態を眺めた。しかし主義も理窟も有たない姉にはまたこれほど自然な現象はなかつた

のである。

「健ちゃんなんざ、こんな真似まねをしなくつても済むんだから好いやあね。それに腕があるんだから、稼かせぎさいすりやいくらでも欲しいだけの御金おかねは取れるしさ」

彼女のいう事を黙もくつて聞きいていると、島田などはどこへ行つたか分わらなくなつてしまいがちであつた。それでも彼女は最後に付け加えた。

「まあ好いやね。面倒めんどくさ臭くさくなつたら、その内都合の好い時ときに上げましょうとか何とかいつて歸かへしてしまえば。それでも蒼蠅そうそういなら留守を御遣ごしんいよ。構かまう事はないから」

この注意は如何いかにも姉らしく健三の耳に響いた。

姉から要領を得られなかった彼はまた比田を捉^{つら}まえて同じ質問を掛けて見た。比田はただ、大丈夫というだけであつた。

「何しろ故^{もと}の通りあの地面と家作^{かさく}を有^もつてゐるんだから、そう困^こつていない事は慥^{たしか}でさあ。それに御藤さんの方へは御縫^{おぬい}さんの方からちゃんちゃんと送金はあるしさ。何でも好い加減な事をいつて来るに違^{ちが}ないから放^{はな}つて御置きなさい」

比田のいう事もやっぱ好い加減の範圍を脱^だし得^えない上^うつ調^{ちよう}子^しのものには相違^{ちが}なかつた。

六十一

しまいに健三は細君に向つた。

「一体どういふんだろう、今の島田の実際の境遇つていうのは。姉に訊いても比田に訊いても、本当の所が能く分らないが」

細君は気のなさそうに夫の顔を見上げた。彼女は産に間もない大きな腹を苦しそうに抱えて、朱塗しゆぬりの船底枕ふなぞこまくらの上に乱れた頭を載せていた。

「そんなに気になさるなら、御自分で直じかに調べて御覧になるが好いじゃありませんか。そうすればすぐ分るでしょう。御姉おあねさんだつて、今あの人と交際つきあつていらつしやらないんだから、そんな確たしかな事の知れているはずがないと思いますわ」

「己おれにはそんな暇なんかないよ」

「それじゃ放つて御置きになればそれまででしょう」

細君の返事には、男らしくもないという意味で、健三を非難する調子があつた。腹で思っている事でもそうむやみに口へ出していわない性質たちに出来上つた彼女は、自分の生家さとと夫との面白くない間柄についてさえ、余り言葉に現わしてつべこべ弁じ立てなかつた。自分と関係のない島田の事などはまるで知らないふりをして澄ましている日も少なくなかつた。彼女の持った心の鏡に映る神経質な夫の影は、いつも度胸のない偏へんくつ窟な男であつた。

「放つて置け？」

健三は反問した。細君は答えなかつた。

「今までだって放つて置いてるじゃないか」

細君はなお答えなかった。健三はぷいと立つて書斎へ入った。

島田の事に限らず二人の間にはこういう光景が能く繰り返された。その代り前後の関係で反対の場合も時には起った。――

「御縫さんが脊髄病せきずいびょうなんだそうだ」

「脊髄病じゃ六むずかしいでしょう」

「とても助かる見込はないんだとき。それで島田が心配しているんだ。あの人が死ぬと柴野しばのと御藤おふじさんとの縁が切れてしまうから、今まで毎月送ってくれた例の金が来なくなるかも知れないってね」

「可哀想かわいそうね今から脊髄病なんぞに雇かかつちや。まだ若いんでしょ

う」

「己おれより一つ上だって話したじゃないか」

「子供はあるの」

「何でも沢山あるような様子だ。幾人^{いくたり}だか能く訊^きいて見ないが」

細君は成人しない多くの子供を後へ遺して死^しに行^いく、まだ四十に充^みたない夫人の心持を想像に描いた。間近に逼^{せま}つたわが産の結果も新たに氣遣われ始めた。重^{おも}そうな腹を眼の前に見ながら、それほど心配もしてくれない男の氣分が、情^{なさけ}なくもありまた羨^{うらや}ましくもあつた。夫はまるで氣が付かなかつた。

「島田がそんな心配をするのも必^{ひつきよう}竟^{へいぜい}は平生^{へいぜい}が悪いからなん

だろうよ。何でも嫌われているらしいんだ。島田にいわせると、その柴野という男が酒^{さけ}食^けいで喧嘩^{けんか}早くつて、それで何時まで経つても出世が出来なくつて、仕方がないんだそうだけれども、

どうもそればかりじゃないらしい。やっぱり島田の方が愛想あいそを尽かされているに違いないんだ」

「愛想を尽かされなくたって、そんなに子供が沢山あつちやど
うする事も出来ないでしょう」

「そうさ。軍人だから大方己と同じように貧乏しているんだろう
よ」

「一体あの人はどうしてその御藤さんて人と——」

細君は少し躊躇ちゆうちよした。健三には意味が解らなかった。細君

はいい直した。

「どうしてその御藤さんて人と懇意になつたんでしょう」

御藤さんがまだ若い未亡びぼうじん人であつた頃、何かの用で扱あつかい所じよ

へ出なければならぬ事の起つた時、島田はそういう場所へ出つけない女一人を、氣の毒に思つて、色々親切に世話をして遣つたのが、二人の間に關係の付く始まりだと、健三は小さい時分に誰かから聴いて知つていた。しかし恋愛という意味をどう島田に応用して好いか、今の彼には解らなかつた。

「慾も手伝つたに違ないね」
よく

細君は何ともいわなかつた。

六十二

不治ふじの病氣に悩まされているという御縫さんについての報知たよりが

健三の心を和やわらげた。何年ぶりにも顔を合せた事のない彼とその人とは、度々会わなければならなかった昔でさえ、殆ほとんど親しく口を利いた例ためしがなかった。席に着くときも座を立つときも、大抵は黙礼を取り換わせるだけで済ましていた。もし交際という文字をこんな間柄にも使い得るならば、二人の交際は極めて淡くそうして軽いものであった。強烈な好い印象のない代りに、少しも不快の記憶に濁されていないその人の面影おもかげは、島田や御常のそれよりも、今の彼に取つて遥そそかに尊たつとかった。人類に対する慈愛の心を、硬くなりかけた彼から唆そそり得る点において。また漠然として散漫な人類を、比較的判明はつきりした一人の代表者に縮めてくれる点において。——彼は死のうとしているその人の姿を、同情の眼を開いて

遠くに眺めた。

それと共に彼の胸には一種の利害心が働いた。何時起るかも知れない御縫さんの死は、狡猾こうかつな島田にまた彼を強請せびる口実を与えるに違なかつた。明らかにそれを予想した彼は、出来る限りそれを避けたいと思つた。しかし彼はこの場合どうして避けるかの策略を講ずる男ではなかつた。

「衝突して破裂するまで行くより外に仕方がない」

彼はこう観念した。彼は手を拱こまぬいで島田の来るのを待ち受けた。その島田の来る前に突然彼の敵かたきの御常が訪ねて来きようとは、彼も思い掛けなかつた。

細君は何時もの通り書斎に坐すわっている彼の前に出て、「あの波は

多野^{たの}つて御婆^{おばあ}さんがとうとう遣^やつて来ましたよ」といった。彼は驚ろくよりもむしろ迷惑^{めいわく}そうな顔をした。細君にはその態度が愚図々々している臆^{おくびよう}病^{びよう}もののように見えた。

「御会いになりますか」

それは、会うなら会う、断るなら断る、早くどつちかに極^きめたら好かろうという言葉の遣^{つか}い方であつた。

「会うから上げろ」

彼は島田の来た時と同じ挨^{あい}拶^{さつ}をした。細君は重苦しうに身を起して奥へ立つた。

座敷へ出た時、彼は粗末な衣服を身に纏^{まと}つて、丸まっちく坐っている一人の婆さんを見た。彼の心で想像していた御常とは全く

変っているその質朴な風采ふうさいが、島田よりも遥かに強く彼を驚ろかした。

彼女の態度も島田に比べるとむしろ反対であつた。彼女はまるで身分の懸隔でもある人の前へ出たような様子で、鄭寧ていねいに頭を下げた。言葉遣も慇懃いんぎんを極めたものであつた。

健三は小供の時分よ能く聞かされた彼女の生家さとの話进行い出した。田舎いなにあつたその住居すまいも庭園も、彼女の叙述によると、善を尽し美を尽した立派なものであつた。床ゆかの下を水が縦横に流れているという特色が、彼女の何時でも繰り返す重要な点であつた。南なん天の柱——そういう言葉もまだ健三の耳に残っていた。しかし小さい健三はその宏こう大な屋敷がどこの田舎にあるのかまるで知

らなかつた。それから一度も其所へ連れて行かれた覚がなかつた。彼女自身も、健三の知っている限り、一度も自分の生れたその大きな家へ歸つた事がなかつた。彼女の性格を臍おぼろげ氣ながら見抜くように、彼の批評眼がだんだん肥こえて來た時、彼はそれもまた彼女の空想から出る例の法螺ほらではないかと考え出した。

健三は自分を出来るだけ富有に、上品に、そして善良に、見せたがつたその女と、今彼の前に畏かしこまつて坐っている白髪頭しらがあたまの御婆さんとを比較して、時間の齎もたらした対照に不思議そうな眼を注いだ。

御常は昔から肥ふとり肉じしの女であつた。今見る御常も依然として肥つていた。どつちかというと、昔よりも今の方がかえつて肥つて

いはしまいかと疑^{うたが}わ^われる位であつた。それにもかかわらず、彼女は全く変化していた。どこから見ても田舎育ちの御婆さんであつた。多少誇張していえば、籠^{かご}に入れた麦^{むぎ}焦^こしを背中^{むぎこ}へ脊^し負^よつて近在から出て来る御婆さんであつた。

六十三

「ああ変つた」

顔を見合せた刹^{せつ}那^なに双方は同じ事を一度に感じ合つた。けれどもわざわざ訪ねて来た御常の方には、この変化に対する予期と準備が充分にあつた。ところが健三にはそれが殆^{ほと}んど欠けていた。

従つて不意に打たれたものは客よりもむしろ主人であつた。それでも健三は大して驚ろいた様子を見せなかつた。彼の性質が彼にそうしろと命令する外に、彼は御常の技巧から溢れ出る戯曲的動作を恐れた。今更この女の遣る芝居を事新らしく観せられるのは、彼に取つて堪えがたい苦痛であつた。なるべくなら彼は先方の弱点を未然に防ぎたかつた。それは彼女のためでもあり、また自分のためでもあつた。

彼は彼女から今までの経歴をあらまし聞き取つた。その間には人世と切り離す事の出来ない多少の不幸が相応に纏綿していらしく見えた。

島田と別れてから二度目に嫁づいた波多野と彼女との間にも子

が生れなかつたので、二人は或所から養女を貰^{もら}つて、それを育てる事にした。波多野が死んで何年目にか、あるいはまだ生きてゐる時分にか、それは御常もいわなかつたが、その貰い娘に養子が来たのである。

養子の商売は酒屋であつた。店は東京のうちでも随分繁華な所にあつた。どの位な程度の活計^{くわし}をしていたものか能く分らないが、困つたとか、窮したとかいう弱い言葉は御常の口を洩^もれなかつた。その内養子が戦争に出て死んだので、女だけでは店が持ち切れなくなつた。親子はやむをえずそれを畳んで、郊外近くに住んでゐる或身縁^{みより}を頼りに、ずっと辺鄙^{へんぴ}な所へ引越した。其^{そこ}所で娘に二度目の夫が出来るまでは、死んだ養子の遺族へ毎^{まい}年^{ねん}下がる扶助

料だけで活計くらしを立てて行つた。……

御常の物語りは健三の予期に反してむしろ平静であつた。誇張した身ぶりだの、仰山な言葉遣だの、当込あてこみの台詞せりふだのは、それほど多く出て来なかつた。それにもかかわらず彼は自分とこの御婆おばあさんの間に、少しの氣脈も通じていない事に氣が付いた。

「ああそうですか、それはどうも」

健三の挨拶あいさつは簡単であつた。普通の受答えとしても短過ぎるこの一句を彼女に与えたぎりで、彼は別段物足りなさを感じ得なかつた。

「昔の因果が今でもやっぱり崇たつてゐるんだ」

こう思つた彼はさすがに好い心持がしなかつた。どつちかとい

うと泣きたがらない質たちに生れながら、時々は何故なぜ本当に泣ける人や、泣ける場合が、自分の前に出て来てくれないのかと考えるのが彼の持前であつた。

「己おれの眼は何時でも涙が湧わいて出るように出来ているのに」

彼は丸まっちくなくなつて座蒲団ざぶとんの上に坐すわつてゐる御婆さんの姿を熟視した。そうして自分の眼に涙を宿す事を許さない彼女の性格を悲しく観じた。

彼は紙入の中にあつた五円紙幣を出して彼女の前に置いた。

「失礼ですが、車へでも乗つて御帰り下さい」

彼女はそういう意味で訪問したのではないといつて一応辞退した上、健三からの贈りものを受け納めた。気の毒な事に、その贈

り物の中には、疎い同情が入っているだけで、露わな真心は籠つていなかった。彼女はそれを能く承知しているように見えた。そうして何時の間にか離れ離れになった人間の心と心は、今更取り返しの付かないものだから、諦めるより外に仕方がないという風にふるまった。彼は玄関に立って、御常の帰って行く後姿を見送った。

「もしあの憐な御婆さんが善人であつたなら、私は泣く事が出来たろう。泣けないまでも、相手の心をもっと満足させる事が出来たろう。零落した昔しの養い親を引き取って死水を取って遣る事も出来たろう」

黙ってこう考えた健三の腹の中は誰も知る者がなかった。

六十四

「とうとう遣^やつて来たのね、御婆^{おばあ}さんも。今までは御爺^{おじい}さんだけだつたのが、御爺さんと御婆さんと二人になつたのね。これから^{ふたあり}は二人に崇^{たた}られるんですよ、貴夫^{あなた}は」

細君の言葉は珍らしく乾^{はしや}燥いでいた。笑^{じょうだん}談とも付かず、冷^ひやかし評とも付かないその態度が、感想に沈んだ健三の気分を不快に刺戟^{しげき}した。彼は何とも答えなかつた。

「またあの事をいったでしよう」

細君は同じ調子で健三に訊^きいた。

「あの事は何だい」

「貴夫が小さいうちねしようべん 寐小便をして、あの御婆さんを困らしたつて事よ」

健三は苦笑さえしなかった。

けれども彼の腹の中には、御常が何故なぜそれをいわなかったかの疑問が既に横よこたわつていた。彼女の名前を聞いた刹那せつなの健三は、すぐその弁口べんぐちに思い到いたつた位、御常は能く喋しゃべ舌る女であつた。ことに自分を護まもる事に巧みな技倆ぎりようを有もつていた。他の口車くちやに乗せられやすい、また見え透いた御世辞おせじを嬉うれしがりがちな健三の実父は、何時でも彼女を賞ほめる事を忘れなかつた。

「感心な女だよ。だいち身しんしようもち上持がが好いからな」

島田の家庭に風波の起った時、彼女はあんなだけの言葉を父の前に並べ立てた。そうしてその言葉の上にまた悲しい涙と口惜くやしい涙とを多量に振り掛けた。父は全く感動した。すぐ彼女の味方になつてしまつた。

御世辞が上手だという点において健三の父は彼の姉をも大変可愛あがつていた。無心に来られるたんびに、「そうそうは己おれだつて困るよ」とか何とかいいながら、いつか入用いりようだけの金子きんすは手文庫から取出されていた。

「比田はあんな奴だが、御夏が可愛かわいそう想だから」

姉の帰つた後で、父は何時でも弁解らしい言葉を傍はたのものに聞こえるようにいつた。

しかしこれほど父を自由にした姉の口先は、御常に比べると遙かに下手へたであつた。真まことしやかという点において遠く及ばなかつた。實際十六、七になつた時の健三は、彼女と接触した自分以外のもので、果してその性格を見抜いたものが何人あるだろうか、一時疑つて見た位、彼女の口は旨うまかつた。

彼女に会うときの健三が、心中迷惑を感じたのは大部分この口にあつた。

「御前を育てたものはこの私わたしだよ」

この一句を二時間でも三時間でも布ふ衍えんして、幼少の時分恩になつた記憶をまた新らしく復習させられるのかと思うと、彼は辟へきえ易きした。

「島田は御前の敵かたきだよ」

彼女は自分の頭の中に残っているこの古い主観を、活動写真のように誇張して、また彼の前に露さらけ出すに極きまっていた。彼はそれにも辟易へきえきしない訳に行かなかった。

どっちを聴くにしても涙が交まじるに違なかつた。彼は裝飾的に使用されるその涙を見るに堪えないような心持がした。彼女は話す時に姉のような大きな声を出す女ではなかつた。けれども自分の必要と思う場合には、その言葉に厭いやらしい強い力を入れた。円えんち

朝ようの人情にんじようばなし 漸だまに出て来る女が、長い火箸ひばしを灰の中に突き刺し突き刺し、他ひとに騙だまされた恨うらみを述べて、相手を困らせるのと同様

同じ態度でまた同じ口調であつた。

彼の予期が外れた時、彼はそれを仕合せと考えるよりもむしろ不思議に思う位、御常の性格が牢ろうとして崩すべからざる判明はつきりした一種の型になって、彼の頭のどこかに入っていたのである。

細君は彼のために説明した。

「三十年近くにもなる古い事じゃありませんか。向うだつて今となりや少しは遠慮があるでしょう。それに大抵の人はもう忘れてしまいまさあね。それから人間の性質だつて長い間には少しずつ変つて行きますからね」

遠慮、忘却、性質の変化、それらのものを前に並べて考えて見ても、健三には少しも合点がてんが行かなかつた。

「そんな淡泊あっさりした女じゃない」

彼は腹の中でこういわなければどうしても承知が出来なかつた。

六十五

御常を知らない細君はかえつて夫の執拗しつおうを笑つた。

「それが貴方あなたの癖だから仕方がない」

平生へいぜい彼女の眼に映る健三の一部分はたしかにこうなのであつた。ことに彼と自分の生家さととの關係について、夫のこの悪い癖へきが著るしく出ているように彼女は思つていた。

「己おれが執拗なのじゃない、あの女が執拗なのだ。あの女と交際つきあつた事のない御前には、己の批評の正しさ加減が解らないからそん

なあべこべをいうのだ」

「だって現に貴夫あなたの考えていた女とはまるで違つた人になつて貴夫の前へ出て来た以上は、貴夫の方で昔の考えを取り消すのが当然じゃありませんか」

「本当に違つた人になつたのなら何時でも取り消すが、そうじゃないんだ。違つたのは上部うわべだけで腹の中は故もとの通りなんだ」

「それがどうして分るの。新しい材料も何にもないのに」
「御前に分らないでも己にはちゃんと分つてるよ」

「随分独断的ね、貴夫も」

「批評が中あたつてさえいれば独断的で一向差さしつかえ支だいふないものだ」

「しかしもし中あたつていなければ迷惑する人が大分出だいふて来るでしょ

う。あの御婆おばあさんは私わたくしと関係のない人だから、どうでも構いませ
んけれども」

健三には細君の言葉が何を意味しているのか能く解よった。しか
し細君はそれ以上何もいわなかった。腹の中で自分の父母兄弟を
弁護べんごしている彼女は、表おもてむき向夫と遣り合やつて行ける所まで行く
気はなかった。彼女は理智に富たんだ性質ちではなかった。

「面倒臭めんどくさい」

少し込み入った議論の筋道たどを辿らなければならなくなると、彼
女はきつとこういつて当面の問題を投げた。そうして解決を付け
るまで進まないために起る面倒臭さは何時までも辛抱した。しか
しその辛抱は自分自身に取って決して快よいものではなかった。

健三から見るとなおさら心持が悪かった。

「執拗しつおうだ」

「執拗だ」

二人は両方で同じ非難の言葉を御互の上に投げかけ合った。そうして御互に腹の中にある蟠わだかまりを御互の素振そぶりから能く読んだ。しかもその非難に理由のある事もまた御互に認め合わなければならなかった。

我慢な健三は遂に細君の生家へ行かなくなった。何故行かないとも訊きかず、また時々行ってくれとも頼まずにただ黙っていた細君は、依然として「面倒臭い」を心の中うちに繰り返すぎりで、少しもその態度を改めようとしなかった。

「これで沢山だ」

「己もこれで沢山だ」

また同じ言葉が双方の胸のうちでしばしば繰り返された。

それでも護謨紐ゴムひものように弾力性のある二人の間柄には、時によ

り日によつて多少の伸縮のびちぢみがあつた。非常に緊張して何時切れ

るか分らないほどに行き詰つたかと思うと、それがまた自然の勢

で徐々そろそろ元へ戻つて来た。そうした日和ひよりの好い精神状態が少し継

続すると、細君の唇から暖かい言葉が洩もれた。

「これは誰の子？」

健三の手を握つて、自分の腹の上に載せた細君は、彼にこんな問を掛けたりした。その頃細君の腹はまだ今のように大きくはな

かった。しかし彼女はこの時既に自分の胎内に蠢めき掛けていた生の脈搏みやくはくを感じ始めたので、その微動を同情のある夫の指頭しとうに伝えようとしたのである。

「喧嘩けんかをするのはつまり両方が悪いからですね」

彼女はこんな事もいった。それほど自分が悪いと思っていない頑固がんこな健三も、微笑するより外に仕方がなかった。

「離れればいくら親しくつてもそれぎりになる代りに、一所にさえすれば、たとい敵同志かたきでもどうにかこうにかなるものだ。つまりそれが人間なんだろう」

健三は立派な哲理でも考え出したように首を捻ひねった。

六十六

御常や島田の事以外に、兄と姉の消息も折々健三の耳に入つた。
毎年まいとし時候が寒くなるときつと身体からだに故障の起る兄は、秋口から
また風邪かぜを引いて一週間ほど局を休んだ揚句、気分が悪いのを押
して出勤した結果、幾日いくか経つても熱とが除れないで苦しんでいた。
「つい無理をするもんだから」

無理をして月給の寿命を長くするか、養生をして免職の時期を
早めるか、彼には二つの内どっちかをえらぶより外に仕方がないよ
うに見えたのである。

「どうも肋膜ろくまくらしいっていうんだがね」

彼は心細い顔をした。彼は死を恐れた。肉の消滅について何^{なんび}人^とよりも強い畏怖^{いふ}の念を抱^{いだ}いていた。そうして何人よりも強い速度で、その肉塊を減らして行かなければならなかった。

健三は細君に向つていった。――

「もう少し平気で休んでいられないものかな。責^せめて熱^なの失^なくなるまでも好^いいから」

「そうしたいのは山々なんでしょうけれども、ヤツぱりそうは出来ないでしょう」

健三は時々兄が死んだあとの家族を、ただ活計^{くらし}の方面からのみ眺める事があつた。彼はそれを残酷ながら自然の眺め方として許していた。同時にそういう觀察から逃^{のが}れる事の出来ない自分に対

して一種の不快を感じた。彼は苦い塩を嘗^なめた。

「死にやしまいな」

「まさか」

細君は取り合わなかった。彼女はただ自分の大きな腹を持て余してばかりいた。生家^{さと}と縁故のある産婆が、遠い所から俚^{くるま}に乗つて時々遣^{やっ}て来た。彼はその産婆が何をしに来て、また何をして歸つて行くのか全く知らなかった。

「腹でも揉^もむのかい」

「まあそうです」

細君ははかばかしい返事さえしなかった。

その内兄の熱がころりと除^とれた。

「御祈禱ごきとうをなすつたんですつて」

迷信家の細君は加持かじ、祈禱、占い、神信心かみしんじん、大抵の事を好いていた。

「御前が勧めたんだろう」

「いいえそれが私わたくしなんぞの知らない妙な御祈禱なのよ。何でも髪かみ剃みそりを頭の上へ載せて遣るんですつて」

健三には髪剃の御蔭で、しこじらした体熱が除れようとも思えなかった。

「気のせいで熱が出るんだから、気のせいでそれがまた直除すぐれるんだらうよ。髪剃でなくつたつて、杓子しゃくしでも鍋蓋なべぶたでも同じ事さ」

「しかしいくら御医者の薬を飲んでも癒なおらないもんだから、試しに遣つて見たらどうだろうって勧められて、とうとう遣る氣になつたんですって、どうせ高い御祈祷代を払つたんじやないんですよ」

健三は腹の中で兄を馬鹿だと思つた。また熱の除れるまで薬を飲む事の出来ない彼の内状を氣の毒に思つた。髮剃の御蔭でも何でも熱が除れさえすればまず仕合せだとも思つた。

兄が癒ると共に姉がまた喘ぜんそく息で悩み出した。

「またかい」

健三は我知らずこういつて、ふと女房の持病を苦しめない比田の様子を想い浮べた。

「しかし今度は何時こんだもより重いんですつて。ことによると六むずかしいかも知れないから、健三に見舞に行くようにそういつてくれおっしつて仰おやいました」

兄の注意を健三に伝えた細君は、重苦しそうに自分の尻しりを畳の上に着けた。

「少し立っていると御腹おなかの具合が変になって来て仕方がないんです。手なんぞ延ばして棚に載っているものなんかとても取れやしません」

産せまが逼るほど妊婦は運動すべきものだ位に考えていた健三は意外な顔をした。下腹部ほかだの腰の周囲の感じがどんなに退儀であるかは全く彼の想像の外ほかにあった。彼は活動を強しいる勇氣も自信も

失なつた。

「私とても御見舞には参れませんか」

「無論御前は行かなくつても好い。己が行くから」

六十七

その頃の健三は宅へ帰ると甚しい倦怠を感じた。ただ仕事をした結果とばかりは考えられないこの疲労が、一層彼を出不精にした。彼はよく昼寐をした。机に倚つて書物を眼の前に開けている時ですら、睡魔に襲われる事がしばしばあつた。愕然として仮寐の夢から覚めた時、失われた時間を取り返さなければならな

いという感じが一層強く彼を刺撃しげきした。彼は遂に机の前を離れる事が出来なくなつた。括りくく付けられた人のように書斎に凝じつとしていた。彼の良心はいくら勉強が出来なくつても、いくら愚図々々していても、そういう風に凝すわと坐つていろと彼に命令するのである。

かくして四、五日は徒らいたずに過ぎた。健三が漸く津つの守坂かみざかへ出掛けた時は六むずかしいかも知れないといった姉が、もう回復期に向つていた。

「まあ結構です」

彼は尋常の挨拶あいさつをした。けれども腹の中では狐きつねにでも抓つままれたような気がした。

「ああ、でも御蔭さまでね。——姉さんなんざあ、生きていたつてどうせ他の厄介になるばかりで何の役にも立たないんだから、好い加減な時分に死ぬと丁度好いんだけれども、やっぱり持つて生れた寿命だと見えてこればかりは仕方がない」

姉は自分のいう裏を健三から聴きたい様子であつた。しかし彼は黙つて烟草タバコを吹かしていた。こんな些細ささいの点にも姉きようだい弟の氣風の相違は現われた。

「でも比田のいるうちは、いくら病身でも無能やぐざでも私あたしが生きていて遣やらないと困るからね」

親類は亭主孝行という名で姉を評し合つていた。それは女房の心尽しなどに対して余りに無頓着むとんじやく過ぎる比田を一方に置いてこ

の姉の態度を見ると、むしろ氣の毒な位親切だったからである。

「あたし私や本当に損な生れ付でね。良人うちとはまるであべこべなんだか

ら」

姉の夫思いは全く天性に違なかつた。けれども比田が時として

理の徹とおらない我儘わがままをいい募るように、彼女は訳の解らない実じつ

意立だてをしてかえつて夫を厭いやがらせる事があつた。それに彼女は

縫針ぬいはりの道を心得ていなかつた。手習てならひをさせても遊芸を仕込ん

でも何一つ覚える事の出来なかつた彼女は、嫁に来てから今日こんにち

まで、ついぞ夫の着物一枚縫ぬつた例ためしがなかつた。それでいて彼女

は人一倍勝気な女であつた。子供の時分強情を張つた罰として土

蔵の中に押し込められた時、小用こように行きたいから是非出してくれ、

もし出さなければ倉の中で用を足すが好いかと行って、網戸の内^{うち}外^{そと}で母と論判をした話はいまだに健三の耳に残っていた。

そう思うと自分とは大変懸け隔ったようであり、その実どこか似通った所のあるこの腹^{はらちがい}違^{ちが}ひの姉の前に、彼は反省を強^しいられた。

「姉はただ露骨なだけなんだ。教育の皮を剥^むけば己^{おれ}だつて大した変りはないんだ」

平^{へい}生^{ぜい}の彼は教育の力を信じ過ぎていた。今の彼はその教育の力でどうする事も出来ない野生的な自分の存在を明らかに認めた。かく事実の上において突然人間を平等^みに視^みた彼は、不斷から輕^{けい}蔑^べしていた姉に対して多少極^{きま}りの悪い思をしなければならなか

った。しかし姉は何にも気が付かなかつた。

「御住^{おすみ}さんはどうです。もう直^{じき}生れるんだらう」

「ええ落^{おっ}こちそうな腹をして苦しがつています」

「御産は苦しいもんだからね。私^{あたし}も覺があるが」

久しく不妊性と思われていた姉は、片付いて何年目かになって始めて一人の男の子を生んだ。年^{とし}齒を取つてからの初^{ういざん}産だつたので、当人も傍^{はた}のものも大分^{だいぶん}心配した割に、それほどの危険もなく胎児を分^{ぶん}娩^{べん}したが、その子はすぐ死んでしまった。

「輕はずみをしないように用心おしよ。——宅でも彼^あ子^れがいると少しは依^{たより}怙になるんだがね」

六十八

姉の言葉には昔し亡くしたわが子に対する思い出の外に、今の養子に飽き足らない意味も含まれていた。

「彦ちゃんがもう少し確しつかり乎ひしていてくれると好いんだだけでも」

彼女は時々傍はたのものにこんな述懐を洩もらした。彦ちゃんは彼女の予期するような大した働き手でないにせよ、至極しごく穏やかな好人物であつた。朝っぱらから酒を飲まなくっちゃいられない人だという噂うわさを耳にした事はあるが、その他たの点について深い交渉を有もたない健三には、どこが不足なのか能く解よらなかつた。

「もう少し御金を取ってくれると好いんだけどね」

無論彦ちゃんは養父母を樂に養えるだけの収入を得ていなかった。しかし比田も姉も彼を育てた時の事を思えば、今更そんな贅ぜいたく沢のいえた義理でもなかった。彼らは彦ちゃんをどこの学校へも入れて遣やらなかつた。僅わずかばかりでも彼が月給を取るようになってしたのは、養父母に取つてむしろ僥ぎよう倖かうといわなければならなかつた。健三は姉の不平に対して眼に見えるほどの注意を払いかねた。昔し死んだ赤ん坊については、なおの事同情が起らなかつた。彼はその生いき顔がおを見た事がなかつた。その死し顔がおも知らなかつた。名前さえ忘れてしまった。

「何とかいいましたね、あの子は」

「作さく太郎たろうさ。あすこに位牌いはいがあるよ」

姉は健三のために茶の間の壁を切り抜いて拵こしらえた小さい仏壇を指し示した。薄暗いばかりでなく小汚こぎたないその中には先祖からの位牌が五つ六つ並んでいた。

「あの小さい奴がそうですか」

「ああ、赤ん坊のだからね、わざと小さく拵こしらえたんだよ」

立つて行つて戒かいみよう名なを読む気にもならなかった健三は、やは

り故もとの所すわに坐すわつたまま、黒塗くろぬりの上に金字で書いた小形の札のよ

うなものを遠くから眺めていた。

彼の顔には何の表情もなかった。自分の二番目の娘が赤痢かかに罹かかつて、もう少しで命を奪とられるところだった時の心配と苦痛さえ聯想れんそうし得なかつた。

「姉さんもこんなじや何時あなるか分らないよ、健ちゃん」

彼女は仏壇から眼を放して健三を見た。健三はわざとその視線を避けた。

心細い事を口にしながら腹の中では決して死ぬと思っていない彼女のいい草には、世間並の年寄と少し趣を異にしている所があった。慢性の病気が何時までも継続するように、慢性の寿命がまた何時までも継続するだろうと彼女には見えたのである。

そこ其所へ彼女の癩^{かんしょう}性が手伝った。彼女はどんなに氣息苦しく

つても、いくら他^{ひと}から忠告されても、どうしても居^いながら用を足

そうといわなかった。這^はうようにしてでも廁^{かわや}まで行つた。それか

ら子供の時から習慣で、朝はきつと肌^{はだぬぎ}拔^はになつて手^{ちようず}水^{つか}を遣

った。寒い風が吹こうが冷たい雨が降ろうが決してやめなかった。
「そんな心細い事をいわずに、出来るだけ養生をしたら好いでしよう」

「養生はしているよ。健ちゃんから貰^{もら}う御小遣の中で牛乳だけはきつと飲む事に極^きめているんだから」

田舎^{いなか}ものが米の飯を食うように、彼女は牛乳を飲むのが凡^{すべ}ての

養生でもあるかのような事をいった。日に日に損なわれて行くわが健康を意識しつつ、この姉に養生を勧める健三の心の中^{うち}にも、

「他^{ひとごと}事じゃない」という馬鹿らしさが遠くに働^{はたら}いていた。

「私^{わたし}も近頃は具合が悪くつてね。ことによると貴方^{あなた}より早く位牌

になるかも知れませんか」

彼の言葉は無論根のない笑談じょうだんとして姉の耳に響いた。彼もそれを承知の上でわざと笑った。しかし自ら健康を損みいつつあると確たしかに心得ながら、それをどうする事も出来ない境遇に置かれた彼は、姉よりもかえって自分の方を憐あわれんだ。

「己のは黙って成し崩しに自殺するのだ。気の毒だといってくれるものは一人もありやしない」

彼はそう思つて姉の凹くぼみ込んだ眼と、瘦こけた頬ほと、肉のない細い手とを、微笑しながら見ていた。

六十九

姉は細かい所に気の付く女であつた。従つて細かい事にまでよく好奇心を働らかせたがつた。一面において馬鹿正直な彼女は、一面においてまた変な廻りまわりぎ氣を出す癖を有つていた。

健三が外国から歸つて来た時、彼女は自家の生計について、他の同情に訴え得るような憐れあわつぽい事實を彼の前に並べた。しまいに兄の口を借りて、いくらでも好いから月々自分の小遣として送つてくれまいかという依頼を持ち出した。健三は身分相応な額を定めた上、また兄の手を経て先方へその旨を通知してもらう事にした。すると姉から手紙が来た。長ちさんようの話では御前さんが月々いくらくわたしから私に遣やるといふ事だが、實際御前さんの、呉れるといつた金かね高たかはどの位なのか、長さんに内ない所しょでちよつと知ら

せてくれないかと書いてあつた。姉はこれから毎月中取次なかとりつきをす
る役に当るかも知れない兄の心事を疑ぐつたのである。

健三は馬鹿々々しく思つた。腹立しくも感じた。しかし何より
先に浅間あさましかつた。「黙っている」と怒鳴り付けて遣りたくなつ
た。彼の姉に宛あてた返事は、一枚の端書に過ぎなかつたけれども、
こうした彼の気分を能く現よわしていた。姉はそれぎり何ともいつ
て来なかつた。無筆むひつな彼女は最初の手紙さえ他に頼んで書いても
らつたのである。

この出来事が健三に対する姉を前よりは一層遠慮がちにした。
何でも蚊でも訊ききたがる彼女も、健三の家庭については、当り障
りのない事の外、多く口を開かなかつた。健三も自分ら夫婦の間

柄を彼女の前で問題にしようなどとはかつて想い^{いた}到らなかった。

「近頃御住さんはどうだい」

「まあ相変らずです」

会話はこの位で切り上げられる場合が多かった。

間接に細君の病氣を知っている姉の質問には、好奇心以外に、

親切から来る懸念も大分^{だいぶん}交^{まじ}っていた。しかしその懸念は健三に取

って何の役にも立たなかった。従って彼女の眼に見える健三は、

何時も親^{さみ}しみがたい無^ぶ愛^{あい}想^{そう}な変人に過ぎなかった。

淋^{さみ}しい心持で、姉の家を出た健三は、足に任せて北へ北へと歩

いて行^いった。そうしてついぞ見た事もない新開地のような汚ない、

町の中へ入^いった。東京で生れた彼は方角の上において、自分の今

踏んでゐる場所を能く弁えていた。わきまけれども其所そこには彼の追憶を誘う何物も残つていなかった。いざな過去の記念が悉く彼の眼から奪われてしまった大地の上を、彼は不思議そうに歩いた。

彼は昔あつた青田と、その青田の間を走る真直な径まっすぐ こみちを思い出した。田の尽る所には三、四軒の藁葺屋根わらぶきやねが見えた。菅笠すががさを脱いで床几しょうぎに腰を掛けながら、心太ところてんを食っている男の姿などが眼に浮んだ。前には野原のように広い紙漉場かみすきばがあつた。其所を折れ曲つて町つづきへ出ると、狭い川に橋が懸つていた。川の左右は高い石垣で積み上げられているので、上から見下す水の流れには存外の距離があつた。橋の袂たもとにある古風な銭湯の暖簾のれんや、その隣の八百屋やおやの店先に並んでゐる唐茄子とうなすなどが、若い時の健三

によく広重ひろしげの風景画を聯想れんそうさせた。

しかし今では凡てすべのものが夢のように悉く消え失せていた。残っているのはただ大地ばかりであつた。

「何時こんなに變つたんだろう」

人間の変つて行く事にのみ氣を取られていた健三は、それよりも一層劇はげしい自然の變り方に驚ろかされた。

彼は子供の時分比田ひだと将棋を差した事を偶然思ひ出した。比田は盤に向うと、これでも所ところざわ沢とうきちの藤吉さんの御弟子だからなというのが癖であつた。今の比田も将棋盤を前に置けば、きつと同じ事をいいそうな男であつた。

「己おれ自身は必ひっきよう竟おれどうなるのだろう」

衰ろえるだけで案外変らない人間のさまと、変るけれども日に栄えて行く郊外の様子とが、健三に思いがけない対照の材料を与えた時、彼は考えない訳に行かなかった。

七十

元氣のない顔をして宅へ帰^{うち}つて来た彼の様子がすぐ細君の注意を惹^ひいた。

「御病人はどうなの」

あるゆる人間が何時か一度は到着しなければならぬ最後の運命を、彼女は健三の口から判^{はつきり}然聞こうとするように見えた。健

三は答を与える先に、まず一種の矛盾を意識した。

「何もう好いんだ。寐ねてはいるが危篤きとくでも何でもないんだ。まあ兄貴に騙だまされたようなものだね」

馬鹿らしいという気が幾分か彼の口振くちぶりに出た。

「騙されてもその方がいくらか好いか知れやしませんわ、貴夫あなたもしもの事でもあつて御覧なさい、それこそ……」

「兄貴が悪いんじゃない。兄貴は姉に騙されたんだから。その姉はまた病気に騙されたんだ。つまり皆な騙されているようなものさ、世の中は。一番利口なのは比田かも知れないよ。いくら女房が煩らつたつて、決して騙されないんだからね」

「やっぱり宅にいないの」

「いるもんか。もつと尤も非道く悪かった時はどうか知らないが」

健三は比田の振下ぶらさげている金時計と金鎖の事を思い出した。兄

はそれを天麩てんぷら羅だろうといつて陰で評していたが、当人はどこま

でも本物らしく見せびらかしたがつた。金着きんぎせにせよ、本物にせ

よ、彼がどこでいくらで買ったのか知るものは誰もなかった。こ

ういう点に掛けては無頓着むとんじやくでいられない性分の姉も、ただ好い

加減にその出処を推察するに過ぎなかった。

「月賦で買ったに違ないよ」

「ことによると質の流れかも知れない」

姉は聴かれもしないのに、兄に向つて色々な説明をした。健三には殆ど問題ほとんにならない事が、彼らの間に想像の種を幾個いくつでも卸

した。そうされればされるほどまた比田は得意らしく見えた。健三が毎月送る小遣さえ時々借りられてしまいうくせに、姉はついに夫の手元に入る、または現在手元にある、金高きんだかを決して知る事が出来なかった。

「近頃は何でも債券を二、三枚持っているようだよ」

姉の言葉はまるで隣の宅の財産でもいい中あでてるように夫から遠ざかっていた。

姉をこういう地位に立たせて平気でいる比田は、健三から見ると領解しがたい人間に違なかった。それがやむをえない夫婦関係のように心得て辛抱している姉自身も健三には分らなかった。しかし金銭上あくまで秘密主義を守りながら、時々姉の予期に釣り

合わないようなものを買ひ込んだり着込んだりして、妄みだりに彼女を驚ろかせたがる料りようけん簡に至つては想像さえ及ばなかつた。妻に対する虚栄心の発現、焦じらされながらも夫を腕利うでいきと思う妻の満足。——この二つのものだけでは到底充分な説明にならなかつた。

「金の要いる時も他人、病氣の時も他人、それじやただ一いっしょ所にいるだけじやないか」

健三の謎なぞは容易に解けなかつた。考える事の嫌きらいな細君はまた何という評も加えなかつた。

「しかし己おれたち夫婦も世間から見れば随分變つてゐるんだから、そひとう他の事ばかりとやかくいっちゃいられないかも知れない」

「やっぱり同なじ事ですわ。みんな自分だけは好いと思ってるんだから」

健三はすぐ癩しやくに障った。

「御前でも自分じや好いつもりでいるのかい」

「いますとも。貴夫あなたが好いと思つていらつしやる通りに」

彼らの争いは能くよこういう所から起つた。そうして折角穩やかに静まつている双方の心を攪かき乱した。健三はそれを慎みの足りない細君の責せめに歸した。細君はまた偏窟で強情な夫のせいだとばかり解釈した。

「字が書けなくつても、裁縫しごとが出来なくつても、やっぱり姉のよ
うな亭主孝行な女の方が己は好きだ」

「今時そんな女がどこの国にいるもんですか」

細君の言葉の奥には、男ほど手前勝手なものはないという大きな反感が横よこわつていた。

七十一

筋道の通った頭を有もっていない彼女には存外新しい点があった。彼女は形式的な昔風の倫理観に囚とらわれるほど嚴重な家庭に人とならなかつた。政治家を以て任じていた彼女の父は、教育に關ほとして殆んど無定見であつた。母はまた普通の女のように八釜やかましく子供を育て上る性質たちでなかつた。彼女は宅うちにいて比較的自由な空

気を呼吸した。そうして学校は小学校を卒業しただけであつた。彼女は考えなかつた。けれども考えた結果を野性的に能く感じ^よていた。

「単に夫という名前が付いているからというだけの意味で、その人を尊敬しなくてはならないと強^しいられても自分には出来ない。もし尊敬を受けたければ、受けられるだけの実質を有つた人間になつて自分の前に出て来るが好^いい。夫という肩書などはなくつても構わないから」

不思議にも学問をした健三の方はこの点においてかえつて旧式であつた。自分は自分のために生きて行かなければならないという主義を實現したがりながら、夫のためにのみ存在する妻を最初

から仮定して憚はばからなかった。

「あらゆる意味から見て、妻は夫に従属すべきものだ」

二人が衝突する大根おおねは此所ここにあった。

夫と独立した自己の存在を主張しようとする細君を見ると健三はすぐ不快を感じた。ややともすると、「女のくせに」という氣になった。それが一段劇はげしくなると忽ちたちま「何を生意氣な」という言葉に変化した。細君の腹には「いくら女だつて」という挨拶あいさつが何時でも貯たくわえてあつた。

「いくら女だつて、そう踏み付にされて堪たまるものか」

健三は時として細君の顔に出るこれだけの表情を明かに読んだ。「女だから馬鹿にするのではない。馬鹿だから馬鹿にするのだ、

尊敬されたければ尊敬されるだけの人格を^{こしら}えたるがいい」

健三の論理^{ロジック}は何時の間にか、細君が彼に向つて投げる論理^{ロジック}と同じものになつてしまつた。

彼らはかくして円い輪^{まる}の上をぐるぐる廻つて歩いた。そうしていくら疲れても気が付かなかつた。

健三はその輪の上にはたりと立ち留^{どま}る事があつた。彼の留る時は彼の激昂^{げつこう}が静まる時に外ならなかつた。細君はその輪の上でふと動かなくなる事があつた。しかし細君の動かなくなる時は彼女の沈滞が融^とけ出す時に限つていた。その時健三は漸^{ようや}く怒号をやめた。細君は始めて口を利き出した。二人は手を携えて談笑しながら、やはり円い輪の上を離れる訳に行かなかつた。

細君が産をする十日ばかり前に、彼女の父が突然健三を訪問した。あいにく生憎留守だった彼は、夕暮に帰ってから細君にその話を聞いて首を傾むけた。

「何か用でもあつたのかい」

「ええ少し御話したい事があるんですって」

「何だい」

細君は答えなかった。

「知らないのかい」

「ええ。また二、三日うちに上あがつて能く御話をするからって帰りましたから、今度参しかつたら直に聞いて下さい」

健三はそれより以上何もいう事が出来なかった。

久しく細君の父を訪ねないでいた彼は、用事のあるなしにかかわらず、向うがわざわざこつちへ出掛けて来ようなどとは夢にも予期しなかった。その不審が例より彼の口数を多くする原因になった。それとは反対に細君の言葉はかえって常よりも少なかった。しかしそれは彼がよく彼女において発見する不平や無愛嬌から来る寡言とも違っていた。

夜は何時の間にやら全くの冬に変化していた。細い燈火の影を凝と見詰めていると、灯は動かないで風の音だけが烈しく雨戸に当たった。ひゅうひゅうと樹木の鳴るなかに、夫婦は静かな洋燈を間に置いて、しばらく森と坐っていた。

七十二

「今日父が来ました時、きよう外套がいとうがなくつて寒そうでしたから、貴あ方なたの古いのを出して遣やりました」

田舎いなかの洋服屋こしらで拵こしらえたその二重廻にじゅうまわしは、殆ほとんど健三の記憶から消えかかっている位古かった。細君がどうしてまたそれを彼女の父に与えたものか、健三には理解出来なかった。

「あんな汚きたならしいもの」

彼は不思議というよりもむしろ恥かしい気がした。

「いいえ。喜よろここんで着て行きました」

「御父おとつさんは外套もを有もっていないのかい」

「外套どころじゃない、もう何にも有っちゃいないんです」

健三は驚ろいた。細い灯ひに照らされた細君の顔が急に憐あわれに見えた。

「そんなに窮こまっているのかなあ」

「ええ。もうどうする事も出来ないんですって」

口数の寡すくない細君は、自分の生家に関する詳しい話を今まで夫の耳に入れずに通して来たのである。職に離れて以来の不如意を薄うすうす々知っていないながら、まさかこれほどとも思わずにいた健三は、急に眼を転じてその人の昔を見なければならなかった。

彼は絹シルク帽ハットにフロックコートで勇ましく官邸の石門せきもんを出て

行く細君の父の姿を鮮やかに思い浮べた。堅木かたぎを久きゆうの字形じがたに切り

組んで作つたその玄関の床は、つるつる光つて、時によると馴れない健三の足を滑らせた。前に広い芝生を控えた応接間を左へ折れ曲ると、それと接続つづいて長方形の食堂があつた。結婚する前健三は其所で細君の家族のものと一緒に晩餐ばんさんの卓に着いた事をいまだに覚えていた。二階には畳が敷いてあつた。正月の寒い晩、歌留多カルタに招かれた彼は、そのうちの一間で暖たかい宵を笑い声の裡うちふかに更した記憶もあつた。

西洋館に続いて日本建にほんだても一棟付ひとむねいていたこの屋敷には、家族の外に五人の下女げじよと二人の書生が住んでいた。職務柄客の出入でいりの多いこの家の用事には、それだけの召めしつかい仕が必要かも知れなかつたが、もし経済が許さないとすれば、その必要も充たみされる

はずはなかった。

健三が外国から帰つて来た時ですら、細君の父はさほど困つて
いるようには見えなかった。彼が駒込こまごめの奥に住居すまいを構えた当座、
彼の新宅を訪ねた父は、彼に向つてこういった。――

「まあ自分の宅うちを有つもという事が人間にはどうしても必要ですね。
しかしそう急にも行くまいから、それは後廻しにして、精々せいぜい貯
蓄を心掛けたら好いいでしょう。二、三千円の金を有つていないと、
いざという場合に、大変困るもんだから。なに千円位出来ればそ
れで結構です。それを私わたしに預けて御置きなされると、一年位経つう
ちには、じき倍にして上げますから」

貨殖の道に心得の足りない健三はその時不思議の感に打たれた。

「どうして一年のうちに千円が二千円になり得るだろう」

彼の頭ではこの疑問の解決がとても付かなかつた。利慾を離れる事の出来ない彼は、驚愕きようがくの念を以て、細君の父にのみあつて、自分には全く欠乏している、一種の怪力かいりよくを眺めた。しかし千円拵こしらえて預ける見込の到底付かない彼は、細君の父に向つてその方法を訊きく氣にもならずについて今日こんにちまで過ぎたのである。

「そんなに貧乏するはずがないだろうじゃないか。何ぼ何だつて」
「でも仕方がありませんわ、廻り合せまわあわだから」

産という肉体の苦痛を眼前に控えている細君の氣息遣いきづかいはただでさえ重々おもおもしかつた。健三は黙つて氣の毒そうなその腹と光沢つやの悪いその頬ほとを眺めた。

昔し田舎で結婚した時、彼女の父がどこから浮世絵風の美人を描いた下等な団扇うちわを四、五本買つて持つて来たので、健三はその一本をぐるぐる廻しながら、随分俗なものだと評したら、父はすぐ「所相応だろう」と答えた事があつたが、健三は今自分がその地方で作つた外套を細君の父に遣つて、「阿爺相応おやしだろう」という気にはとてもなれなかつた。いくら困つたつてあんなものと思ふとむしろ情なさけなくなつた。

「でもよく着られるね」

「見つともなくつても寒いよりは好いでしよう」

細君は淋さびしそうに笑つた。

七十三

中一日置いて彼が来た時、健三は久しぶりで細君の父に会った。年輩からいつても、経歴から見ても、健三より遙かに世間馴れた父は、何時も自分の娘婿に対して鄭寧^{ていねい}であつた。或時は不自然に陥る位鄭寧過ぎた。しかしそれが彼を現わす凡^{すべ}てではなかつた。裏側には反対のものが所々に起伏していた。

官僚式に出来上つた彼の眼には、健三の態度が最初から頗^{すこぶ}る横着に見えた。超えてはならない階段^{みづか}を無^{ぶしつけ}様に飛び越すようにも思われた。その上彼はむやみに自ら任じているらしい健三の高慢ちきな所を喜こばなかつた。頭にある事を何でも口外して憚^{はばか}らな

い健三の無作法も氣に入らなかつた。乱暴とより外に取りようのない一徹一凶な点も非難の標的^まになつた。

健三の稚氣^{けい}を輕蔑^{けいべつ}した彼は、形式の心得もなく無茶苦茶に近付いて来^きようとする健三を表面上鄭寧な態度で遮つた。すると二人は其所^{そこ}で留まつたなり動けなくなつた。二人は或る間隔を置いて、相手の短所を眺めなければならなかつた。だから相手の長所^{はつきり}も判明と理解する事が出来悪^{にく}くなつた。そうして二人とも自分の有^もつてゐる欠点の大部分には決して氣が付かなかつた。

しかし今の彼は健三に対して疑^{うたがい}もなく一時的の弱者であつた。他に頭^{ひと}を下げる事の嫌^{きらひ}な健三は窮迫の結果、余儀なく自分の前に出て来た彼を見た時、すぐ同じ眼で同じ境遇に置かれた自分を想

像しない訳に行かなかった。

「如何いかにも苦しいだろう」

健三はこの一念に制せられた。そうして彼の持ち来きたした金策談に耳を傾むけた。けれども好いい顔はし得なかった。心のうちでは好い顔をし得ないその自分を呪のろっていた。

「金の話だから好い顔が出来ないんじゃない。金とは独立した不愉快のために好い顔が出来ないので。誤解してはいけません。
わたくし私わたしはこんな場合に敵かたきうち討うちをするような卑怯ひきような人間とは違ちがいます」

細君の父の前にこれだけの弁解がしたくつて堪らなかつた健三は、黙つて誤解の危険を冒すより外に仕方がなかつた。

このぶつきら棒な健三に比べると、細君の父はよほど鄭寧であ

った。また落付おちついていた。傍はたから見れば遙に紳士らしかった。

彼は或人の名を挙げた。

「向うでは貴方あなたを知つてるといいますが、貴方も知つてるんでしょうね」

「知っています」

健三は昔し学校にいた時分にその男を知っていた。けれども深い交際つきあいはなかった。卒業して独乙ドイツへ行つて歸つて来たら、急に職業がえをして或ある大きな銀行へ入ったとか人の噂うわさに聞いた位より外に、彼の消息は健三に伝わっていなかった。

「まだ銀行にいるんですか」

細君の父は點頭うなずいた。しかし二人がどこでどう知り合になった

のか、健三には想像さえ付かなかった。またそれを詳しく訊いて見たところが仕方がなかった。要点はただその人が金を貸してくれるか、くれないかの問題にあった。

「で当人のいうには、貸しても好い、好いが慥たしかな人を証人に立ててもらいたいとこういうんです」

「なるほど」

「じや誰を立てたら好いのかと聞くと、貴方ならば貸しても好いと、向うでわざわざ指名した訳なんです」

健三は自分自身を慥なものと認めるには躊躇ちゆうちよしなかった。

しかし自分自身の財力に乏しい事も職業の性質上他ひとに知れていなければならぬはずだと考えた。その上細君の父は交際範囲の極

めて広い人であつた。平生^{へいぜい}彼の口にする知合^{しりあい}のうちには、健三よりどの位世間から信用されて好いか分らないほど有名な人がいくらでもいた。

「何故^{なぜ}私の判が必要なんでしょう」

「貴方なら貸そうというのです」

健三は考えた。

七十四

彼は今日^{こんにち}まで証書を入れて他^{ひと}から金を借りた経験のない男であつた。つい義理で判を捺^ついて遣^やつたのが本^{もと}で、立派な腕^{うで}を有^もち

ながら、生涯社会の底に沈んだまま、藻搔もがき通しに藻搔もがいている人の話は、いくら迂闊うかつな彼の耳にもしばしば伝えられていた。彼は出来るなら自分の未来に関わるような所作を避けたいと思った。しかし頑固な彼の半面にはいたって気の弱い煮え切らない或物よが能く働らきたがった。この場合断然連印を拒絶するのは、彼に取って如何いかにも無情で、冷刻で、心苦しかった。

「私でなくつちやいけないのでしょうか」

「貴方あなたなら好いいいというんです」

彼は同じ事を二度訊きいて同じ答えを二度受けた。

「どうも変ですね」

世事に疎い彼は、細君の父がどこへ頼んでも、もう判を押して

くれるものがないので、しまいに仕方なしに彼の所へ持つて来たのだという明白な事情さえ推察し得なかった。彼は親しく交際つきあつた事もないその銀行家からそれほど信用されるのがかえつて怖くなつた。

「どんな目に逢わされるか分りやしない」

彼の心には未来における自己の安全という懸念が充分に働いた。同時にただそれだけの利害心でこの問題を片付けてしまふほど彼の性格は単純に出来ていなかった。彼の頭が彼に適当な解決を与えるまで彼は逡巡しゆんしゆんしなければならなかった。その解決が最後に来た時ですら、彼はそれを細君の父の前に持ち出すのに多大の努力を払った。

「印を捺^おす事はどうも危険ですからやめたいと思います。しかしその代り私の手で出来るだけの金を調^とえて上げましょう。無論貯蓄のない私の事だから、調えるにしたところで、どうせどこからか借りるより外に仕方がないのですが、出来るなら証文を書いたり判を押したりするような形式上の手続きを踏む金は借りたくないのです。私の有^もっている狭い交際の方面で安全な金を工面した方が私には心持が好いのですから、まずそっちの方を一つ中^{あた}つて見みましょう。無論御^{おい}入^いり^{よう}だけの額^{たか}は駄目です。私の手で調のえる以上、私の手で返さなければならぬのは無論の事ですから、身分不相当の借金は出来ません」

いくらでも融通が付けば付いただけ助かるといった風の苦しい

境遇に置かれた細君の父は、それより以上健三を強^しいなかった。

「どうぞそれじゃ何分」

彼は健三の着古した外套に身を包んで、寒い日の下を歩いて帰って行つた。書齋で話を済めた健三は、玄関からまた同じ書齋に戻つたなり細君の顔を見なかった。細君も父を玄関に送り出した時、夫と並んで沓^{くつぬぎ}脱の上に立つただけで、遂に書齋へは入つて来なかった。金策の事は黙々のうちに二人に了解されていながら、遂に二人の間の話題に上^{のぼ}らずにしまった。

けれども健三の心には既に責任の荷があつた。彼はそれを果すために動かなければならなかった。彼は世帯を持つときに、火鉢^{ひばち}や烟草^{タバコ}盆^{ぼん}を一所に買つて歩いてもらつた友達の宅^{うち}へまた出掛け

た。

「金を貸してくれないかね」

彼は藪やぶから棒に質問を掛けた。金などを有っていない友達は驚ろいた顔をして彼を見た。彼は火鉢に手を翳かざしながら友達の前に逐一事情を話した。

「どうだろう」

三年間支那のある学堂で教きょう鞭べんを取っていた頃に蓄えた友達
の金は、みんな電鉄か何かの株に変形していた。

「じゃ清水しみずに頼んで見てくれないか」

友達ともだちの妹婿めいそに当る清水は、下町しもまちのかなり繁華な場所で、病院を
開いていた。

「さあどうかなあ。あいつもその位な金はあるだろうが、動かせるようになっているかしら。まあ訊いて見てやろう」

友達の好意は幸い徒勞^{むだ}にならずに済んだ。健三の借り受けた四百円の金が、細君の父の手に入つたのは、それから四、五日経つて後の事^{のち}であつた。

七十五

「己^{おれ}は精一杯の事をしたのだ」

健三の腹にはこういう安心があつた。従つて彼は自分の調^{ちようだ}達^{たつ}した金の価値について余り考へなかつた。さぞ嬉^{うれ}しがるだらう

うとも思わない代りに、これ位の補助が何の役に立つものかという気も起さなかつた。それがどの方面にどう消費されたかの問題になると、全くの無知識で澄ましていた。細君の父も其所^{そこ}まで内状を打ち明けるほど彼に接近して来なかつた。

従来の牆^{しょう}壁^{へき}を取り払うにはこの機会があまりに脆^{ぜい}弱^{じやく}過ぎた。もしくは二人の性格があまりに固着し過ぎていた。

父は健三よりも世間的に虚栄心の強い男であつた。なるべく自分を他^{ひと}に能く了解させようと力^{つと}めるよりも、出来るだけ自分の価値を明るい光線に触^あてさせたがる性質^{たち}であつた。従つて彼を圉^{いに}繞^うする妻子近親に対する彼の様子は幾分か誇大に傾むきがちであつた。

境遇が急に失意の方面に一転した時、彼は自分の平生へいぜいを顧みない訳に行かなかつた。彼はそれを糊塗ことするため、健三に向つて能あたう限りさあらぬ態度を装つた。それで遂に押し通せなくなつた揚句、彼はとうとう健三に連印を求めたのである。けれども彼がどの位の負債にどう苦しめられているかという巨細こさいの事實は、遂に健三の耳に入らなかつた。健三も訊きかなかつた。

二人は今までの距離を保つたままで互に手を出し合つた。一人が渡す金を一人が受け取つた時、二人は出した手をまた引き込めた。傍はたでそれを見ていた細君は黙つて何ともいわなかつた。

健三が外国から歸つた当座の二人は、まだこれほどに離れていなかった。彼が新宅を構えて間もない頃、彼は細君の父がある鉾

山事業に手を出したという話を聞いて驚ろいた事があつた。

「山を掘るんだって？」

「ええ、何でも新らしく会社を^{こしら}えろんだそうです」

彼は^{まゆ}眉を^{ひそ}顰めた。同時に彼は父の^{かいりよく}怪力に幾分かの信用を置

いていた。

「^{うま}旨く行くのかね」

「どうですか」

健三と細君との間にこんな簡単な会話が取り換わされた^{のち}後、彼はその用事を帯びて^{ほつく}北国のある都会へ向けて出発したという父の報知を細君から受け取った。すると一週間ばかりして彼女の母が突然健三の所へ遣^やつて来た。父が旅先で急に病氣に罹^かつたので、

これから自分も行かなければならないと思うが、それについて旅費の都合は出来まいかというのが母の用向ようむきであつた。

「ええええ旅費位どうでもして上あげますから、すぐ行つて御上なさい」

宿屋に寐ねている苦しい人と、汽車で立つて行く寒い人とを心しんから気の毒に思つた健三は、自分のまだ見た事もない遠くの空の佗わびしさまで想像の眼に浮べた。

「何しろ電報が来ただけで、詳しい事はまるで分りませんのですから」

「じやなお御心配でしょう。なるべく早く御立ちになる方が好いいでしょう」

幸いにして父の病氣は輕かった。しかし彼の手を着けかけたという鉱山事業はそれぎり立^{たちぎえ}消になつてしまつた。

「まだ何にも見付からないのかね、口は」

「あるにはあるようですけれども旨^{うま}く纏^{まと}まないんですつて」

細君は父がある大きな都会の市長の候補者になつた話をして聞かせた。その運動費は財力のある彼の旧友の一人が負担してくれているようであつた。しかし市の有志家^{そしや}が何名か打ち揃^{そろ}つて上京した時に、有名な政治家のある伯^{はく}爵^{しやく}に会つて、父の適不適を問^{ただ}ひ訊^きしたら、その伯爵^{ふむき}がどうも不向^{ふむき}だろうと答えたので、話はそれぎりでやめになつたのだそうである。

「どうも困るね」

「今に何とかなるでしょう」

細君は健三よりも自分の父の方を遥かに余計信用していた。健三も例の怪^{かいりよく}力^{りき}を知らないではなかった。

「ただ気の毒だからそういうだけさ」

彼の言葉に嘘^{うそ}はなかった。

七十六

けれどもその次に細君の父が健三を訪問した時には、二人の關係がもう變つていた。^{みずか}自ら進んで母に旅費^{ようだ}を用立^{ようだ}った女^{むすめ}婿^{むこ}は、一歩退^{しり}ぞかなければならなかった。彼は比較的遠い距離に立って

細君の父を眺めた。しかし彼の眼に漂よう色は冷淡でも無頓着むとんじやくでもなかった。むしろ黒い瞳ひとみから閃めひらこうとする反感の稲妻であつた。力つとめてその稲妻を隠そうとした彼は、やむをえずこの鋭どく光るものに冷淡と無頓着の仮装を着せた。

父は悲境にいた。まのあたり見る父は鄭寧ていねいであつた。この二つのものが健三の自然に圧迫を加えた。積極的に突掛つつかる事の出来ない彼は控えなければならなかつた。単なる無愛想の程度で我慢すべく余儀なくされた彼には、相手の苦しい現状と慇懃いんぎんな態度とが、かえつてわが天真の流露を妨げる邪魔物になつた。彼くらいえば、父はこういう意味において彼を苦しめに来たと同じ事であつた。父からいえば、普通の人としてさえ不都合に近い愚劣

な応対ぶりを、自分の女婿に見出すのは、堪えがたい馬鹿らしさに違なかつた。前後と関係のないこの場だけの光景を眺める傍觀者の眼にも健三はやはり馬鹿であつた。それを承知している細君にすら、夫は決して賢い男ではなかつた。

「わたくし私も今度という今度は困りました」

最初にこういつた父は健三からはかばかしい返事すら得なかつた。

父はやがて財界で有名な或人の名を挙げた。その人は銀行家でもあり、また実業家でもあつた。

「実はこの間ある人の周旋で会つて見ましたが、どうか旨く出来うまそうですよ。三井と三菱みつひしを除けば日本ではまあ彼所位あそこなもので

すから、使用人になったからといって、別に私の体面に関わる事
もありませんし、それに仕事をする区域も広いようですから、面
白く働けるだろうと思うんです」

この財力家によって細君の父に予約された位地というのは、関
西にある或^{ある}私立の鉄道会社の社長であつた。会社の株の大部分を
一人で所有しているその人は、自分の意志のままに、其所^{そこ}の社長
を選ぶ特権を有していたのである。しかし何十株か何百株かの持
主として、予^{あらか}じめ資格を作つて置かなければならない父は、どう
して金の工面をするだろう。事状に通じない健三にはこの疑問さ
え解けなかつた。

「一時必要な株数だけを私の名義に書換てもらうんです」

健三は父の言葉に疑を挟むほど、彼の才能を見縊^{みくび}つていなかった。彼と彼の家族とを目下の苦境から解脱^{げだつ}させるという意味においても、その成功を希望しない訳に行かなかった。しかし依然として元の立場に立っている事も改める訳に行かなかった。彼の挨拶^{いさつ}は形式的であつた。そうして幾分か彼の心の柔らかい部分をわざと堅苦しくした。老巧な父はまるで其所に注意を払わないように見えた。

「しかし困る事に、これは今が今という訳に行かないのです。時機があるものですからな」

彼は懷からまた一枚の辞令見たようなものを出して健三に見せた。それには或保険会社が彼に顧問を嘱託するという文句と、そ

の報酬として月々彼に百円を贈与するという条件が書いてあつた。「今御話した一方の方が出来たらこれはやめるか、または出来ても続けてやるか、その辺はまだ分らないんですが、とにかく百円でも当座の^{しの}凌ぎにはなりますから」

昔し彼が政府の内意で或官職を^{なげう}抛つた時、当路の人は山陰道筋のある地方の知事なら転任させても^よ好いという条件を付けた事があつた。しかし彼は断然それを^{しり}斥ぞけた。彼が今大して隆盛でもない保険会社から百円の金を^{もら}貰つて、別に^{いや}厭な顔をしないのも、やはり境遇の変化が彼の性格に及ぼす影響に相違なかつた。

こうした懸け隔てのない父の態度は、ややともすると健三を自分の立場から前へ押し出そうとした。その傾向を意識するや否や

彼はまた後戻りをしなければならなかった。彼の自然は不自然らしく見える彼の態度を倫理的に認可したのである。

七十七

細君の父は事務家であつた。ややともすると仕事本位の立場からばかり人を評価したがつた。乃木^{のぎ}將軍が一時台湾総督になつて間もなくそれをやめた時、彼は健三に向つてこんな事をいった。

「個人としての乃木さんは義に堅く情に篤^{あつ}く実に立派なものです。しかし総督としての乃木さんが果して適任であるかどうかという

問題になると、議論の余地がまだ大分あるように思います。個人の徳は自分に親しく接触する左右のものには能く及ぶかも知れませんが、遠く離れた被治者に利益を与えようとするには不充分です。其所へ行くところやっぱり手腕ですね。手腕がなくっちゃ、どんな善人でもただ坐^{すわ}っているより外に仕方ありませんからね」

彼は在職中の関係から或会の事務一切を管理していた。侯^{こうしや}爵^くを会頭に頂くその会は、彼の力で設立の主意を綺麗^{きれい}に事業の上で完成した後、彼の手元に二万円ほどの剰余金を委ねた。官途に縁がなくなつてから、不如意に不如意の続いた彼は、ついその委託金に手を付けた。そうして何時の間にか全部を消費してしまつた。しかし彼は自家の信用を維持するために誰にもそれを打ち

明けなかった。従つて彼はこの預金から当然生まれて来る百円近くの利子を毎月まいげつ調ちようだつ達して、体面を繕ろわなければならなかった。自家の経済よりもかえつてこの方を苦に病んでいた彼が、公生涯の持続に絶対に必要なその百円を、月々保険会社から貰うようになつたのは、当時の彼の心中に立入つて考えて見ると、全く嬉しいに違なかつた。

よほど後あとになつて始めてこの話を細君から聴いた健三は、彼女の父に対して新たな同情を感じただけで、不徳義漢として彼を悪にくむ気は更に起らなかつた。そういう男の娘と夫婦になつてゐるのが恥ずかしいなどとは更に思わなかつた。しかし細君に対しての健三は、この点に関して殆んど無言であつた。細君は時々彼に向

つていった。――

「妾^{わたし}、どんな夫でも構いませんわ、ただ自分に好くしてくれさえすれば」

「泥棒でも構わないのかい」

「ええええ、泥棒だろうが、詐欺師だろうが何でも好^いいわ。ただ女房を大事にしてくれば、それで沢山なのよ。いくら偉い男だって、立派な人間だって、宅^{うち}で不親切じや妾にや何にもならないんですもの」

実際細君はこの言葉通りの女であつた。健三もその意見には賛成であつた。けれども彼の推察は月の暈^{かさ}のように細君の言外まで滲^{にじ}み出した。学問ばかりに屈託している自分を、彼女がこういう

言葉でよそながら非難するのだという臭におがどこやらでした。しかしそれよりも遥かに強く、夫の心を知らない彼女がこんな態度で暗あんに自分の父を弁護するのではないかという感じが健三の胸を打った。

「己おれはそんな事で人と離れる人間じゃない」

自分を細君に説明しようと力つとめなかった彼も、独りで弁解の言葉を繰り返す事は忘れなかった。

しかし細君の父と彼との交情に、自然の溝渠みぞが出来たのは、やはり父の重きを置き過ぎている手腕の結果としか彼には思えなかった。

健三は正月に父の所へ礼に行かなかった。恭賀新年という端書

だけを出した。父はそれを寛^{ゆる}仮さなかつた。表向それを咎^{とが}める事もしなかつた。彼は十二、三になる末の子に、同じく恭賀新年という曲りくねった字を書かして、その子の名前で健三に賀状の返しをした。こういう手腕で彼に返報する事を巨細^{こさい}に心得ていた彼は、何故^{なぜ}健三が細君の父たる彼に、賀正^{がせい}を口ずから述べなかつたかの原因については全く無反省であつた。

一事は万事に通じた。利が利を生み、子に子が出来た。二人は次第に遠ざかつた。やむをえないで犯す罪と、遣^やらんでも済むのにわざと遂行する過失との間に、大變な區別を立てている健三は、性質^{たち}の宜^{よろ}しくないこの余裕を非常に惡^{にく}み出した。

七十八

「与^{くみ}しやすい男だ」

実際において与しやすい或物を多量に有^もっていると自覚しながらも、健三は他^{ひと}からこう思われるのが癪^{しゃく}に障^{さや}った。

彼の神経はこの肝^{かん}癪^{しゃく}を乗り超えた人に向つて鋭どい懷しみを感^{かん}じた。彼は群衆のうちにあつて直^{すぐ}そういう人を物色する事の出来る眼を有^あっていた。けれども彼自身はどうしてもその域に達せられなかった。だからなおそういう人が眼に着いた。またそういう人を余計尊敬したくなつた。

同時に彼は自分を罵^{ののし}った。しかし自分を罵らせるようにする相

手をば更に烈しく罵つた。^{はげ}

かくして細君の父と彼との間には自然の造つた溝渠が次第に出
来上つた。彼に対する細君の態度も暗に^{あん}それを手伝つたには相違
なかつた。

二人の間柄がすれすれになると、細君の心は段々^{さと}生家の方へ傾
いて行つた。生家でも同情の結果、冥々^{めいめい}の裡に^{うち}細君の肩を持た
なければならなくなつた。しかし細君の肩を持つという事は、或
場合において、健三を敵とするという意味に外ならなかつた。二
人は益離^{ますます}れるだけであつた。

幸にして自然は緩和剤としての歇私^{ヒステリー}的里を細君に与えた。発作
は都合よく二人の關係が緊張した間際に起つた。健三は時々便所

へ通う廊下に俯伏うつぶせになつて倒れている細君を抱き起して床の上まで連れて来た。真夜中に雨戸を一枚明けた縁側の端はじに蹲踞うずくまつてゐる彼女を、後うしろから両手で支えて、寢室へ戻つて来た経験もあった。

そんな時に限つて、彼女の意識は何時でも朦朧もうろうとして夢よりも分別がなかつた。瞳孔どうこうが大きく開いていた。外界はただ幻影のように映るらしかつた。

枕辺まくらべに坐すわつて彼女の顔を見詰めている健三の眼には何時でも不安が閃ひらめいた。時としては不憫ふびんの念が凡すべてに打ち勝つた。彼は能くよ気の毒な細君の乱れかかつた髪に櫛くしを入れて遣やつた。汗ばんだ額ぬを濡ぬれ手拭てぬぐいで拭ふいて遣つた。たまには氣たしかを確かにするために、

顔へ霧を吹き掛けたり、口移しに水を飲ませたりした。

発作の今よりも劇^{はげ}しかった昔の様も健三の記憶を刺戟^{しげき}した。

或時の彼は毎夜細い紐^{ひも}で自分の帯と細君の帯とを繋^{つな}いで寐^ねた。

紐の長さを四尺ほどにして、寐返^{ねがえ}りが充分出来るように工夫され

たこの用意は、細君の抗議なしに幾晩も繰り返された。

或時の彼は細君の鳩尾^{みぞおち}へ茶碗^{ちやわん}の糸底を宛^{あて}がつて、力任せに

押し付けた。それでも踏^ぞん反り返ろうとする彼女の魔力をこの一

点で喰^くい留めなければならぬ彼は冷たい油汗を流した。

或時の彼は不思議な言葉を彼女の口から聞かされた。

「御天道^{おてんとう}さまが来ました。五色^{しき}の雲へ乗つて来ました。大変よ、

あなた
貴夫

「妾^{わたし}の赤ん坊は死んじまった。妾の死んだ赤ん坊が来たから行かなくつちやならない。そら其所^{そこ}にいるじゃありませんか。枯^{はねつる}」

棹^べの中に。妾ちよつと行つて見て来るから放して下さい」

流産してから間もない彼女は、抱き竦^{すく}めにかかる健三の手を振り払つて、こういいながら起き上がろうとしたのである。……

細君の発作は健三に取つての大いなる不安であつた。しかし大抵の場合にはその不安の上に、より大いなる慈愛の雲が靉^{たなび}靆^いいてゐた。彼は心配よりも可^{かわい}哀^{そう}想^{そう}になつた。弱い憐^{あわ}れなものの前に頭を下げて、出来得る限り機嫌を取つた。細君も嬉^{うれ}しそうな顔をした。

だから発作に故意だろうという疑の掛からない以上、また余り

に肝^{かん}癪^{しやく}が強過ぎて、どうしても勝手にしろという気にならない以上、最後にその度数が自然の同情を妨げて、何でそう己^{おれ}を苦しめるのかという不平が高まらない以上、細君の病気は二人の仲を和らげる方法として、健三に必要であつた。

不幸にして細君の父と健三との間にはこういう重宝な緩和剤が存在していなかった。従つて細君が本^{もと}で出来た両者の疎隔は、たとい夫婦関係が常に復した後^{あと}でも、ちよつと埋める訳に行かなかつた。それは不思議な現象であつた。けれども事実には相違なかつた。

不合理な事の嫌きらな健三は心の中うちでそれを苦に病んだ。けれども別にどうするりようけん了簡かんも出さなかった。彼の性質はむきでもあり一図でもあつたと共に頗すこぶる消極的な傾向を帯びていた。

「己おれにそんな義務はない」

自分に訊きいて、自分に答を得た彼は、その答を根本的なものと信じた。彼は何時までも不愉快の中で起き臥がする決心をした。成なりゆ行きが自然に解決を付けてくれるだろうとさえ予期しなかった。

不幸にして細君もまたこの点においてどこまでも消極的な態度を離れなかった。彼女は何か事件があれば動く女であつた。他ひとから頼まれて男より邁まいしん進する場合もあつた。しかしそれは眼前に

手で触れられるだけの明めいりよう瞭りょうな或物を捉つかまえた時に限っていた。ところが彼女の見た夫婦関係には、そんな物がどこにも存在していなかった。自分の父と健三の間にもこれというほどの破綻はたんは認められなかった。大きな具象的な変化でなければ事件と認めない彼女はその他たを閑却した。自分と、自分の父と、夫との間に起る精神状態の動揺は手の着けようのないものだと観じていた。

「だって何にもないじゃありませんか」

裏面にその動揺を意識しつつ彼女はこう答えなければならなかった。彼女に最も正当と思われたこの答が、時として虚偽の響をもつて健三の耳を打つ事があつても、彼女は決して動かなかった。しまいになつても構わないという投げ遣なやりの気分が、単に消

極的な彼女をなおの事消極的に練り堅めて行つた。

かくして夫婦の態度は悪い所で一致した。相互の不調和を永續するためにと評されても仕方のないこの一致は、根強い彼らの性格から割り出されていた。偶然というよりもむしろ必然の結果であつた。互に顔を見合せた彼らは、相手の人相で自分の運命を判断した。

細君の父が健三の手で調達ちようだつされた金を受取つて歸つてから、それを特別の問題ともしなかつた夫婦は、かえつて余事を話し合つた。

「産婆は何時頃生れるというのかい」

「何時つて判然はつきりいいもしませんが、もう直じきですわ」

「用意は出来てるのかい」

「ええ奥の戸棚の中に入っています」

健三には何が這入^{はい}っているのか分らなかつた。細君は苦しうに大きな溜息^{ためいき}を吐^ついた。

「何しろこう重苦しくつちや堪らない。早く生れてくれなくつちや」

「今度は死ぬ^{こんだ}かも知れないっていつてたじゃないか」

「ええ、死んでも何でも構わないから、早く生んじまいたいわ」

「どうも御氣の毒さまだな」

「好^{いい}いわ、死ぬ^{あな}ば貴夫のせいだから」

健三は遠い田舎^{いなか}で細君が長女を生んだ時の光景を憶^{おも}い出した。

不安そうに苦い顔をしていた彼が、産婆から少し手を貸してくれといわれて産室へ入った時、彼女は骨にこた応えるような恐ろしい力でいきなり健三の腕に獅し噛み付いた。そうして拷問でもされる人のように唸うなった。彼は自分の細君が身体からだの上に受けつつある苦痛を精神的に感じた。自分が罪人ではないかという気さえした。

「産をするのも苦しいだろうが、それを見ているのも辛いものだぜ」

「じやどこかへ遊びにでもいらっしやいな」

「一人で生めるかい」

細君は何とも答えなかった。夫が外国へ行っている留守に、次の娘を生んだ時の事などはまるで口にできなかった。健三も訊いて

見ようとは思わなかった。生れ付心配性な彼は、細君の唸り声を余所よそにして、ぶらぶら外を歩いていられるような男ではなかった。産婆が次に顔を出した時、彼は念を押した。

「一週間以内かね」

「いえもう少し後あとでしよう」

健三も細君もその気でいた。

八十

日取が狂つて予期より早く産氣さんけづいた細君は、苦しそうな声を出して、傍そばに寐ねている夫の夢を驚ろかした。

「先刻さつきから急に御腹おなかが痛み出して……」

「もう出そうなのかい」

健三にはどの位な程度で細君の腹が痛んでいるのか分らなかつた。彼は寒い夜の中に夜具から顔だけ出して、細君の様子をそつと眺めた。

「少し撫さすつて遣やろうか」

起き上る事の臆おつくう 劫な彼は出来るだけ口先で間に合せようとした。彼は産についての経験もをただ一度しか有もつていなかった。その経験も大方は忘れていた。けれども長女の生れる時には、こういう痛みが、潮の満干みちひのように、何度も来たり去つたりしたように思えた。

「そう急に生れるもんじゃないだろうな、子供つてものは。一ひとし

仕切きり痛んではまた一仕切治まるんだろう」

「何だか知らないけれども段々痛くなるだけですわ」

細君の態度は明らかに彼女の言葉を証拠立てた。凝じつと蒲団ふとんの上に落付おちついていられない彼女は、枕を外して右を向いたり左へ動いたりした。男の健三には手の着けようがなかった。

「産婆を呼ぼうか」

「ええ、早く」

職業柄産婆の宅うちには電話が掛つていたけれども、彼の家にそんな気の利いた設備のあらうはずはなかった。至急を要する場合が起るたびに、彼は何時でも掛りつけの近所の医者いしやの所へ馳かけ付け

るのを例にしていた。

初冬はつふゆの暗い夜はまだ明け離れるのに大分間だいぶんがあつた。彼はその人とその人の門かどをたたく下女げじよの迷惑を察した。しかし夜明よあけまで安閑と待つ勇氣がなかつた。寢室ふすまの襖を開けて、次の間から茶の間を通つて、下女部屋の入口まで来た彼は、すぐ召使せの一人を急せぎ立てて暗い夜の中へ追ひ遣つた。

彼が細君の枕元へ歸つて来た時、彼女の痛みは益劇ますますしくなつた。彼の神経は一分ごとに門前とまで停とまる車の響を待ち受けなければならぬほどに緊張して来た。

産婆は容易に来なかつた。細君の唸うなる声こゑが絶間たえまなく静かな夜の室へやを不安に攪かき乱した。五分経つか経たないうちに、彼女は「も

う生れます」と夫に宣告した。そうして今まで我慢に我慢を重ねて泳こらえて来たような叫び声を一度に揚げると共に胎児ぶんべんを分娩ぶんべんした。

「確しつかりしろ」

すぐ立つて蒲団すその裾すその方に廻った健三は、どうして好いいか分らなかった。その時例の洋燈ランプは細長い火蓋ほやの中で、死のように静かな光を薄暗く室内に投げた。健三の眼を落している辺あたりは、夜具の縞柄しまがらさえ判明はつきりしないぼんやりした陰で一面に裹つつまれていた。

彼は狼狽ろうばいした。けれども洋燈を移して其所そこを輝てらすのは、男子の見るべからざるものを強しいて見るような心持がして気が引けた。彼はやむをえず暗中に摸索した。彼の右手は忽たちまち一種異様の触覚

をもつて、今まで経験した事のない或物に触れた。その或物は寒天のようにぷりぷりしていた。そうして輪廓からいつても恰好の判然しない何かの塊かたまりに過ぎなかった。彼は気味の悪い感じを彼の全身に伝えるこの塊を軽く指頭で撫なでて見た。塊りは動きもしなければ泣きもしなかった。ただ撫でるたんびにぷりぷりした寒天のようなものが剥はげ落ちるように思えた。もし強く抑えたり持ったりすれば、全体がきつと崩れてしまふに違ないと彼は考えた。彼は恐ろしくなつて急に手を引込ひっこめた。

「しかしこのままにして放つて置いたら、風邪かぜを引くだろう、寒さで凍こえてしまふだろう」

死んでいるか生きているかさえ弁別みわけのつかない彼にもこういう

懸念が湧いた。彼は忽ち出産の用意が戸棚の中に入れてあるといった細君の言葉を思い出した。そうしてすぐ自分の後部にある唐紙を開けた。彼は其所から多量の綿を引き摺り出した。脱脂綿という名さえ知らなかった彼は、それをむやみに千切つて、柔かい塊の上に載せた。

八十一

その内待に待った産婆が来たので、健三は漸く安心して自分の室へ引き取った。

夜は間もなく明けた。赤子の泣く声が家の中の寒い空気を顫わ

せた。

「御安産で御目出とう御座います」

「男かね女かね」

「女の御子さんで」

産婆は少し気の毒そうに途中で句を切った。

「また女か」

健三にも多少失望の色が見えた。一番目が女、二番目が女、今度生れたのもまた女、都合三人の娘の父になった彼は、そう同じものばかり生んでどうする気だろうと、心の中で暗^{うち}に細君を非難した。しかしそれを生ませた自分の責任には思い到^{いた}らなかった。

田舎^{いなか}で生まれた長女は肌理^{きめ}の濃^{こま}やかな美しくい子であつた。健

三はよくその子を乳母車うばぐるまに乗せて町の中を後うしろから押して歩いた。時によると、天使のように安らかな眠に落ちた顔を眺めながら宅うちへ歸つて来た。しかし当あてにならないのは想像の未来であつた。健三が外国から歸つた時、人に伴つられて彼を新橋しんばしに迎えたこの娘は、久しぶりに父の顔を見て、もつと好いい御父さまかと思つたと傍はたのものに語つた如く、彼女自身の容貌もしばらく見ないうちに悪い方に變化していた。彼女の顔は段々たけ丈が詰つて来た。輪廓かどに角が立つた。健三はこの娘の容貌の中うちにいつか成長しつつある自分の相好そうごうの悪い所を明らかに認めなければならなかつた。

次女は年が年中腫物できものだらけの頭をしていた。風通しが悪いからだろうというのが本もとで、とうとう髪かみの毛をじよぎじよぎに剪つ

てしまった。顚の短かい眼の大きなその子は、海坊主うみぼうずの化物ばけもののような風をして、其所そこいらをうろうろしていた。

三番目の子だけが器量好く育とうとは親の慾目にも思えなかつた。

「ああいうものが続々生れて来て、必ひつきよう竟ようどうするんだろう」

彼は親らしくもない感想を起した。その中には、子供ばかりではない、こういう自分や自分の細君なども、必竟ひつきようどうするんだろうという意味も臃おぼろげ氣まじに交つていた。

彼は外へ出る前にちよつと寢室へ顔を出した。細君は洗い立てのシーツの上に穩かに寐ねていた。子供も小さい附属物のように、厚い綿の入った新調の夜具蒲団ふとんに包くるまれたまま、傍に置いてあつ

た。その子供は赤い顔をしていた。昨夜暗闇で彼の手に触れた寒天のような肉塊とは全く感じの違うものであった。

一切も綺麗きれいに始末そこされていた。其所そこいらには汚れ物よごものの影さえ見えなかった。夜来やらいの記憶は跡方もない夢らしく見えた。彼は産婆の方を向いた。

「蒲団は換えて遣やつたのかい」

「ええ、蒲団も敷布も換えて上げました」

「よくこう早く片付けられるもんだね」

産婆は笑うだけであつた。若い時から独身で通して来たこの女の声や態度はどことなく男らしかった。

「貴夫あなたがむやみに脱脂綿を使って御しまいになったものだから、

足りなくって大変困りましたよ」

「そうだろう。随分驚ろいたからね」

こう答えながら健三は大して気の毒な思いもしなかった。それよりも多量に血を失なつて蒼い顔あおをしている細君の方が懸念の種になつた。

「どうだ」

細君は微かすかに眼を開けて、枕の上で軽く肯うなずいた。健三はそのまま外へ出た。

例刻に歸つた時、彼は洋服のままでまた細君の枕元すわに坐つた。
「どうだ」

しかし細君はもう肯うなずかなかつた。

「何だか変なようです」

彼女の顔は今朝見た折と違つて熱で火照^{ほて}っていた。

「心持が悪いのかい」

「ええ」

「産婆を呼びに遣ろうか」

「もう来るでしょう」

産婆は来るはずになっていた。

八十二

やがて細君の腋^{わき}の下に驗温器^{あて}が宛^{あて}がわれた。

「熱が少し出ましたね」

産婆はこういつて度盛どもりの柱の中に上のぼつた水銀を振り落した。彼女は比較的言葉寡すくなであつた。用心のため産科の医者呼んで診みてもらつたらどうだという相談さえせずに歸つてしまった。

「大丈夫なのかな」

「どうですか」

健三は全くの無知識であつた。熱さえ出ればすぐ産褥熱さんじよくねつじやなからうかという危惧きぐの念を起した。母から掛り付けて来た産婆に信頼している細君の方がかえつて平氣であつた。

「どうですか、御前の身体からだじゃないか」

細君は何とも答えなかつた。健三から見ると、死んだつて構わ

ないという表情がその顔に出ているように思えた。

「人がこんなに心配して遣^やるのに」

この感じを翌^{あく}る日まで持ち続けた彼は、何時もの通り朝早く出て行つた。そうして午後^さに帰つて来て、細君の熱がもう退めてゐる事に気が付いた。

「やつぱり何でもなかったのかな」

「ええ。だけど何時また出て来るか分りませんわ」

「産をすると、そんなに熱が出たり引つ込んだりするものかね」

健三は真面目^{まじめ}であつた。細君は淋しい^{さび}頬^{ほお}に微笑を洩^もらした。

熱は幸^{さいわい}にしてそれぎり出なかつた。産後の経過は先ず順当に行

つた。健三は既定の三週間を床の上に過すべく命ぜられた細君の

枕元へ来て、時々話をしながら坐^{すわ}った。

「今度は死ぬ死ぬつていいながら、平気で生きているじゃないか」

「死んだ方が好ければ何時でも死にます」

「それは御随意だ」

夫の言葉を笑^{じょうだん}談 半分に聴いていられるようになった細君は、

自分の生命に対して鈍いながらも一種の危険を感じたその当時を顧みなければならなかった。

「実際今度は死ぬと思つたんですもの」

「どういう訳で」

「訳はないわ、ただ思うのに」

死ぬと思つたのかえって普通の人より軽い産をして、予想と

事実が丁度裏表になつた事さえ、細君は氣に留めていなかった。

「御前は呑氣のんきだね」

「あなた貴夫こそ呑氣よ」

細君は嬉しうれそうに自分の傍そばに寐ねている赤ん坊の顔を見た。そうして指の先で小さい頬ほ片つぱを突つついて、あやし始めた。その赤ん坊はまだ人間の体裁を具えた眼鼻めはなを有もつているとはいえないほど変な顔をしていた。

「産が軽いだけあつて、少し小さ過ぎるようだね」

「今に大きくなりますよ」

健三はこの小さい肉の塊りが今の細君のように大きくなる未来を想像した。それは遠い先にあつた。けれども途中で命の綱が切

れない限り何時か来るに相違なかった。

「人間の運命はなかなか片付かないもんだな」

細君には夫の言葉があまりに突然過ぎた。そうしてその意味が解らなかった。

「何ですって」

健三は彼女の前に同じ文句を繰り返すべく余儀なくされた。

「それがどうしたの」

「どうもしないけれども、そうだからそうだというのさ」

「詰らないわ。他ひとに解らない事さえいいや、好いいかと思つて」

細君は夫を捨ててまた自分の傍に赤ん坊を引き寄せた。健三は厭いやな顔もせずに書斎へ入った。

彼の心のうちには死なない細君と、丈夫な赤ん坊の外に、免職になろうとしてならずにいる兄の事があつた。喘息ぜんそくで斃たおれようとしてまだ斃れずにいる姉の事があつた。新らしい位地が手に入るようでもまだ手に入らない細君の父の事があつた。その他た島田の事も御常おつねの事もあつた。そうして自分とこれらの人々との関係が皆なまだ片付かずにいるという事もあつた。

八十三

子供は一番気楽であつた。生きた人形でも買ってもらつたように喜んで、閑ひまさえあると、新らしい妹いもの傍そばに寄りたがつた。その

妹の瞬きまたた一つさえ驚嘆の種になる彼らには、噓くさめでも欠あくびでも何でもかでも不可思議な現象と見えた。

「今にどんなになるだろう」

当面に忙殺ぼうさいされる彼らの胸にはかつてこうした問題が浮かばなかった。自分たち自身の今にどんなになるかをすら領解し得ない子供らは、無論今にどうするだろうなどと考えるはずがなかった。

この意味で見た彼らは細君よりもなお遠く健三を離れていた。外から帰った彼は、時々洋服も脱がずに、敷居の上に立ちながら、ぼんやりこれらの一団を眺めた。

「また塊かたまっているな」

彼はすぐ踵きびすめぐを回らして部屋の外へ出る事があつた。

時によると彼は服も改めずにすぐ其所そこへ胡坐あぐらをかいた。

「こう始終湯婆ゆたんぽばかり入れていちや子供の健康に悪い。出してしまえ。第一いくつ入れるんだ」

彼は何にも解らないくせに好い加減な小言こごとをいつてかえつて細君から笑われたりした。

日が重なつても彼は赤ん坊を抱いて見る気にならなかつた。それでいて一つ室へやに塊かたまりっている子供と細君とを見ると、時々別な心持を起した。

「女は子供を専領してしまふものだね」

細君は驚ろいた顔をして夫を見返した。其所そこには自分が今まで

無自覚で実行して来た事を、夫の言葉で突然悟らされたような趣もあつた。

「何で藪やぶから棒にそんな事を仰おつしやるの」

「だってそうじゃないか。女はそれで氣に入らない亭主かたきうに敵かたきう討ちをするつもりなんだろう」

「馬鹿を仰おやい。子供わたくしが私の傍そばへばかり寄り付くのは、貴夫あなたが構かまい付けて御遣おやりなさらないからです」

「己おれを構かまい付けなくさせたものは、取とりも直さず御前ごぜんだろう」

「どうでも勝手になさい。何ぞというひがと僻ひがみばかりいつて。どうせ口の達者な貴夫には敵かないませんから」

健三はむしろ真面目まじめであつた。僻くちみとも口巧くちこう者しやとも思わなか

った。

「女は策略が好きだからいけない」

細君は床の上で寐返^{ねがえ}りをしてあちらを向いた。そうして涙をばたばたと枕の上に落した。

「そんなに何も私^{わたくし}を虐めなくつても……」

細君の様子を見ていた子供はすぐ泣き出しそうにした。健三の胸は重苦しくなった。彼は征服されると知りながらも、まだ産^{さんじ}褥^{よく}を離れ得ない彼女の前に慰藉^{いしや}の言葉を並べなければならなかった。しかし彼の理解力は依然としてこの同情とは別物であった。細君の涙を拭^ふいてやった彼は、その涙で自分の考えを訂正する事が出来なかった。

次に顔を合せた時、細君は突然夫の弱点を刺した。

「貴夫何故その子を抱いて御遣りにならないの」

「何だか抱くと險呑^{けんのん}だからさ。頸^{くび}でも折ると大変だからね」

「嘘^{うそ}を仰しやい。貴夫には女房や子供に対する情^{じょうあい}合^{あい}が欠けているんですよ」

「だって御覧な、ぐたぐたして抱き慣^つけない男に手なんか出せやしないじゃないか」

實際赤ん坊はぐたぐたしていた。骨などはどこにあるかまるで分らなかつた。それでも細君は承知しなかつた。彼女は昔し一番目の娘に水疱瘡^{みずぼうそう}の出来た時、健三の態度が俄^{にわ}かに一変した実例を証拠に挙げた。

「それまで毎日抱いて遣っていたのに、それから急に抱かなくなつたじゃありませんか」

健三は事実を打ち消す気もなかった。同時に自分の考えを改めようともしなかった。

「何といったって女には技巧があるんだから仕方がない」

彼は深くこう信じていた。あたかも自分自身は凡^{すべ}ての技巧から解放された自由の人であるかのように。

八十四

退屈な細君は貸本屋から借りた小説を能く^よ床の上で読んだ。時

々枕元に置いてある厚紙の汚ならしいその表紙が健三の注意を惹く時、彼は細君に向つて訊いた。

「こんなものが面白いのかい」

細君は自分の文学趣味の低い事を嘲けられるような気がした。

「いいじやありませんか、貴夫に面白なくなつたつて、私にさえ面白けりや」

色々な方面において自分と夫の隔離を意識していた彼女は、すぐこんな口が利きたくなつた。

健三の所へ嫁ぐ前の彼女は、自分の父と自分の弟と、それから官邸に出入する二、三の男を知っているぎりであつた。そうしてその人々はみんな健三とは異つた意味で生きて行くものばかりで

あつた。男性に対する観念をその数人から抽象して健三の所へ持つて来た彼女は、全く予期と反対した一個の男を、彼女の夫において見出した。彼女はそのどつちかが正しくなければならぬと思つた。無論彼女の眼には自分の父の方が正しい男の代表者の如くに見えた。彼女の考えは單純であつた。今にこの夫が世間から教育されて、自分の父のように、型が變つて行くに違ないという確信を有^もつていた。

案に相違して健三は頑^{がんきよう}強であつた。同時に細君の膠^{こうちやくり}着^{ちやく}力^{よく}も固かつた。二人は二人同志で輕^{けいべつ}蔑^{べつ}し合つた。自分の父を何かにつけて標準に置きたがる細君は、ややともすると心の中で夫に反抗した。健三はまた自分を認めない細君を忌^{いまいま}々しく感じ

た。一刻な彼は遠慮なく彼女を眼下に見下す態度を公けにして憚らなかつた。

「じや貴夫が教えて下されば好いのに。そんなに他を馬鹿にばかりなさらないで」

「御前の方に教えてもらおうという気がないからさ。自分はもうこれで一人前だという腹があつちや、己にやどうする事も出来ないよ」

誰が盲従するものかという気が細君の胸にあると同時に、到底啓発しようがないではないかという弁解が夫の心に潜んでいた。二人の間に繰り返されるこうした言葉争いは古いものであつた。しかし古いだけで埒は一向開かなかつた。

健三はもう飽きたという風をして、手摺てずれのした貸本を投げ出した。

「読むなというんじゃない。それは御前の随意だ。しかし余あんまり眼を使わないようにしたら好いだろう」

細君は裁縫しごが一番好きであつた。夜眼よるが冴さえて寐ねられない時などは、一時でも二時でも構わずに、細い針の目を洋燈ランプの下に運ばせていた。長女か次女が生れた時、若い元氣に任せて、相当の時期が経過しないうちに、縫物を取上げたのが本もとで、大變視力を悪くした経験もあつた。

「ええ、針を持つのは毒ですけども、本位構わないでしょう。それも始終読んでいるんじゃないやありませんから」

「しかし疲れるまで読み続けない方が好かろう。でないと後で困る」

「なに大丈夫です」

まだ三十に足りない細君には過労の意味が能く解らなかった。彼女は笑って取り合わなかった。

「御前が困らなくつても己が困る」

健三はわざと手前勝手らしい事をいった。自分の注意を無にする細君を見ると、健三はよくこんな言葉遣いをしたがった。それがまた夫の悪い癖の一つとして細君には数えられていた。

同時に彼のノートは益細ますますかくなって行つた。最初蠅はえの頭位であつた字が次第に蟻ありの頭ほどに縮まって来た。何故なぜそんな小さな文

字を書かなければならないのかとさえ考えて見なかった彼は、殆^{ほと}んど無意味に洋筆^{ペン}を走らせてやまなかつた。日の光りの弱つた夕暮の窓の下、暗い洋燈^{ランプ}から出る薄い灯^{とも}火^{しび}の影、彼は暇さえあれば彼の視力を濫費^{らんぴ}して顧みなかつた。細君に向つてした注意をかつて自分に払わなかつた彼は、それを矛盾とも何とも思わなかつた。細君もそれで平氣らしく見えた。

八十五

細君の床が上げられた時、冬はもう荒れ果てた彼らの庭に霜柱^{きり}の錐^{きり}を立てようとしていた。

「大変荒れた事、今年は例より寒いようね」

「血が少なくなつたせいで、そう思うんだろう」

「そうでしょうかしら」

細君は始めて気が付いたように、両手を火鉢ひばちの上に翳かざして、自分の爪つめの色を見た。

「鏡を見たら顔の色でも分りそうなものなのにね」

「ええ、そりや分つてますわ」

彼女は再び火の上に差し延べた手を返して蒼白あおしろい頬ほを二、三度撫なでた。

「しかし寒い事も寒いんでしょう、今年は」

健三には自分の説明を聴かない細君が可笑おかしく見えた。

「そりや冬だから寒いに極きままっているさ」

細君を笑う健三はまた人よりも一倍寒がる男であつた。ことに近頃の冬は彼の身体からだに厳あたしく中つた。彼はやむをえず書斎に炬燵こたつを入れて、両りょうひざ膝から腰のあたりに浸しみ込む冷ひえを防いだ。神経衰弱の結果こう感ずるのかも知れないとさえ思わなかつた彼は、自分に対する注意の足りない点において、細君と異かわる所がなかつた。

毎朝夫を送り出してから髪に櫛くしを入れる細君の手には、長い髪の毛が何本となく残つた。彼女は梳すくたびに櫛の齒からに絡まるその抜毛を残おしげり惜気に眺めた。それが彼女には失なわれた血潮よりもかえつて大切らしく見えた。

「新らしく生きたものを^{こしら}え上げた自分は、その償いとして衰えて行かなければならない」

彼女の胸には微かに^{かす}こういう感じが湧いた。しかし彼女はその微かな感じを言葉に纏めるほどの頭を有^もつていなかった。同時にその感じには手柄をしたという誇りと、罰を受けたという恨みと、が交^{まじ}っていた。いずれにしても、新らしく生れた子が可愛^{かあい}くなるばかりであつた。

彼女はぐたぐたして手応えのない赤ん坊を手際よく抱き上げて、その丸い頬^{ほお}へ自分の唇を持つて行つた。すると自分から出たものはどうしても自分の物だという気が理窟なしに起つた。

彼女は自分の傍^{わき}にその子を置いて、また裁^{たち}ものの板の前に坐^{すわ}つた。

そうして時々針の手をやめては、暖かそうに寐ねているその顔を、心配そうに上から覗のぞき込んだ。

「そりや誰の着物だい」

「やっぱりこの子のです」

「そんなにいくつも要いるのかい」

「ええ」

細君は黙って手を運ばしていた。

健三は漸やっと気が付いたように、細君の膝ひざの上に置かれた大きな模様のある切地きれじを眺めた。

「それは姉から祝ってくれたんだろう」

「そうです」

「下らない話だな。金もないのに止せば好いのに」

健三から貰^{もら}った小遣^{うち}の中を割^さいて、こういう贈り物をしなければ

ば気の済まない姉の心持が、彼には理解出来なかった。

「つまり己^{おれ}の金で己^{おれ}が買ったと同じ事になるんだからな」

「でも貴夫^{あなた}に対する義理だと思つていらつしやるんだから仕方が

ありませんわ」

姉は世間でいう義理を克明に守り過ぎる女であつた。他^{ひと}から物を貰えばきつとそれ以上のものを贈り返そうとして苦しがつた。

「どうも困るね、そう義理々々つて、何が義理だかさっぱり解りやしない。そんな形式的な事をするより、自分の小遣^{ひだ}を比田に借りられないような用心でもする方がよっぽど増した」

こんな事に掛けると存外無神経な細君は、強いて姉を弁護しようとしなかつた。

「今にまた何か御礼をしますからそれで好いでしょう」

他を訪問する時に殆んど土産ものを持参した例のない健三は、

それでもまだ不審そうに細君の膝の上にあるめりんすを見詰めていた。

八十六

「だから元は御姉さんおあねえの所へ皆なが色んな物を持って来たんですって」

細君は健三の顔を見て突然こんな事をいい出した。――

「十のものには十五の返しをなさる御姉さんの氣性を知ってるもんだから、皆なその御礼を目的に何か呉れるんだそうですよ」

「十のものに十五の返しをするつたつて、高が五十銭が七十五銭になるだけじゃないか」

「それで沢山なんでしょう。そういう人たちは」

他ひとから見ると酔興ひととしか思われないほど細かなノートばかりこしら拵こしらえている健三には、世の中にそんな人間が生きていようとさえ思えなかつた。

「随分厄介な交際つきあいだね。だいち馬鹿々々しいじゃないか」

「傍はたから見れば馬鹿々々しいようですけれども、その中に入ると、

やっぱり仕方がないんでしょ」

健三はこの間よそから臨時に受取った三十円を、自分がどう消費してしまったかの問題について考えさせられた。

今から一カ月余り前、彼はある知人に頼まれてその男の経営する雑誌に長い原稿を書いた。それまで細かいノートより外に何も作る必要のなかった彼に取つてのこの文章は、違った方面に働いた彼の頭脳の最初の試みに過ぎなかった。彼はただ筆の先に滴^{したた}る面白い気分^にに駆られた。彼の心は全く報酬を予期していなかった。依頼者が原稿料を彼の前に置いた時、彼は意外なものを拾ったように喜んだ。

兼^{かね}てからわが座敷の如何^{いか}にも殺風景なのを苦に病んでいた彼は、

すぐ団だんござか子坂にある唐木からきの指物師さしものしの所へ行つて、紫檀したんの懸額かけがくを一枚作らせた。彼はその中に、支那から歸つた友達に貰もらつた北ほ魏くぎの二十品にじつぴんという石いし摺すりのうちにある一つを扱えり出して入れた。それからその額を環かんの着いた細長い胡麻竹ごまだけの下へ振ぶら下げて、床の間の釘くぎへ懸けた。竹に丸味があるので壁に落付おちつかないせいか、額は静かな時でも斜ななめに傾かたいた。

彼はまた団子坂を下りて谷中やなかの方へ上のぼつて行つた。そうして其そ所にある陶器店から一個の花はな瓶びんを買かつて來た。花瓶は朱色であつた。中に薄い黄で大きな草花が描かれていた。高さは一尺余りであつた。彼はすぐそれを床の間の上へ載せた。大きな花瓶とふらふらする比較的小さい懸額とはどうしても釣合が取れなかつた。

彼は少し失望したような眼をしてこの不調和な配合を眺めた。けれどもまるで何にもないよりは増しだと考えた。趣味に贅ぜい沢たくをいう余裕のない彼は、不満足の中に満足しなければならなかった。

彼はまた本郷通りにある一軒の呉服屋へ行つて反たん物ものを買つた。織物について何の知識もない彼はただ番頭が見せてくれるものの中から、好いい加減な選択をした。それはむやみに光るかすり緋かすりであった。幼稚な彼の眼には光らないものより光るものの方が上等に見えた。番頭そろに揃はいの羽織はおりと着物こしらを拵こしらへるべく勧められた彼は、遂に一匹の伊勢崎銘仙いせざきめいせんを抱えて店を出た。その伊勢崎銘仙という名前さえ彼はそれまでついぞ聞いた事がなかった。

これらの物を買とい調とのえた彼は毫ごうも他人について考えなかった。

新らしく生れる子供さえ眼中になかった。自分より困こっている人の生活などはてんから忘れていた。俗社会の義理を過かちよう重する姉に比べて見ると、彼は憐あわれなものに対する好意すら失うなっていた。

「そう損そんをしてまでも義理が尽されるのは偉いね。しかし姉は生れ付みえいての見栄坊ぼうなんだから、仕方がない。偉くない方がまだ増しだろう」

「親切しんせつぎ気はまるでないでしょうか」

「そうさな」

健三はちよつと考えなければならなかった。姉は親切気のある女に違いなかった。

「ことによると己おれの方が不人情に出来ているのかも知れない」

八十七

この会話がまだ健三の記憶を新しく彩いろどっていた頃、彼は御常おつねから第二回の訪問を受けた。

先達せんだつて見た時とほぼ同じように粗末な服装なりをしている彼女の恰好かっこうは、寒さと共に襦袢じゆばん胴着どうぎの類でも重ねたのだろう、前まよりは益丸ますますまっちくなっていた。健三は客のために出した火鉢ひばちをすぐその人の方へ押し遣やった。

「いえもう御構きようい下さいますな。今日けふは大分だいぶん御暖おあつたかで御座いま

すから」

外部そとには穏やかな日が、障子に簾はめめた硝子ガラス越しに薄く光つていた。

「あなたは年を取って段々御肥おふとりになるようですね」

「ええ御蔭かげさまで身体からだの方はまことに丈夫で御座います」

「そりや結構です」

「その代り身しんしょう上うの方はただ瘦やせる一方で」

健三には老後になつてからこうむくむく肥る人の健康が疑がわれた。少なくとも不自然に思われた。どこか不気味に見えるところもあった。

「酒でも飲むんじゃないだろうか」

こんな推察さえ彼の胸を横切った。

御常の肌身はだみに着けているものは悉ことごととく古びていた。幾度水いくたびを

潜くぐったか分らないその着物なり羽織はおりなりは、どこかに絹の光が残

っているようで、また変にごつごつしていた。ただどんなに時代

を食つても、綺麗きれいに洗あら張はりが出来ている所に彼女の気性が見え

るだけであつた。健三は丸いながら如何いかにも窮屈きうくつそうなその人の

姿を眺めて、彼女の生活状態と彼女の口に距離のない事を知った。

「どこを見ても困る人だらけで弱りますね」

「こちらなどが困つていらしつちやあ、世の中に困らないものは一人も御座いません」

健三は弁解する気にさえならなかった。彼はすぐ考えた。

「この人は己おれを自分より金持と思つてゐるように、己を自分より丈夫だとも思つてゐるのだろう」

近頃の健三は實際健康を損そこなつてゐた。それを自覚しつつ彼は医者にも診みてもらなかつた。友達にも話さなかつた。ただ一人で不愉快を忍んでゐた。しかし身体の未来を想像するたんびに彼はむしやくしやした。或時は他ひとが自分をこんなに弱くしてしまつたのだというような氣を起して、相手のないのに腹を立てた。

「年が若くつて起居たちいに不自由さえなければ丈夫だと思ふんだろう。
門もん構がまの宅うちに住すんで下女げじよさえ使つていれば金でもあると考えるように」

健三は黙つて御常の顔を眺めてゐた。同時に彼は新らしく床とこの

間に飾まられた花瓶はないけとその後そでに懸かけつてゐる懸額がくとを眺めた。近いうちに袖そでを通すべきぴかぴかする反物たんものも彼の心のうちにあつた。彼はなぜ何故この年寄に対して同情を起し得ないのだろうかと怪しんだ。

「ことによると己の方が不人情なのかも知れない」

彼は姉の上に加えた評をもう一遍腹の中で繰り返した。そうして「何不人情でも構うものか」という答を得た。

御常は自分の厄介になつてゐる娘婿の事について色々な話をし始めた。世間一般によく見る通り、その人の手腕うでがすぐ彼女の問題になつた。彼女の手腕というのは、つまり月々入る金の意味で、その金より外に人間の価値を定めるものは、彼女に取つて、広い

世界に一つも見^み当^{あた}らないらしかった。

「何しろ取^{とり}高^{だか}が少ないもんですから仕方が御座いません。もう少し稼^{かせ}いでくれると好いのですけれども」

彼女は自分の娘婿^{つら}を捉^{とら}まえて愚^や図^ぐだとも無^む能^{のう}だともいわない代りに、毎月彼の労力が産み出す収入の高を健三の前に並べて見せた。あたかも物^{もの}指^{さし}で反物の寸法さえ計れば、縞^{しま}柄^{がら}だの地質だのは、まるで問題にならないといった風に。

生^{あいにく}憎^{にく}健三はそうした尺度で自分を計ってもらいたくない商売をしている男であつた。彼は冷淡に彼女の不平を聞き流さなければならなかつた。

八十八

好い加減な時分に彼は立つて書斎に入った。机の上に載せてある紙入を取つて、そつと中を改めると、一枚の五円札があつた。

彼はそれを手に握つたまま元の座敷へ歸つて、御常の前へ置いた。

「失礼ですがこれで俵^{くるま}へでも乗つて行つて下さい」

「そんな御心配を掛けては済みません。そういうつもりで上^{あが}つたのでは御座いませんから」

彼女は辞退の言葉と共に紙幣を受け納めて懷^{ふところ}へ入れた。

小遣^やを遣^やる時の健三がこの前と同じ挨拶^{あいさつ}を用いたように、そ

れを貰^{もら}う御常の辞令も最初と全く違わなかつた。その上偶然にも

五円という金かねだか高さえ一致していた。

「この次来た時に、もし五円札がなかったらどうしよう」

健三の紙入がそれだけの実質で始終充たされていない事はその所有主の彼に知れているばかりで、御常に分るはずがなかった。

三度目に来る御常を予想した彼が、三度目に遣る五円を予想する訳に行かなかった時、彼はふと馬鹿々々しくなった。

「これからあの人があると、何時でも五円遣らなければならないような気がする。つまり姉が要いらざる義理立ぎりだてをするのと同じ事なのかしら」

自分の関係した事じゃないといった風に熨斗ひのしを動かしていた細

君は、手を休めずにこういった。――

「ないときは遣らないでも好いじやありませんか。何もそう見栄を張る必要はないんだから」

「ない時に遣ろうったって、遣れないのは分つてゐるさ」

二人の間答はすぐ途切れてしまった。消えかかった炭を熨斗から火鉢へ移す音がその間に聞こえた。

「どうしてまた今日は五円入つていたんです。貴夫の紙入に」

健三は床の間に釣り合わない大きな朱色の花瓶を買うのに四

円いくらか払った。懸額を眺めるととき五円なにがしか取られ

た。指物師が百円に負けて置くから買わないかといった立派な

紫檀の書棚をじろじろ見ながら、彼はその二十分の一にも足らな

い代価を大事そうに懷中から出して匠人の手に渡した。彼は

またぴかぴかする一匹の伊勢崎銘仙いせざきめいせんを買うのに十円余りを費やした。友達から受取った原稿料がこう形を変えたあとに、手垢てあかの付いた五円札がたった一枚残ったのである。

「実はまだ買いたいものがあるんだがな」

「何を御買いになるつもりだったの」

健三は細君の前に特別な品物の名前を挙げる事が出来なかった。

「沢山あるんだ」

慾に際限のない彼の言葉は簡単であつた。夫と懸け離れた好尚をも有っている細君は、それ以上追窮する面倒を省いた代りに、外の質問を彼に掛けた。

「あの御婆おばあさんは御姉おあねえさんなんぞよりよっぽど落ち付いているの

ね。あれじゃ島田って人と宅^{うち}で落ち合つても、そう喧嘩^{けんか}もしないでしょう」

「落ち合わないからまだ仕合せなんだ。二人が一所の座敷で顔を見合せでもして見るがいい、それこそ堪^{たま}らないや。一人ずつ相手にしているんでさえ沢山な所へ持つて来て」

「今でもやつぱり喧嘩が始まるでしょうか」

「喧嘩はとにかく、己^{おれ}の方が厭^{いや}じやないか」

「二人ともまだ知らないようね。片っ方が宅^{うち}へ来る事を」

「どうだか」

島田はかつて御常の事を口にしなかった。御常も健三の予期に反して、島田については何にも語らなかつた。

「あの御婆さんの方がまだあの人より好いでしよう」

「どうして」

「五円貰うと黙って帰って行くから」

島田の請求慾の訪問ごとに増長するのに比べると、御常の態度は尋常に違なかつた。

八十九

日ならず鼻の下の長い島田の顔がまた健三の座敷に現われた時、彼はすぐ御常の事を聯想した。

彼らだつて生れ付いての敵同志でない以上、仲の好い昔もあつ

たに違ひない。他ひとから爪つめに灯ひを点ともすようだといわれるのも構わずに、金ばかり溜ためた当時は、どんなに楽しかったろう。どんな未来の希望に支配しかれていただろう。彼らに取むつて睦むましきの唯一の記念とも見るべきその金がどこかへ飛んで行いってしまった後あと、彼らは夢のような自分たちの過去を、果してどう眺めているだろう。

健三はもう少しで御常の話を島田にするところであつた。しかし過去に無感覚な表情しか有もたない島田の顔は、何事も覚えていないように鈍どんかつた。昔の憎どう悪お、古ふるい愛あい執しゅう、そんなものは當時の金と共に彼の心から消え失せてしまつたと思われなかつた。

彼は腰から烟草タバコ入いれを出して、刻み烟草を雁首がんくびへ詰めた。吸す

いがら
殻を落すときには、左てのひらで烟管キセルを受けて、火鉢ひばちの縁たたを敲たたかな
かった。脂やにが溜たまっていると見えて、吸う時にじゅじゅ音がした。

彼は無言で懷ふところ中を探った。それから健三の方を向いた。

「少し紙はありませんか、生憎あいにく烟管が詰こつて」

彼は健三から受取った半紙を割さいて小撚こよりを拵こしらえた。それで二返
も三返も羅宇ラウの中を掃除した。彼はこういう事をするのに最も馴な
れた人であつた。健三は黙つてその手際を見ていた。

「段々暮になるんでさぞ御忙がしいでしょう」

彼は疎通とおりの好くなつた烟管をぷつぷつと心持好きそうに吹きな
がらこういつた。

「我々の家業は暮も正月もありません。年が年中同じ事です」

「そりや結構だ。大抵の人はそうは行きませんよ」

島田がまだ何かいおうとしているうちに、奥で子供が泣き出した。

「おや赤ん坊のようですね」

「ええ、つい此こないだ間生れたばかりです」

「そりやどうも。些ちつとも知りませんでした。男ですか女ですか」

「女です」

「へええ、失礼だがこれで幾いくたり人目ですか」

島田は色々な事を訊きいた。それに相当な受うけ応こたえをしている健

三の胸にどんな考えが浮かんでいるかまるで気が付かなかった。

出産率が殖えると死亡率も増すという統計上の議論を、つい四、

五日前ある外国の雑誌で読んだ健三は、その時赤ん坊がどこかで一人生れれば、年寄が一人どこかで死ぬものだというような理窟とも空想とも付かない変な事を考えていた。

「つまり身代りに誰かが死ななければならぬのだ」

彼の観念は夢のようにぼんやりしていた。詩として彼の頭をぼうつと侵すだけであつた。それをもつと明めいりよう瞭になるまで理解

の力で押し詰めて行けば、その身代りは取も直さず赤ん坊の母親に違なかつた。次には赤ん坊の父親でもあつた。けれども今の健

三は其そこ所まで行く気はなかつた。ただ自分の前にいる老人にだけ

意味のある眼まなこを注いだ。何のために生きているか殆んど意義ほとの認め

めようのないこの年寄は、身代りとして最も適当な人間に違なか

った。

「どういう訳でこう丈夫なのだろう」

健三は殆んど自分の想像の残酷さ加減さえ忘れてしまった。そうして人並でないわが健康状態については、毫ごうも責任がないものの如き忌々いまいましさを感じた。その時島田は彼に向つて突然こういつた。――

「御縫おぬいもとうとう亡くなつてね。御祝儀は済んだが」

とても助からないという事だけは、脊髓せきずい病びょうという名前から推おして、とうに承知していたようなものの、改まってそういわれて見ると、健三も急に氣の毒になった。

「そうですか。可愛かわいそう想そうに」

「なに病氣が病氣だからとても癒^{なほ}りっこないんです」

島田は平然としていた。死ぬのが当り前だといったように烟草の輪を吹いた。

九十

しかしこの不幸な女の死に伴なつて起る經濟上の影響は、島田に取つて死そのものよりも遙^{はるか}に重大であつた。健三の予想はすぐ事實となつて彼の前に現れなければならなかつた。

「それについて是非一つ聞いてもらわないと困る事があるんですが」

此所^{ここ}まで来て健三の顔を見た島田の様子は緊張^{あつ}していた。健三は聴^きかない先からその後を推察^{あつ}する事が出来た。

「また金でしょう」

「まあそうで。御縫が死んだんで、柴野と御藤との縁が切れちまつたもんだから、もう今までのように月々送らせる訳に行かなくなつたんでね」

島田の言葉は変にぞんざいになったり、また鄭寧^{ていねい}になったりした。

「今までは金^{きん}鵠^く勲^{しゅん}章^{しょう}の年金だけはちゃんちやんとこつちへ来たんですがね。それが急になくなると、まるで目的^{あて}が外れるような始末^{はつまつ}で、私も困るんです」

彼はまた調子を改めた。

「とにかくこうなつちや、御前を措おいてもう外に世話をしてもらう人は誰もありません。だからどうかしてくれなくつちや困る」
「そう他ひとにのし懸ひつて来たつて仕方がありません。今の私わたくしにはそれだけの事をしなければならぬ因縁いんねんも何もないんだから」

島田は凝じつと健三の顔を見た。半ば探りを入れるような、半ば弱いものを脅かすようなその眼付は、単に相手の心を激げつ昂こうさせるだけであつた。健三の態度から深ふかい入の危険を知つた島田は、すぐ問題を区切つて小さくした。

「永い間の事はまた緩ゆる々御話しをするとして、じゃこの急場だけでも一つ」

健三にはどういふ急場が彼らの間に持ち上っているのか解らなかつた。

「この暮を越さなくつちやならないんだ。どこの宅だつて暮になりや百と二百と纏まとつた金の要いるのは当り前だろう」

健三は勝手にしろという氣になつた。

「私にそんな金はありませんよ」

「笑じょうだん談 いつちやいけない。これだけの構かまえをしていて、その位の融通が利かないなんて、そんなはずがあるもんか」

「あつてもなくつても、ないからなというだけの話です」

「じやいうが、御前の収入は月に八百円あるそうじやないか」

健三はこの無茶苦茶な言いいが掛かりに怒おこらされるよりはむしろ驚ろ

かされた。

「八百円だろうが千円だろうが、私の収入は私の収入です。貴方^{あなた}の関係した事じゃありません」

島田は其所^{そこ}まで来て黙った。健三の答が自分の予期に外れたと
いうような風も見えた。ずうずうしい割に頭の発達していない彼
は、それ以上相手をどうする事も出来なかった。

「じやいくら困つても助けてくれないというんですね」

「ええ、もう一文も上ません」

島田は立ち上った。沓脱^{くつぬぎ}へ下りて、開けた格子^{こうし}を締める時に、

彼はまた振り返った。

「もう参^{あが}上りませんから」

最後であるらしい言葉を一句遺した彼の眼は暗い中に輝やいた。健三は敷居の上に立つて明らかにその眼を見下した。しかし彼はその輝きのうちに何らの凄さも怖ろしさもまた不気味さも認めなかった。彼自身の眸から出る怒りと不快とは優にそれらの襲撃を跳ね返すに充分であつた。

細君は遠くから暗に健三の気色を窺つた。

「一体どうしたんです」

「勝手にするが好いや」

「また御金でも呉れろって来たんですか」

「誰が遣るもんか」

細君は微笑しながら、そつと夫を眺めるような態度を見せた。

「あの御婆おばあさんの方が細く長く続くからまだ安全ね」

「島田の方だつて、これで片付くもんかね」

健三は吐き出すようにこういつて、来きたるべき次の幕さえ頭の中に予想した。

九十一

同時に今まで眠っていた記憶も呼び覚まされずには済まなかつた。彼は始めて新らしい世界に臨む人の鋭どい眼をもつて、実家へ引き取られた遠い昔を鮮明あざやかに眺めた。

実家の父に取つての健三は、小さな一個の邪魔物であつた。何

しにこんな出来損いできそこなが舞い込んで来たかという顔付をした父は、殆んど子としての待遇を彼に与えなかつた。今までと打つて變つた父のこの態度が、生の父うみに対する健三の愛情を、根こぎにして枯らしつくした。彼は養父母の手前始終自分に対してにこにこしていた父と、厄介物を背負いしよ込んでからすぐ慳貪けんどんに調子を改めた父とを比較して一度は驚ろいた。次には愛想あいそをつかした。しかし彼はまだ悲觀する事を知らなかつた。発育に伴なう彼の生氣は、いくら抑え付けられても、下からむくむくと頭を擡もたげた。彼は遂に憂鬱ゆううつにならずに済んだ。

子供を沢山有もつていた彼の父は、毫ごうも健三に依怙かかる気がなかつた。今に世話になろうという下心のないのに、金を掛けるのは一

錢でも惜しかった。繋つながる親子の縁で仕方なしに引き取ったようなものの、飯を食わせる以外に、面倒を見て遣やるのは、ただ損になるだけであつた。

その上肝心の本人は歸つて来ても籍は復もとらなかつた。いくら実家で丹精して育て上たにいたところで、いざという時に、また伴つれて行かれればそれまでであつた。

「食わずだけは仕方がないから食わして遣る。しかしその外の事はこつちじや構えない。先方むこうでするのが当然だ」

父の理窟はこうであつた。

島田はまた島田で自分に都合の好いい方からばかり事件の成なり行ゆきを觀望していた。

「なに実家へ預けて置きさえすればどうにかするだろう。その内健三が一人前になつて少しでも働らせるようになったら、その時おもてぎた表沙汰にしてもこつちへ奪還ふんだくつてしまえばそれまでだ」

健三は海にも住めなかつた。山にもいられなかつた。両方から突き返されて、両方の間をまごまごしていた。同時に海のものも食い、時には山のものにも手を出した。

実父から見ても養父から見ても、彼は人間ではなかつた。むしろ物品であつた。ただ実父が我楽多がらくたとして彼を取り扱つたのに対して、養父には今に何かの役に立てて遣ろうという目算があるだけであつた。

「もうこつちへ引き取つて、きゆうじ給仕でも何でもさせるからそう思

うがいい」

健三が或日養家を訪問した時に、島田は何かのついでにこんな事をいった。健三は驚ろいて逃げ帰った。酷薄こはくという感じが子供心に淡い恐ろしさを与えた。その時の彼は幾歳いくつだったか能く覚えていないけれども、何でも長い間の修業をして立派な人間きぎになつて世間に出なければならぬという慾が、もう充分萌もしている頃であつた。

「給仕になんぞされては大変だ」

彼は心のうちで何遍も同じ言葉を繰り返した。さいわい幸にしてその言葉は徒勞むだに繰り返されなかつた。彼はどうかこうか給仕にならずに済んだ。

「しかし今の自分はどうして出来上ったのだろう」

彼はこう考えると不思議でならなかった。その不思議のうちに
は、自分の周囲と能く闘い終^おせたものだという誇りも大分交^{だいぶまじ}つて
いた。そうしてまだ出来上らないものを、既に出来上ったように
見る得意も無論含まれていた。

彼は過去と現在との対照を見た。過去がどうしてこの現在に発
展して来たかを疑がった。しかもその現在のために苦しんでいる
自分にはまるで気が付かなかった。

彼と島田との関係が破裂したのは、この現在の御蔭であつた。
彼が御常を忌^いむのも、姉や兄と同化し得ないのもこの現在の御蔭
であつた。細君の父と段々離れて行くのもまたこの現在の御蔭に

違なかつた。一方から見ると、他と反が合わなくなるように、現在の自分を作り上げた彼は氣の毒なものであつた。

九十二

細君は健三に向つていった。――

「貴夫あなたに氣に入る人はどうせどこにもいないでしょうよ。世の中はみんな馬鹿ばかりですから」

健三の心はこうした諷刺ふうしを笑つて受けるほど落付おちついていなかった。周囲の事情は雅量に乏しい彼を益窮屈ますますにした。

「御前は役に立ちさえすれば、人間はそれで好いと思つてい

だろう」

「だつて役に立たなくつちや何にもならないじゃありませんか」

生憎あいにく細君の父は役に立つ男であつた。彼女の弟もそういう方

面にだけ発達する性質たちであつた。これに反して健三は甚だ実用に遠い生れ付であつた。

彼には転宅の手伝いすら出来なかつた。大掃除の時にも彼は懐ふところとこで手てをしたなり澄こましていた。行李こうり一つ絡からげるにさえ、彼は細ほ紐そびきをどう渡すべきものやら分らなかつた。

「男のくせに」

動かない彼は、傍はたのものの眼に、如何いかにも気の利かない鈍物のように映つた。彼はなおさら動かなかつた。そうして自分の本領

を益^{ます}反對の方面に移して行つた。

彼はこの見地から、昔し細君の弟を、自分の住んでいる遠い田舎^{なか}へ^つ伴れて行つて教育しようとした。その弟は健三から見ると如何にも生意氣であつた。家庭のうちを横行して誰にも遠慮会釈がなかつた。ある理学士に毎日自宅で課業の復習をしてもらう時、彼はその人の前で構わず胡坐^{あぐら}をかいた。またその人の名を何君何君と君づけに呼んだ。

「あれじゃ仕方がない。^{わたくし}私に御預けなさい。私が田舎へ連れて行つて育てるから」

健三の申^{もうし}出は細君の父によつて黙つて受け取られた。そうして黙つて捨てられた。彼は眼前に横暴^{ほしいま}を恣にする我子を見て、

何という未来の心配も抱^{いだ}いていないように見えた。彼ばかりか、細君の母も平気であつた。細君も一向気に掛ける様子がなかつた。「もし田舎へ遣^やつて貴夫と衝突したり何^{なん}かすると、折合が悪くなつて、後が困るから、それでやめたんだそうです」

細君の弁解を聞いた時、健三は満^{まん}更^{ざら}の嘘^{うそ}とも思わなかつた。けれどもその他^{ほか}にまだ意味が残っているようにも考えた。

「馬鹿じゃありません。そんな御世話にならなくつても大丈夫です」

周囲の様子から健三は謝絶の本意がかえつて此^{ここ}所にあるのではなからうかと推察した。

なるほど細君の弟は馬鹿ではなかつた。むしろ怜^{りこ}悧^{こう}過ぎた。健

三にもその点はよく解っていた。彼が自分と細君の未来のために、彼女の弟を教育しようとしたのは、全く見当の違った方面にあつた。そうして遺憾ながらその方面は、今日こんにちに至るまでいまだに細君の父母にも細君にも了解されていなかった。

「役に立つばかりが能じゃない。その位の事が解らなくってどうするんだ」

健三の言葉は勢いけんぺい権柄けんぺいづくであつた。傷けきずつられた細君の顔には不満の色がありありと見えた。

機嫌の直つた時細君はまた健三に向つた。――

「そう頭からがみがみいわないで、もっと解るようにいつて聞かして下すつたら好いいいでしょう」

「解るようにいおうとすれば、理窟ばかり捏ね返すっていうじゃないか」

「だからもつと解りやすいように。私に解らないような小六こむずかしい理窟はやめにして」

「それじゃどうしたって説明しようがない。数字を使わずに算術を遣れと注文するのと同じ事だ」

「だって貴夫の理窟は、他ひとを捻ねじ伏せるために用いられるとより外に考えようのない事があるんですもの」

「御前の頭が悪いからそう思うんだ」

「私の頭も悪いかも知れませんが、中味のない空っぽの理窟で捻じ伏せられるのは嫌きらいですよ」

二人はまた同じ輪の上をぐるぐる廻り始めた。

九十三

面と向つて夫としつくり融け合う事の出来ない時、細君はやむをえず彼に背中を向けた。そうして其所そこに寐ねている子供を見た。

彼女は思い出したように、すぐその子供を抱き上げた。

章魚たこのようにぐにやぐにやしている肉の塊りと彼女との間には、理窟の壁も分別の牆かきもなかった。自分の触れるものが取も直さず自分のような気がした。彼女は温かい心を赤ん坊の上に吐き掛けるために、唇を着けて所嫌せつぷんわず接吻した。

「貴夫が私のものでなくつても、この子は私の物よ」
あなたわたくし

彼女の態度からこうした精神が明らかに読まれた。

その赤ん坊はまだめはなだち眼鼻立さえ判明していなかった。頭には何

時まで待つても殆んど毛らしい毛が生えて来なかった。公平な眼
ほとから見ると、どうしても一個の怪物であつた。

「変な子が出来たものだなあ」

健三は正直な所をいった。

「どこの子だつて生れたては皆なこの通りです」

「まさかそうでもなからう。もう少しは整つたのも生れるはずだ」

「今に御覧なさい」

細君はさも自信のあるような事をいった。健三には何という見

当も付かなかつた。けれども彼は細君がこの赤ん坊のために夜^{やちゆ}中^う何度となく眼を覚ますのを知っていた。大事な睡眠を犠牲にして、少しも不愉快な顔を見せないのも承知していた。彼は子供に対する母親の愛情が父親のそれに比べてどの位強いかの疑問にさえ逢^{ほう}着^{ちやく}した。

四、五日前少し強い地震のあつた時、臆^{おく}病^{びよう}な彼はすぐ縁^{えん}から庭へ飛び下りた。彼が再び座敷へ上^{あが}つて来た時、細君は思いも掛けない非難を彼の顔に投げ付けた。

「貴夫は不人情ね。自分一人好ければ構わない気なんだから」
何^{なぜ}故^な子供^{こども}の安危^{あんき}を自分より先に考えなかつたかというのが細君の不平等であつた。咄^{とつ}嗟^さの衝動から起つた自分の行為に対して、こ

んな批評を加えられようとは夢にも思っていなかった健三は驚ろいた。

「女にはああいう時でも子供の事が考えられるものかね」

「当り前ですわ」

健三は自分が如何いかにも不人情のような気がした。

しかし今の彼は我物顔に子供を抱いている細君を、かえつて冷ひやかに眺めた。

「訳の分らないものが、いくら束になつたつて仕様がない」

しばらくすると彼の思索がもっと広い区域にわたつて、現在から遠い未来に延びた。

「今にその子供が大きくなって、御前から離れて行く時期が来る

に極きまっている。御前は己おれと離れても、子供とさえ融け合つて一つになつていれば、それで沢山だという氣でいるらしいが、それは間違だ。今に見ろ」

書齋おちつに落付いた時、彼の感想がまた急に科学的色彩を帯び出した。

「芭蕉ばしょうに実が結なると翌あくるとし年からその幹は枯れてしまう。竹も同じ事である。動物のうちには子を生むために生きているのか、死ぬために子を生むのか解らないものがいくらでもある。人間も緩慢ながらそれに準じた法則にやツぱり支配されている。母は一旦自分の所有するあらゆるものを犠牲にして子供に生を与えた以上、また余りのあらゆるものを犠牲にして、その生を守護しなけ

ればなるまい。彼女が天からそういう命令を受けてこの世に出たとするならば、その報酬として子供を独占するのは当たり前だ。故意というよりも自然の現象だ」

彼は母の立場をこう考え尽した後、^{あと}父としての自分の立場をも考えた。そうしてそれが母の場合とどう違っているかに思い^{いた}到つた時、彼は心のうちでまた細君に向つていった。

「子供を有^もつた御前は仕合せである。しかしその仕合を享^うける前に御前は既に多大な犠牲を払っている。これから先も御前の気の付かない犠牲をどの位払うか分らない。御前は仕合せかも知れないが、実は気の毒なものだ」

九十四

年は段々暮れて行つた。寒い風の吹く中に細かい雪片がちらちらと見え出した。子供は日に何度となく「もういくつ寝ると御正月」という唄をうたつた。彼らの心は彼らの口にする唱歌の通りであつた。来るべき新年の希望に充ちていた。

書齋にいる健三は時々手に洋筆ペンを持つたまま、彼らの声に耳を傾けた。自分にもああいふ時代があつたのかしらなどと考えた。

子供はまた「旦那の嫌な大晦日」という毬歌まりうたをうたつた。

健三は苦笑した。しかしそれも今の自分の身の上には痛切に的あて中まらなかつた。彼はただ厚い四よつ折の半紙の束を、十とおも二十も

机の上に重ねて、それを一枚ごとに読んで行く努力に悩まされていた。彼は読みながらその紙へ赤い印気インキで棒を引いたり丸を書いたり三角を附けたりした。それから細かい数字を並べて面倒な勘定もした。

半紙に認ためられたものは悉く鉛筆の走り書なので、光線の暗い所では字画さえ判然はんぜんしないのが多かった。乱暴で読めないものも時々出て来た。疲れた眼を上げて、積み重ねた束を見る健三は落がつかり胆はした。「ペネロピーの仕事」という英語の俚諺ことわざが何遍となのぼく彼の口の上の上った。

「何時まで経ったって片付きやしない」
彼は折々筆を擱おいて溜息ためいきをついた。

しかし片付かないものは、彼の周囲前後にまだいくらでもあった。彼は不審な顔をしてまた細君の持つて来た一枚の名刺に眼を注がなければならなかった。

「何だい」

「島田の事についてちよつと御目に掛りたいっていうんです」

「今差^{さしつかえ}支^さるからつて返してくれ」

一度立つた細君はすぐまた戻つて来た。

「何時伺つたら好^いいか御都合を聞かして頂きたいんですつて」

健三はそれどころじゃないという顔をしながら、自分の傍^{そば}に高

く積み重ねた半紙の束を眺めた。細君は仕方なしに催促した。

「何といいましょう」

「明後日あさつての午後に来て下さいといつてくれ」

健三も仕方なしに時日を指定した。

仕事を中絶された彼はぼんやり烟草タバコを吹かし始めた。ところへ

細君がまた入って来た。

「帰ったかい」

「ええ」

細君は夫の前に広げてある赤い印しるしの附いた汚ならしい書きもの

を眺めた。夜中に何度となく赤ん坊のために起こされる彼女の面

倒が健三に解らないように、この半紙の山を綿密に読み通す夫の

困難も細君には想像出来なかった。――

調べ物を度外に置いた彼女は、坐すわるとすぐ夫に訊たずねた。――

「また何かそういつて来る気でしようね。執ツ濃い」

「暮のうちにどうかしようというんだらう。馬鹿らしいや」

細君はもう島田を相手にする必要がないと思つた。健三の心はかえつて昔の關係上多少の金を彼に遣る方に傾いていた。しかし話は其所^{そこ}まで発展する機会を得ずによそへ外^それてしまった。

「御前の宅^{うち}の方はどうだい」

「相變らず困るんでしよう」

「あの鐵道会社の社長の口はまだ出来ないのかい」

「あれは出来るんですつて。けれどもそうこつちの都合の好いように、ちよつくらちよいとという訳には行かないんでしよう」

「この暮のうちに六^むずかしいのかね」

「とても」

「困るだろうね」

「困つても仕方がありませんわ。何もかもみんな運命なんだから」
細君は割合に落付おちついていた。何事も諦あきらめられているらしく見えた。

九十五

見知らない名刺の持参者が、健三の指定した通り、中な一い日ち置にち
いて再び彼の玄関に現れた時、彼はまだささくれた洋筆先ペンさきで、粗
末な半紙の上に、丸だの三角だのと色々な特徴を附けるのに忙が
しかった。彼の指頭ゆびさきは赤い印気インキで所々汚よごれていた。彼は手も洗わ

ずにそのまま座敷へ出た。

島田のために来たその男は、前の吉田に比べると少し型を異ことにしていたが、健三からいえば、双方とも殆ほとんど差別のない位懸け離れた人間であつた。

彼は縞しまの羽織はおりに角帯かくおびを締めて白足袋しろたびを穿はいていた。商人とも紳士とも片の付かない彼の様子なり言葉遣なりは、健三に差配という一種の人柄を思い起させた。彼は自分の身分や職業を打ら明ける前に、卒然として健三に訊きいた。――

「貴方あなたは私の顔わたくしを覚えて御出おいでですか」

健三は驚ろいてその人を見た。彼の顔には何らの特徴もなかった。強しいていえば、今日こんにちまでただ世帯染しよたいじみて生きて来たとい

う位のものであった。

「どうも分りませんね」

彼は勝ち誇った人のように笑った。

「そうでしょう。もう忘れても好い時分ですから」

彼は区切を置いてまた附け加えた。

「しかし私やこれでも貴方の坊ちゃん坊ちゃんていわれた昔をまだ覚えていますよ」

「そうですか」

健三は素ツ気ない挨拶をしたなり、その人の顔を凝と見守つた。

「どうしても思い出せませんかね。じゃ御話ししましょう。私や

昔し島田さんが扱あつかい所じよを遣やつていなすった頃、あすこに勤めていたものです。ほら貴方が悪いたずら戯ずをして、小刀で指を切つて、大騒ぎをした事があるでしょう。あの小刀は私の硯すずり箱ばこの中にあつたんでさあ。あの時金かなだら盥らいに水を取つて、貴方の指を冷したのも私ですぜ」

健三の頭にはそうした事実が明らかにまだ保存されていた。しかし今自分の前に坐すわっている人のその時の姿などは夢にも憶おもい出せなかった。

「その縁故で今度また私が頼まれて、島田さんのために上あがつたような訳わけ合あいなんです」

彼は直すぐ本題に入つた。そうして健三の予期していた通り金の請

求をし始めた。

「もう再び御宅へは伺わないといつてますから」

「この間帰る時既にそういつて行つたんです」

「で、どうでしょう、此所ここいらで綺麗きれいに片を付ける事にしたら。

それでないと何時まで経つても貴方が迷惑するぎりですよ」

健三は迷惑を省いてやるから金を出せといった風な相手の口氣こうきを快よく思わなかつた。

「いくら引つ懸つていたつて、迷惑じゃありません。どうせ世の中の事は引つ懸りだらけなんですから。よし迷惑だとしても、出すまじき金を出す位なら、出さないで迷惑を我慢していた方が、わたし私にはよッぽど心持が好いんです」

その人はしばらく考えていた。少し困ったという様子も見えた。しかしやがて口を開いた時は思いも寄らない事をいい出した。

「それに貴方も御承知でしょうが、離縁の際貴方から島田へ入れた書付がまだ向うの手にありますから、この際いくらでも纏めたものを渡して、あの書付と引き易えになすった方が好くはありませんか」

健三はその書付を慥に覚えていた。^{たしか}彼が実家へ復籍する事になった時、島田は当人の彼から一札入れてもらいたいと主張したので、健三の父もやむをえず、何でも好いから書いて遣れと彼に注意した。何も書く材料のない彼は仕方なしに筆を執った。そうして今度離縁になったについては、^{こうご}向後御互に不義理不人情な事は

したくないものだという意味をわずか僅二行余に綴あまりつづて先方へ渡した。

「あんなものは反故ほご同然ですよ。向むこうで持っていてても役に立たず、

私が貰もらつても仕方がないんだ。もし利用出来る気ならいくらでも

利用したら好いでしょう」

健三にはそんな書付を売り付けに掛るその人の態度がなお気に入らなかつた。

九十六

話が行き詰るとその人は休んだ。それから好い加減な時分にまた同じ問題を取り上げた。いう事は散漫であつた。理で押せなけ

れば情に訴えるという風でもなかった。ただ物にさえすれば好いという料簡りようけんが露骨に見透かされた。収束するところなく共に動いていた健三はしまいに飽きた。

「書付を買えの、今に迷惑するのが厭いやなら金を出せのといわれるとこつちでも断るより外に仕方ありませんが、困るからどうかしてもらいたい、その代り向後一切無心がましい事はいつて来ないと保証するなら、昔の情義上少しの工面はして上げてても構いません」

「ええそれがつまり私わたくしの来た主意なんですから、出来るならどうかそう願いたいもんで」

健三はそんなら何故早くそういわないのかと思つた。同時に相

手も、何故もつと早くそういつてくれないのかという顔付をした。

「じやどの位出して下さいます」

健三は黙って考えた。しかしどの位が相当のところだか判明^{はつきり}した目安の出て来^きようはずはなかった。その上なるべく少ない方が彼の便宜であつた。

「まあ百円位なものですね」

「百円」

その人はこう繰り返した。

「どうでしょう、責^せめて三百円位にして遣^やる訳には行きますまいか」

「出すべき理由さえあれば何百円でも出します」

「御尤もだが、島田さんもああして困ってるもんだから」

「そんな事をいやあ、私^{わたし}だって困っています」

「そうですか」

彼の語気はむしろ皮肉であつた。

「元来一文も出さないといつたつて、貴方^{あなた}の方じやどうする事も出来ないんでしよう。百円で悪けりや御止^{およ}しなさい」

相手は漸く懸引^{ようやかけひき}をやめた。

「じやともかくも本人によくそう話して見ます。その上でまた上^{あが}る事にしますから、どうぞ何分」

その人が歸つた後で健三は細君に向つた。

「とうとう来た」

「どうしたっていいんです」

「また金を取られるんだ。人さえ来れば金を取られるに極^{きま}つてるから厭だ」

「馬鹿らしい」

細君は別に同情のある言葉を口へ出さなかつた。

「だつて仕方がないよ」

健三の返事も簡単であつた。彼は其所^{そこ}へ落付くまでの筋道^{くわ}を委しく細君に話してやるのさえ面倒だつた。

「そりや貴夫^{あなた}の御金を貴夫が御遣りになるんだから、私何^{わたくし}もいう訳はありませんわ」

「金なんかあるもんか」

健三は擲^たき付けるようにこういつて、また書齋へ入った。其所には鉛筆で一面に汚^{よご}された紙が所々赤く染つたまま机の上で彼を待つていた。彼はすぐ洋筆^{ペン}を取り上げた。そうして既に汚れたものをなおさら赤く汚さなければならなかった。

客に会う前と会つた後との気分の相違が、彼を不公平にしはしまいかとの恐れが彼の心に起つた時、彼は一旦読みおわつたものを念のためまた読んだ。それですら三時間前の彼の標準が今の標準であるかどうか、彼には全く分らなかつた。

「神でない以上公平は保てない」

彼はあやふやな自分を弁護しながら、ずんずん眼を通し始めた。しかし積重ねた半紙の束は、いくら速力を増しても尽きる期がな

かった。漸く一組を元のように折るとまた新らしく一組を開かなければならなかった。

「神でない以上辛抱だつてし切れない」

彼はまた洋筆^{ペン}を放り出した。赤い印氣^{インキ}が血のように半紙の上に滲^{にじ}んだ。彼は帽子を被^{かぶ}つて寒い往来へ飛び出した。

九十七

人通りの少ない町を歩いている間、彼は自分の事ばかり考えた。
「御前は必^{ひつきよう}竟何をしに世の中に生れて来たのだ」

彼の頭のどこかでこういう質問を彼に掛けるものがあつた。彼

はそれに答えたくなかった。なるべく返事を避けようとした。するとその声がなお彼を追窮し始めた。何遍でも同じ事を繰り返してやめなかった。彼は最後に叫んだ。

「分らない」

その声は忽ち^{たちま}せせら笑った。

「分らないのじやあるまい。分つていても、其所^{そこ}へ行けないのだらう。途中で引懸つてゐるのだらう」

「己^{おれ}のせいじやない。己のせいじやない」

健三は逃げるようにずんずん歩いた。

賑^{にぎ}やかな通りへ来た時、迎年の支度に忙しい外界は驚異に近い

新らしさを以て急に彼の眼を刺^{しげ}撃した。彼の気分は漸^{ようや}く変つた。

彼は客の注意を惹くために、あらゆる手段を尽して飾り立てられた店頭を、それからそれと覗き込んで歩いた。或時は自分と全く交渉のない、珊瑚樹の根懸だの、蔘絵の櫛笄だのを、硝子越ガラスごしに何の意味もなく長い間眺めていた。

「暮になると世の中の人はずっと何か買うものかしら」

少なくとも彼自身は何にも買わなかった。細君も殆んど何にも買わないといつてよかった。彼の兄、彼の姉、細君の父、どれを見ても、買えるような余裕のあるものは一人もなかった。みんな年を越すのに苦しんでいる連中ばかりであつた。中にも細君の父は一番非道ひどそうに思われた。

「貴族院議員になつてさえいれば、どこでも待つてくれるんだぞ

うですけれども」

借金取に責められている父の事情を夫に打ち明けたついでに、細君はかつてこんな事をいった。

それは内閣の瓦解がかいした当時であつた。細君の父を閑職から引つ張り出して、彼の辞職を余儀なくさせた人は、自分たちの退しりぞく間際に、彼を貴族院議員に推挙して、幾分か彼に対する義理を立てようとした。しかし多数の候補者の中うちから、限られた人員を選ばなければならなかつた総理大臣は、細君の父の名前の上に遠慮なく棒を引いてしまった。彼はついに選に洩もれた。何かの意味で保険の付いていない人にのみ酷薄であつた債権者は直ちに彼の門に逼せまつた。官邸を引き払つた時に召めしつかい仕の数を減らした彼は、

少時しばらくして自用俵じようぐるまを廃した。しまいになが住宅を挙げて人手に渡した頃は、もうどうする事も出来なかつた。日を重ね月を追つますますて益悲境に沈んで行つた。

「相場に手を出したのが悪いんですよ」

細君はこんな事もいった。

「御役人をしている間は相場師の方で儲もうけさせてくれるんですつて。だから好いいけれども、一旦役を退ひくと、もう相場師が構つてくれないから、みんな駄目になるんだそうです」

「何の事だか要領を得ないね。だいち意味さえ解らない」

「貴方あなたに解らなくつたつて、そうなら仕方がないじゃありませんか」

「何をいつてるんだ。それじゃ相場師は決して損をしつこないものに極^{きま}つちまうじやないか。馬鹿な女だな」

健三はその時細君と取り換わせた談話まで憶^{おも}い出した。

彼はふと気が付いた。彼と擦^すれ違^{ちが}う人はみんな急ぎ足に行き過ぎた。みんな忙がしそうであつた。みんな一定の目的を有^もつているらしかった。それを一刻も早く片付けるために、せつせと活動するとしか思われなかつた。

或者はまるで彼の存在を認めなかつた。或者は通り過ぎる時、ちよつと一瞥^{いちべつ}を与えた。

「御前は馬鹿だよ」

稀^{まれ}にはこんな顔付をするものさえあつた。

彼はまた宅へ歸つて赤い印氣インキを汚きたない半紙へなすくり始めた。

九十八

二、三日すると島田に頼まれた男がまた刺しを通じて面会を求めに来た。行掛り上斷る訳に行かなかつた健三は、座敷へ出て差配じみたその人の前に、再び坐すわるべく余儀なくされた。

「どうも御忙がしいところを度々たびたび出まして」

彼は世事慣れた男であつた。口で氣の毒そうな事をいう割に、それほど殊勝な様子を彼の態度のどこにも現わさなかつた。

「実はこの間の事を島田によく話しましたところ、そういう訳な

ら致し方がないから、金額はそれで宜よろしい、その代りどうか年内に頂ちようだい戴致したい、とこういふんですがね」

健三にはそんな見込がなかった。

「年内たつてももう僅わずかの日数しかないじゃありませんか」

「だから向うでも急ぐような訳でしてね」

「あれば今すぐ上げてても好いいんです。しかしないんだから仕方がないじゃありませんか」

「そうですか」

二人は少しば時無言のままでいた。

「どうでしょう、其所そこのところを一つ御奮発は願われますまいか。私も折角わたくしこうして忙がしい中を、島田さんのために、わざわざ遣や

つて来たもんですから」

それは彼の勝手であつた。健三の心を動かすに足るほどの手数てかずでも面倒でもなかつた。

「御氣の毒ですが出来ませんね」

二人はまた沈黙を間に置いて相対あいたいした。

「じゃ何時頃頂けるんでしよう」

健三には何時という目的あてもなかつた。

「いずれ来年にでもなつたらどうにかしましょう」

「私もこうして頼まれて上つた以上、何とか向むへ返事こたへをしなくつ

ちやなりませんから、せめて日限でも一つ御取極おとりきめを願いたいと思

います」

「御尤ごもつともです。じゃ正月一杯とでもして置きましょう」

健三はそれより外にいいようがなかった。相手は仕方なしに帰って行つた。

その晩寒さと倦怠けんたいを凌しのぐために蕎麦湯そばゆを拵こしらえてもらつた健三は、どろどろした鼠色のものを啜すすりながら、盆ひざを膝の上に置いて傍そばに坐つてゐる細君と話し合つた。

「また百円どうかしなくっちゃならない」

「貴夫あなたが遣やらないでも好いものを遣るって約束なんぞなさるから後で困るんですよ」

「遣らないでもいいのだけれども、己おれは遣るんだ」

言葉の矛盾がすぐ細君を不快にした。

「そう依故地えこじを仰おつしやればそれまでです」

「御前は人を理窟りくぽいとか何とかいつて攻撃するくせに、自分
や大變形式だいへいしきばった所のある女だね」

「貴夫こそ形式が御好きなんです。何事にも理窟が先に立つんだ
から」

「理窟と形式とは違うさ」

「貴夫のは同なじですよ」

「じやいつて聞かせるがね、己は口にだけ論ロジック理もを有もっている男
じやない。口にある論理は己の手にも足にも、身体からだ全体にもある
んだ」

「そんなら貴夫の理窟がそう空っぽうに見えるはずがないじやあ

りませんか」

「空っぽうじやないんだもの。丁度ころ柿の粉このようなもので、理窟うちが中から白く吹き出すだけなんだ。外部そとから喰く付つけた砂糖とは違ちがうさ」

こんな説明が既に細君には空っぽうな理窟であつた。何でも眼に見えるものを、しつかと手に掴つかまなくつては承知出来ない彼女は、この上夫と議論する事を好まなかつた。またしようと思つても出来なかつた。

「御前が形式張るというのはね。人間の内側はどうでも、外部そとへ出た所だけを捉つかまえさえすれば、それでその人間が、すぐ片付けられるものと思つているからさ。丁度御前の御父さんおとうが法律家だ

もんだから、証拠さえなければ文句を付けられる因縁いんねんがないと考えているようなもので……」

「父はそんな事をいった事なんぞありやしません。私だつてそう外部うわべばかり飾つて生きてる人間じゃありません。貴夫が不断からそんな僻ひがんだ眼ひとで他を見ていらつしやるから……」

細君の瞼まぶたから涙がぽたぽた落ちた。いう事がその間に断絶した。島田に遣る百円の話しが、飛んだ方角そへ外れた。そうして段々こんがらかつて来た。

九十九

また二、三日して細君は久しぶりに外出した。

「無沙汰見舞かたがた少し歳暮に廻つて来ました」
ぶさたみまい

乳呑児を抱いたまま健三の前へ出た彼女は、寒い頬ほおを赤くして、
ちのみこ

暖かい空氣の裡なかに尻しりを落付た。
おちつけ

「御前の宅うちはどうだい」

「別に変つた事ありません。ああなると心配を通り越して、か
 えつて平氣になるのかも知れませんね」

健三は挨拶あいさつの仕様もなかった。

「あの紫檀したんの机を買わないかつていうんですけれども、縁起が悪
 いから止よしました」

舞葡萄まいぶどうとかいう木の一枚板で中を張り詰めたその大きな唐とうづ

机くえは、百円以上もする見事なものであつた。かつて親類の破産者からそれを借金の抵当かたに取つた細君の父は、同じ運命の下もとに、早晩それをまた誰かに持つて行かなくてはならなかつたのである。

「縁起はどうでも好いいが、そんな高価たかいものを買かう勇氣は当分こつちにもなさそうだ」

健三は苦笑しながら烟草タバコを吹かした。

「そういえば貴夫あなた、あの人に遣やる御金を比田ひださんから借りなくつて」

細君は藪やぶから棒にこんな事をいった。

「比田にそれだけの余裕があるのかい」

「あるのよ。比田さんは今年限り株式の方をやめられたんですって」

健三はこの新らしい報知を当然とも思った。また異様にも感じた。

「もう老朽だろうからね。しかしやめられれば、なお困るだろうじゃないか」

「追ってはどうか知れないでしょうけれども、差^{さし}当^{あた}り困るような事はないんですって」

彼の辞職は自分を引き立ててくれた重役の一人が、社と関係を絶った事に起因しているらしかった。けれども永年勤続して来た結果、権利として彼の手に入るべき金は、一時彼の経済状態を潤

おすには充分であつた。

「居食いぐいをしていても詰らないから、確かな人があつたら貸したいからどうか世話をしてくれつて、今日頼まれて来たんです」

「へえ、とうとう金貸を遣るようになったのかい」

健三は平生へいぜいから島田の因業を嗤わらつていた比田だの姉だのを憶おもい浮べた。自分たちの境遇が變ると、昨日きのうまで輕蔑けいべつしていた人の真似まねをして恬てんとして氣の付かない姉夫婦は、反省の足りない点においてむしろ子供染じみていた。

「どうせ高利なんだろう」

細君は高利だか低利だかまるで知らなかつた。

「何でも旨うまく運轉すると月に三、四十円の利子になるから、それ

を二人の小遣にして、これから先細く長く遣つて行くつもりだつて、御姉おあねえさんがそう仰おつしやいましたよ」

健三は姉のいう利子の高から胸算用で元金もとぎんを勘定して見た。

「悪くすると、またみんな損すつちまうだけだ。それよりそう慾よくば

張らないで、銀行へでも預けて置いて相当の利子を取る方が安全

だがな」

「だから確たしかな人に貸したいっていうんでしよう」

「確な人はそんな金は借りないさ。怖いからね」

「だけど普通の利子じや遣つて行けないんでしよう」

「それじや己おれだつて借りるのは厭いやださ」

「御兄おあにいさんも困つていらしつてよ」

比田は今後の方針を兄に打ち明けると同時に、先ずその手始として、兄に金を借りてくれと頼んだのだそうである。

「馬鹿だな。金を借りてくれ、借りてくれって、こっちから頼む奴もないじゃないか。兄貴だって金は欲しいだろうが、そんな剣呑のん呑な思いまでして借りる必要もあるまいからね」

健三は苦々しいうちにも滑稽を感じた。比田の手前勝手な気性がこの一事でも能く窺われた。それを傍で見て澄ましている姉の料簡も彼には不可思議であつた。血が続いていても姉弟という心持は全くしなかつた。

「御前己が借りるとでもいったのかい」

「そんな余計な事いやしません」

百

利子の安い高いは別問題として、比田から融通してもらおうという事が、健三にはとても真面目に考えられなかった。彼は毎月いくらかずつの小遣を姉に送る身分であつた。その姉の亭主から今度はこつちで金を借りるとなると、矛盾は誰の眼にも映る位明白であつた。

「辻褄の合わない事は世の中にいくらでもあるにはあるが」
「こういう掛けた彼は突然笑いたくなつた。」

「何だか変だな。考えると可笑しくなるだけだ。まあ好いや己が

借りて遣^やらなくつてもどうにかなるんだろうから」

「ええ、そりや借手はいくらでもあるんでしよう。現にもう一口ばかり貸したんですつて。彼所^{あそこ}いらの待^{まち}合^{あい}か何かへ」

待合という言葉が健三の耳になおさら滑稽^{こっけい}に響いた。彼は我を忘れたように笑った。細君にも夫の姉の亭主が待合へ小金を貸したという事実が不調和に見えた。けれども彼女はそれを夫の名前に関わると思ふような性質^{たち}ではなかった。ただ夫と一所になつて面白そうに笑つていた。

滑稽の感じが去つた後で反動が来た。健三は比田について不愉快な昔まで思い出させられた。

それは彼の二番目の兄が病死する前後の事であつた。病人は平^へ

いぜい
生から自分の持っている両蓋の銀側時計を弟の健三に見せて、
「これを今に御前に遣ろう」と殆んど口癖くちくせのようにいつていた。
時計を所有した経験のない若い健三は、欲しくて堪らないその装
飾品が、何時になつたら自分の帯に巻き付けられるのだろうか
想像して、暗あんに未来の得意を予算に組み込みながら、一、二カ月
を暮した。

病人が死んだ時、彼の細君は夫の言葉を尊重して、その時計を
健三に遣るとみんなの前で明言した。一つは亡くなつた人の記念かたみ
とも見るべきこの品物は、不幸にして質に入れてあつた。無論健
三にはそれを受出す力がなかつた。彼は義姉あねから所有権だけを譲
り渡されたと同様で、肝心の時計には手も触れる事が出来ずに幾

日かを過ごした。

或日皆なが一つ所に落合った。するとその席上で比田が問題の時計を懐中^{ふところ}から出した。時計は見違えるように磨かれて光っていた。新らしい紐^{ひも}に珊瑚樹^{さんごじゆ}の珠^{たま}が裝飾として付け加えられた。彼はそれを勿体^{もったい}なく兄の前に置いた。

「それではこれは貴方^{あなた}に上げる事にしますから」
傍^{そば}にいた姉も殆んど比田と同じような口上を述べた。

「どうも色々御手数^{おてかず}を掛けまして、有難う。じゃ頂戴^{ちやうだい}します」
兄は礼をいってそれを受取った。

健三は黙って三人の様子を見ていた。三人は殆んど彼の其所^{そこ}にいる事さえ眼中に置いていなかった。しまいまで一言^{いちごん}も発しな

かつた彼は、腹の中で甚しい侮辱を受けたような心持がした。しかし彼らは平氣であつた。彼らの仕打を仇敵きゆうてきの如く憎んだ健三も、何故彼らがそんな面中つらあてがましい事をしたのか、どうしても考え出せなかつた。

彼は自分の權利も主張しなかつた。また説明も求めなかつた。ただ無言のうちに愛想あいそうを尽かした。そうして親身の兄や姉に対して愛想を尽かす事が、彼らに取つて一番非道ひどい刑罰に違なからうと判断した。

「そんな事をまだ覚えていらつしやるんですか。貴夫あなたも随分執念深いわね。御兄おあにいさんが御聴きになつたらさぞ御驚ろきなさるでしょう」

細君は健三の顔を見て暗にその気色けしきを伺った。健三はちつとも動かなかつた。

「執念深かろうが、男らしくなかつても、事實は事實だよ。よし
事實に棒を引いたって、感情を打ち殺す訳には行かないからね。
その時の感情はまだ生きているんだ。生きて今でもどこかで働い
ているんだ。己が殺しても天が復活させるから何にもならない」
「御金なんか借りさえしなきゃあ、それで好いじゃありませんか」
こういつた細君の胸には、比田たちばかりでなく、自分の事も、
自分の生家さとの事も勘定に入れてあつた。

歳が改たまつた時、健三は一夜のうちに變つた世間の外觀を、
 氣のなきような顔をして眺めた。

「すべて余計な事だ。人間の小刀細工だ。」

實際彼の周囲には大晦日も元日もなかつた。悉く前の年の引
 続きばかりであつた。彼は人の顔を見て御目出とうというのさえ
 厭になつた。そんな殊更な言葉を口にするよりも誰にも会わずに
 黙っている方がまだ心持が好かつた。

彼は普通の服裝をしてぶらりと表へ出た。なるべく新年の空氣
 の通わない方へ足を向けた。冬木立と荒た畠、藁葺屋根と細
 い流、そんなものが盆槍した彼の眼に入つた。しかし彼はこの

可憐な自然に対してももう感興を失っていた。

幸い天気は穏かであつた。空風の吹き捲らない野面には春に

似た靄が遠く懸つていた。その間から落ちる薄い日影もおつとり

と彼の身体を包んだ。彼は人もなく路もない所へわざわざ迷い込

んだ。そうして融けかかった霜で泥だらけになつた靴の重いのに

気が付いて、しばらく足を動かさずにいた。彼は一つ所に佇立ん

でいる間に、気分を紛らそうとして絵を描いた。しかしその絵が

あまり不味いので、写生はかえつて彼を自暴にするだけであつた。

彼は重たい足を引き摺つてまた宅へ歸つて来た。途中で島田に遣

るべき金の事を考えて、ふと何か書いて見ようという気を起した。

赤い印気で汚ない半紙をなすくる業は漸く済んだ。新らしい仕

事の始まるまでにはまだ十日の間があつた。彼はその十日を利用しようとした。彼はまた洋筆^{ペン}を執つて原稿紙に向つた。

健康の次第に衰えつつある不快な事実を認めながら、それに注意を払わなかつた彼は、猛烈に働らいた。あたかも自分で自分の身体に反抗でもするように、あたかもわが衛生を虐待するように、また己^{おの}れの病気に敵^{かたきうち}討^うでもしたいように。彼は血に餓^うえた。しかも他^{ひと}を屠^{ほふ}る事が出来ないのでやむをえず自分の血を啜^{すす}つて満足した。

予定の枚数を書きおえた時、彼は筆を投げて畳の上に倒れた。

「ああ、ああ」

彼は獣^{けだもの}と同じような声を揚げた。

書いたものを金に換える段になって、彼は大した困難にも遭遇せずに済んだ。ただどんな手続きでそれを島田に渡して好いかちよつと迷った。直接の会見は彼も好まなかった。向うももう参上りませんといい放った最後の言葉に対して、彼の前へ出て来る気のない事は知れていた。どうしても中へ入って取り次ぐ人の必要があつた。

「やつぱり御兄さんおあにいか比田さんに御頼みなさるより外に仕方がないでしょう。今までの行掛りもあるんだから」

「まあそれでもするのが、一番適當なところだろう。あんまり有難くはないが。公けな他人を頼むほどの事でもないから」

健三は津守坂つのかみざかへ出掛て行つた。

「百円遣るの」

驚ろいた姉は勿^{もつ}体^{たい}なさそうな眼を丸くして健三を見た。

「でも健ちゃんなんぞは顔が顔だからね。そうしみつたれた真似^{まね}も出来まいし、それにあの島田^{じま}って爺^{じい}さんが、ただの爺さんと違^{ちが}つて、あの通りの悪党^{わる}だから、百円位仕方がないだろうよ」

姉は健三の腹にない事まで一人合点^{ひとりがてん}でべらべら喋^{しゃべ}舌^べつた。

「だけど御正月早々御前さんも随分好^つい面^らの皮さね」

「好^こい面^いの皮鯉^{こい}の滝登^{たきのぼ}りか」

先刻^{さつぎ}から傍^{そば}に胡坐^{あぐら}をかいて新聞を見ていた比田は、この時始めて口を利いた。しかしその言葉は姉に通じなかった。健三にも解^わらなかつた。それをさも心得顔にあははと笑う姉の方が、健三に

はかえつて可笑おかしかった。

「でも健ちゃんは好いね。御金を取ろうとすればいくらでも取れるんだから」

「こちとらとは少し頭の寸法が違うんだ。右大将うだいしょう頼朝公よりともこうの髑しやりこうべと来ているんだから」

比田は変へん挺ていな事ばかりいった。しかし頼んだ事は一も二もなく引き受けてくれた。

百二

比田と兄そとが揃そろつて健三の宅うちを訪問おとずしたのは月の半ば頃であつた。

松飾の取り払われた往来にはまだどこことなく新年の香においがした。暮も春もない健三の座敷の中に坐すわった二人は、落付おちつかないように其所こいらを見廻した。

比田は懷から書付を二枚出して健三の前に置いた。

「まあこれで漸ようやく片が付きました」

その一枚には百円受取った事と、向後一切の關係を斷つという事が古風な文句で書いてあつた。手蹟ては誰のとも判断が付かなかつたが、島田の印は確かに捺おしてあつた。

健三は「しかる上は後日に至り」とか、「后日ごじつのため誓約件くだんの如し」とかいう言葉を馬鹿にしながら黙読した。

「どうも御手数おてすうでした、ありがとうございます」

「こういう証文さえ入れさせて置けばもう大丈夫だからね。それでないと何時まで蒼蠅うるさく付け纏まとわられるか分つたもんじやないよ。ねえ長さんちよう」

「そうさ。これで漸く一安心出来たようなものだ」

比田と兄の会話は少しの感銘も健三に与えなかった。彼には遣やらないでもいい百円を好意的に遣つたのだという氣ばかり強く起つた。面倒を避けるために金の力を藉かりたとはどうしても思えなかった。

彼は無言のままもう一枚の書付を開いて、其所に自分が復籍する時島田に送つた文もんごん言を見出した。

「私わたくし儀今般貴家御離縁に相成あいなり、実父より養育料差出候そうろうにつ

いては、今後とも互に不実不人情に相成ざるよう心掛たくと存候ぞんじ」

健三には意味も論理ロジックも能く解らなかつた。

「それを売り付けようというのが向うの腹さね」

「つまり百円で買つて遣つたようなものだね」

比田と兄はまた話し合つた。健三はその間に言葉を挟むさしはさのさえ厭いやだつた。

二人が歸つたあとで、細君は夫の前に置いてある二通の書付を開いて見た。

「こつちの方は虫が食つてますね」

「反故ほごだよ。何にもならないもんだ。破いて紙屑籠かみくずかごへ入れてし

まえ」

「わざわざ破がなくっても好いでしよう」

健三はそのまま席を立つた。再び顔を合わせた時、彼は細君に向つて訊いた。――

「先刻さつきの書付はどうしたい」

「筆筒たんすの抽斗ひきだしにしまつて置きました。」

彼女は大事なものでも保存するような口振くちぶりでこう答えた。健三は彼女の所置を咎とがめもしない代りに、賞ほめる気にもならなかつた。

「まあ好よかつた。あの人だけはこれで片が付いて」

細君は安心したといわぬばかりの表情を見せた。

「何が片付いたって」

「でも、ああして証文を取って置けば、それで大丈夫でしょう。もう来る事も出来ないし、来たって構い付けなければそれまでじやありませんか」

「そりや今までだって同じ事だよ。そうしようと思えば何時でも出来たんだから」

「だけど、ああして書いたものをこつちの手に入れて置くと大変違いますわ」

「安心するかね」

「ええ安心よ。すっかり片付いちやったんですもの」

「まだなかなか片付きやしないよ」

「どうして」

「片付いたのは上部うわべだけじゃないか。だから御前は形式張った女だというんだ」

細君の顔には不審と反抗の色が見えた。

「じゃどうすれば本当に片付くんです」

「世の中に片付くなんてものは殆んどほとありやしない。一遍起った事は何時までも続くのさ。ただ色々な形に変わるから他ひとにも自分にも解らなくなるだけの事さ」

健三の口調は吐き出すように苦々しかった。細君は黙って赤ん坊を抱き上げた。

「お好きな子だ好きな子だ。御父さまの仰おっしやる事は何だかちつとも分りやしないわね」

細君はこういいいい、
幾^{いく}度^{たび}か赤い頬^ほに接吻^{せつぶん}した。

青空文庫情報

底本：「道草」岩波文庫、岩波書店

1942（昭和17）年8月25日第1刷発行

1990（平成2）年4月16日第43刷改版発行

1995（平成7）年2月15日第49刷発行

底本の親本：「漱石全集 第6巻」岩波書店

1985（昭和60）年

初出：「朝日新聞」

1915（大正4）年6月3日～9日14日

入力：らんむろ・さてい

校正：細渕紀子

1999年1月22日公開

2013年3月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

道草

夏目漱石

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>